

平成 30 年度
神戸グローバルチャレンジプログラム
自己点検・評価報告書

国立大学法人神戸大学 大学教育推進機構
神戸グローバルチャレンジプログラム委員会
令和元年 6 月

目 次

1. 神戸グローバルチャレンジプログラムの概要	3
1-1. 神戸大学の教育改革と神戸グローバルチャレンジプログラム	4
1-1-1. クォーター制の導入	4
1-1-2. 神戸スタンダードと教養教育改革	5
1-2. 事業の目標と取組計画	6
1-2-1. 事業概要と成果指標	6
1-2-2. 事業年度（5年）を通じての取組計画概要	6
（1）プログラム内容の開発及び実施	7
（2）学修の実施と成果の把握・指標	7
（3）学生等への周知や広報、FD・SD の実施、他大学への情報提供	8
（4）プログラムの活動資金の確保	8
（5）学生の主体的な活動企画	8
1-3. 事業の実施体制	8
1-3-1. 学内の実施体制	8
（1）神戸グローバルチャレンジプログラム委員会	9
（2）神戸グローバルチャレンジプログラムコーディネーターの配置	9
（3）大学教育研究推進室の役割	9
（4）大学教育推進委員会による適切性の担保	9
（5）全学評価・FD 委員会等における学内点検	9
（6）適切な事業実施のための事務体制	9
（7）学内各センターとの連携	10
（8）同窓会及び海外同窓会ネットワークとの連携	10
（9）グローバル企業や国際機関との連携	10
（10）アドバイザリーボードの活用	10
1-3-2. 評価体制と PDCA サイクル	10
2. 平成 30 年度 of 取組	11
2-1. プログラムの実施と自己評価	12
2-1-1. プログラム実施計画	12
2-1-2. プログラムの取組実績・具体的成果	13
2-2. 各コースの実施と自己評価	20
（1）グローバル都市ニューヨークのコミュニティと文化を学ぶ（ニューヨークコース）	21
（2）ハンブルク異文化理解コース（ハンブルクコース）	23
（3）カナダ・トロントの多文化社会研究（トロント大学コース）	25
（4）アジア・フィールドワークコース（リアウ州）（アジア・フィールドワークコース（リアウ））	27
（5）アジア・フィールドワークコース（スラウェシ州）（アジア・フィールドワークコース（スラウェシ））	29
（6）理学グローバルチャレンジプログラム UPLB コース（理学 UPLB コース）	31
（7）理学グローバルチャレンジ Nanyang/Sci コース（理学 Nanyang コース）	33

(8) ギャップターム海外協定校派遣コース (ギャップターム海外協定校派遣コース)	35
(9) UPLB 農学英語コース (UPLB コース)	37
(10) EU フィールドワークコース (KUPES コース)	39
(11) グローバルチャレンジコース(学生企画型)タイプA (グローバルチャレンジコースA)	41
(12) グローバルチャレンジコース(学生企画型)タイプB (グローバルチャレンジコースB)	45
(13) フィールドワークチャレンジコース (フィールドワークコース)	48
(14) インターンシップチャレンジコース (インターンシップコース)	53
(15) ボランティアチャレンジコース(ボランティアコース)	56
(16) 理学グローバルチャレンジ Tsinghua/Life コース(理学 Tsinghua コース).....	58

3. プログラム全体の自己評価 —成果と課題—.....	59
3-1. プログラム目標能力に関する自己評価.....	60
3-1-1. ルーブリック指標に基づく自己評価(平成 30 年度参加学生)	61
3-1-2. ルーブリック指標に基づく自己評価の経年変化 (平成 29 年度参加学生)	83
3-1-3. ルーブリック指標に基づく自己評価の経年変化 (平成 28 年度参加学生)	92
3-2. プログラム参加後のアンケート結果.....	102
3-3. 大学教育再生加速プログラム(AP)平成 30 年度フォローアップ報告書.....	113
3-4. プログラム全体の自己評価総括.....	115
(1) 自己評価総括.....	115
(2) 課題への対応状況.....	115

1. 神戸グローバルチャレンジプログラムの概要

1-1. 神戸大学の教育改革と神戸グローバルチャレンジプログラム

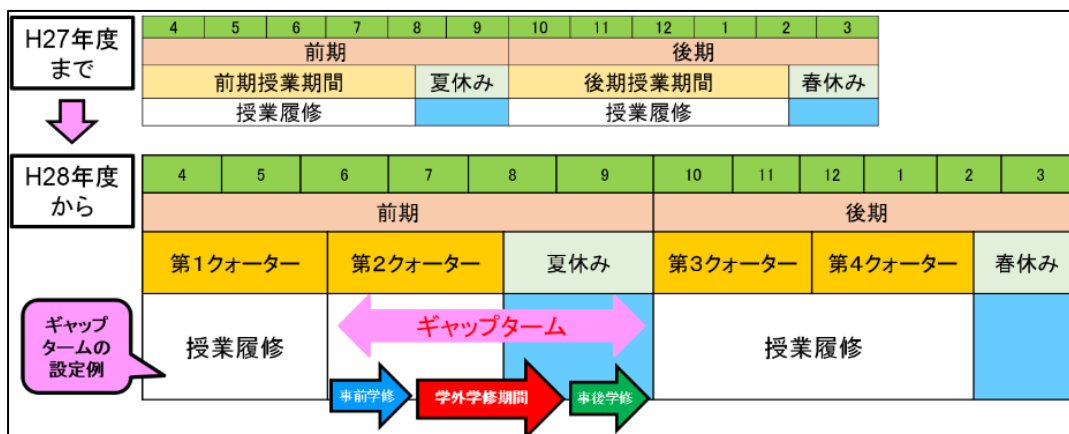
神戸大学はこれまで、人文社会科学系学部を中心とする「経済社会を牽引するグローバル人材育成支援」プログラムを始め、各学部でグローバル人材育成のために留学を組み込んだ様々な取組を行ってきた。これらの取組を促進するとともに、対象を全学生へと拡大するため、本学では、学士課程の学生を「自ら地球的課題を発見しその解決にリーダーシップを発揮できる人材」（「課題発見・解決型グローバル人材」）に育成することを目標に、平成28年4月から、以下のとおり教育改革を実施している。神戸グローバルチャレンジプログラム（以下「神戸GCP」という。）は本学の教育改革を活用し、その効果を大きく高めるプログラムである。



1-1-1. クォーター制の導入

前期・後期の授業期間をそれぞれ分割し、各8週で授業を行うクォーター制を導入した。これにより、週1回または週2回8週の授業による集中的な学修を可能とするとともに、特定のクォーターをギャップタームとして利用することが可能となった。また、学生はギャップタームを活用することにより、海外短期留学、海外のサマースクール、海外インターンシップ、ボランティア等の様々な学外学修において多様な経験をし、4年間で卒業することが可能となった。

神戸GCPにおいては、このクォーター制により生じるギャップタームを利用し、学生が1・2年次に国際的なフィールドで行うインターンシップなどの学外学修を促進する。



1-1-2. 神戸スタンダードと教養教育改革

神戸大学では、神戸大学の学生が卒業時に身につけるべき以下の能力を新たに「神戸スタンダード」として定め、神戸スタンダードの修得を教養教育の学修目標とした。

- 複眼的に思考する能力：専門分野以外の学問分野について基本的なものの考え方を学ぶことを通して複眼的なものの見方を身につける
- 多様性と地球的課題を理解する能力：多様な文化、思想、価値観を受容するとともに、地球的課題を理解する能力を身につける
- 協働して実践する能力：専門性や価値観を異にする人々と協働して課題解決にあたるチームワーク力と、困難を乗り越え目標を追求し続ける力を身につける

また、「神戸スタンダード」を全学部生が身につけるよう、主として1・2年生が学修していた教養科目を見直し、平成28年4月から「基礎教養科目」及び「総合教養科目」に再編した。さらに、平成29年度より、高学年の学部生を対象とする新たな科目として、「高度教養科目」を設け、4年間を通じて学ぶ教養教育のカリキュラムを提供している。「神戸スタンダード」の各能力と各教養科目は、以下のように対応している。



- ・「複眼的に思考する能力」
⇒⇒⇒「基礎教養科目」において身につける目標
- ・「多様性と地球的課題を理解する能力」
⇒⇒⇒「総合教養科目」において身につける目標
- ・「協働して実践する能力」
⇒⇒⇒「高度教養科目」において身につける目標

神戸GCPでは、学生の学外活動による学修に事前学修・事後学修を組み合わせることで学修成果を高め、「総合教養科目」の「グローバルチャレンジ実習」として単位授与を行う。このことにより、神戸GCPは体系的な教養教育のカリキュラム内に位置づけられるとともに、全学部生の受講が可能となっている。

1-2. 事業の目標と取組計画

1-2-1. 事業概要と成果指標

神戸 GCP は、学部 1・2 年生の 1 つのクォーターをギャップタームとして設定し、国際的なフィールドで学生が行う自主的な活動を、「グローバルチャレンジ実習」として単位授与するプログラムである。その目的は、参加学生が低年次において自らの体験に基づき「神戸スタンダード」の必要性を体感し、「学びとは何か」を主体的に考え、「学びの動機づけ」を得ることである。学生は国際的なフィールドでの活動や異文化環境下での体験に基づき、外国語でのコミュニケーション能力を高めるとともに、「課題発見・解決能力」の必要性を体感することができる。このことにより、課題解決に向けた意欲を高め、学生自らが学修目標・計画を立てて活動に取り組み、主体的な学修姿勢を大学入学後の早い時期から身につけることが期待される。また、学生は本プログラムに参加し、主体的に活動することを通じて、本学が独自に設定した「チームワーク力」「自己修正力」「課題挑戦力」を身につけることができる。

【独自指標】

I) プログラムに参加した学生がプログラム終了後に身に付けた能力

「チームワーク力」「自己修正力」「課題挑戦力」（ループリックによる測定）

	目標	実績
--	----	----

水準 2 に達した学生	: H30 50%、	62.7%、H31 75%
-------------	------------	---------------

水準 3 に達した学生	H30 10%、	30.8%、H31 30%
-------------	----------	---------------

II) プログラムに参加後、在学中に留学を含む海外での学修活動に参加した学生の割合

目標 H30 20.0%、実績 H30 50.7% (102/201)、H31 50.0% (250/500)

【必須指標】

i) 長期学外学修プログラムに参加する学生の割合 [% (参加学生数 / 全学生数)]

目標 H30 2.17%、実績 H30 1.01% (117/11,596)、H31 2.53% (300/11,849)

長期学外学修プログラムに参加する学生の割合 [% (参加学生数 / 1、2 年生の学生数)]

目標 H30 4.82%、実績 H30 2.23% (117/5,238)、H31 5.67% (300/5,294)

ii) 上記プログラムを経た学生の成績評価 [プログラムに参加した学生と不参加学生の GPA の平均の差]

目標 H30 0.34、実績 H30 0.25、H31 0.41

iii) 退学率 [% (退学者 (除籍者を含む) / 在籍者数)]

目標 H30 1.00%、実績 H30 1.10% (128/11,596)、H31 0.98% (116/11,849)

iv) 学生の授業外学修時間 [時間数 (1 週間当たり (時間) ~ 教務情報システムを利用し、半期毎に全学部生にアンケートを行って把握)]

	目標	実績
--	----	----

全学生	: H30 6.2 時間、	9.5 時間、H31 6.5 時間
-----	---------------	-------------------

プログラム参加学生	: H30 10.1 時間、	11.5 時間、H31 12 時間
-----------	----------------	-------------------

v) 進路決定の割合 [% ((就職決定者数 + 進学者数) / 卒業者数)]

目標 H30 93.37%、実績 H30 95.00% (2,489/2,620)、H31 94.09% (2,500/2,657)

VI) 学生が企画する活動数 (活動数) (大学関与分のみ)

目標 H30 124 件、実績 H30 124 件、H31 150 件

1-2-2. 事業年度 (5 年) を通じての取組計画概要

神戸 GCP の実施に当たっての取組計画は、以下のとおりである。

（１）プログラム内容の開発及び実施

神戸 GCP として実施する取組は、各担当教員が現地視察及び受入先との協議等により開発を進め、同プログラム委員会（以下、「委員会」という。）において認定する。認定基準は、本プログラムで身に付けることが期待される３つの能力「チームワーク力」「自己修正力」「課題挑戦力」に基づくものとする。

１・２年生に同プログラムに参加することで学修への動機づけを行い、上位学年において、海外留学等の国際的なフィールドでの更なる活動にチャレンジする力を学生が修得することをねらいとする。

神戸 GCP では、開講コースを「フィールドワーク型」「サマースクール型」「学生企画型」「インターンシップ型」「ボランティア型」の５つのタイプ（型）に分類して実施している。プログラムに参加する全ての学生には、学修目標を定めたチャレンジシートを作成することを求める。学生は、神戸グローバルチャレンジプログラムコーディネーター（以下、コーディネーター）またはアドバイザー教員の指導の下、事前・渡航中・事後の学修を行い、学修成果をまとめる。学生がまとめた学修成果は、コーディネーターまたはアドバイザー教員が評価し、委員会に報告し、「総合教養科目」の中に位置付けられる「グローバルチャレンジ実習」として単位授与（１～２単位）を行う。

（２）学修の実施と成果の把握・指標

・事前学修・事後学修

学外活動学修の前後に、事前・事後学修を実施する。学生は事前学修時に学修目標を定めたチャレンジシートを作成するほか、海外等学外へ出る際の危機管理学修の受講を義務化し、心構え、安全管理について学修する。海外学修に参加する学生には、海外旅行保険への加入を義務付けるとともに、「留学生危機管理システム」の登録を義務付ける。また、事後学修時に、事前に立てた目標の達成度を振り返るリフレクションシートを提出する。学外学修で得た経験を基にグローバル人材に必要な能力や自らの能力・可能性に対する「気づき」を有し、今後の学修へのモチベーションを高める動機づけにつなげる。

全コースとも、主体的な学修を身に付けさせるため、アクティブ・ラーニングを取り入れた学修を行っている。

・全体報告会

プログラム参加者主催による全体報告会を開催する。学生同士がネットワークを構築し、互いに活動の成果を振り返り刺激し合うことでモチベーションの維持を図り、上位学年において、海外留学等の国際的なフィールドでの更なる活動にチャレンジする力を付けさせる。

・学修ポートフォリオの利用

神戸大学学修支援システム BEEF を本プログラムの学修ポートフォリオとして活用する。チャレンジシートの提出・保存、事前学修として安全管理マニュアル等の配付、SNS 機能による海外等滞在中の指導、事後学修時のリフレクションシートの提出に BEEF を活用し、参加学生の学修状況・学修時間・学修成果の把握と保管を行う。

また、参加後の経年変化については、平成 30 年度から、従来の BEEF Venture に代えて、神戸大学教務情報システム「うりぼーネット」を活用して、参加翌年度から卒業年度までのルーブリック及び海外学修関連活動状況について、調査することとする。

・英語外部試験の活用

全学部生が入学直後に英語外部試験を受験し、その結果を本プログラム対象者の選抜に利用する。

・学修成果の評価指標

学生の質的な成長について、「チームワーク力」「自己修正力」「課題挑戦力」の３つの力を神戸 GCP

独自の指標とし、参加学生がルーブリックで自己測定する。事前学修・学外活動・事後学修などの実績（学修ポートフォリオ）と報告会（プレゼンテーションと質疑応答）を基に、多面的な評価を行う。

（３）学生等への周知や広報、FD・SDの実施、他大学への情報提供

本プログラムのウェブサイトを作成し、学生への周知や広報を行う。また、プログラムの成果を可視化してウェブサイト等で公表する。

また、派遣先での安全管理や異文化理解等、国際的なフィールドでの活動に関する知識や方法について十分な知識が必要となるため、教職員に対して海外研修や計画的なFD・SDを実施し、学生の国際的なフィールドでの学外学修を的確にサポートできる人材養成を行う。

大学教育再生加速プログラム(AP)採択校をはじめ、他大学等への情報提供を行って取組の波及を図り、平成31年度には報告書を作成して公表する。

（４）プログラムの活動資金の確保

プログラムの活動において、渡航費等は学生が自ら負担することが原則であるが、より多くの学生が参加できるよう、以下のとおり資金を確保する。

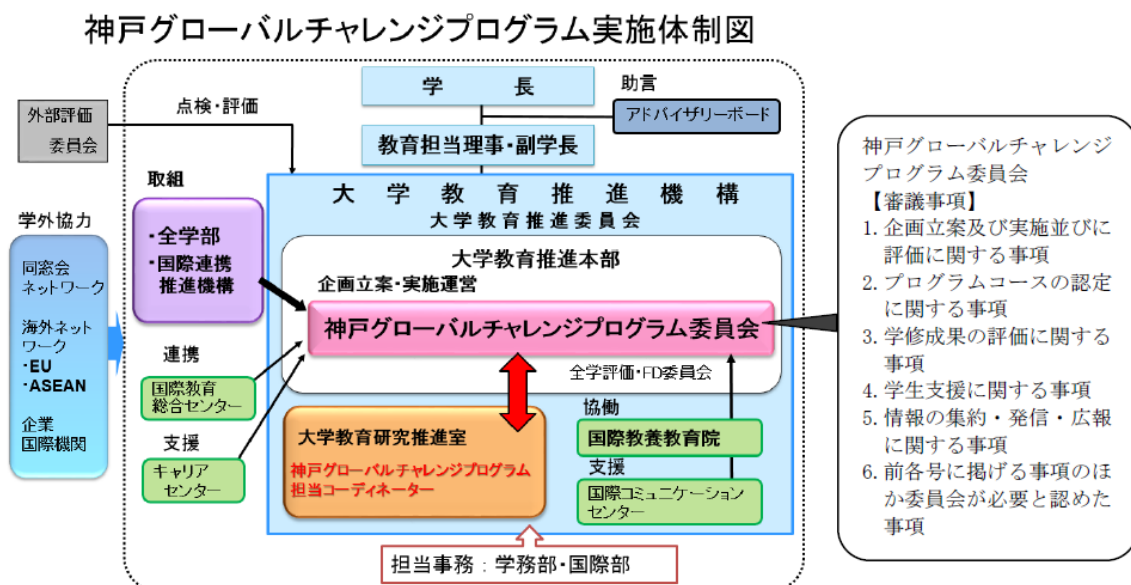
- ・神戸大学基金
- ・全学及び各学部後援会・同窓会からの援助
- ・日本学生支援機構等の各種奨学金

（５）学生の主体的な活動企画

本プログラムに参加した学生は、海外等のフィールドで活動を行った経験に基づき、主体的な活動に取組み、課題解決に向けた意欲を高めることが期待できる。また、全体報告会等における学修成果の報告、アクティブ・ラーニングの拡大及びラーニングコモンズの活用により、プログラム不参加学生への波及効果が期待される。これらの取組により、学修意欲の高い参加学生による自主ゼミやセミナー、海外フィールドワーク等の多様な主体的活動の増加が期待される。

1-3. 事業の実施体制

1-3-1. 学内の実施体制



（１）神戸グローバルチャレンジプログラム委員会

本学の教学マネジメントを行う大学教育推進機構の下に、「神戸グローバルチャレンジプログラム委員会（以下、「神戸 GCP 委員会」という。）」を設置している。神戸 GCP 委員会は、大学教育推進本部副本部長、国際教養教育院長、国際コミュニケーションセンター長、神戸グローバルチャレンジプログラムを実施する部局から選出された教員各 1 人、キャリアセンター長、国際連携推進機構国際教育総合センター長、大学教育研究推進室長、神戸グローバルチャレンジプログラム担当コーディネーター、国際部長、学務部長により構成し、本プログラムの実施責任者である大学教育推進本部副本部長（学長補佐（グローバル教育担当））を委員長としている。

神戸 GCP 委員会は、大学教育研究推進室及び国際教養教育院と協働し、本事業の企画・立案、運営及び実施について全学的な意思決定を行う。具体的には、各コースの審査・認定・予算配分及びプログラムの運営についての意思決定を行うとともに、自己点検・評価を行っている。

（２）神戸グローバルチャレンジプログラムコーディネーターの配置

神戸グローバルチャレンジプログラム担当コーディネーター（以下、「コーディネーター」という。）を「大学教育研究推進室」に配置し、全学を対象としたコースの企画・立案や受入先との交渉、調整等を行い、平成 30 年度は、19 の国・地域で学外学修を展開した。また、海外での学外学修活動に必要な危機管理学修をプログラム全体で実施しているほか、各種 FD・講演会等の企画・実施、本プログラムに関する説明会、参加学生による全体報告会・パネル展示、ホームページやパンフレットによる広報・情報発信等、コーディネーターが本プログラムの中心となり様々な取組を推進している。

（３）大学教育研究推進室の役割

本学の教育全体を推進する「大学教育研究推進室」は、ルーブリック指標や学修ポートフォリオの作成・活用により、本事業における学修成果の明確化及び向上に努めている。また室に配置されるコーディネーターを中心に、教育的効果の高いプログラムの企画・立案を行っている。

（４）大学教育推進委員会による適切性の担保

神戸 GCP 委員会において決定した本事業の人材配置については、本学の全部局教育担当責任者により構成され、全学における教育のマネジメントを行う「大学教育推進委員会」において審議・承認し、また神戸 GCP 委員会での決定事項を「大学教育推進委員会」にて報告・点検することで、その適切性を全学的に担保している。

（５）全学評価・FD 委員会等における学内点検

本事業は、神戸 GCP 委員会のほか、全学の教育を担う「大学教育推進委員会」が事業の全体管理を、また、全学の教育評価・FD を担当する「全学評価・FD 委員会」が本事業の点検・評価・改善についての助言を行い、学内の PDCA サイクルを確立している。

（６）適切な事業実施のための事務体制

本事業の業務は、全学の教育事務を統括する学務部、国際交流を担当する国際部及び各コースを実施する各部局が担当している。また、本事業に関わる予算については、学務部会計担当部署による組織的な管理と適切な執行を行っている。

（７）学内各センターとの連携

学生のキャリア支援を行っている「キャリアセンター」は、企業との繋がりや、インターンシップ及びボランティアの実施、運営における豊富な経験を活かし、本事業の企画・実施部局への助言役や仲介役としてコースの円滑な実施を支援している。また、全学の外国語教育を担当する「国際コミュニケーションセンター」は、本事業の柱の一つである外国語能力の向上・強化に関わる教育プログラムを推進している。

（８）同窓会及び海外同窓会ネットワークとの連携

一部の学外学修は、国籍や専門を超えた本学の「海外同窓会ネットワーク（13 拠点：東アジア・東南、中央アジア・欧州）」等を活用してプログラムの更なる展開を行っている。特に、海外同窓会ネットワークを統括している国際教育総合センターと密接な連携の下、これら海外同窓会ネットワークを活用して、派遣国を開拓し、プログラムの更なる拡充を目指している。

（９）グローバル企業や国際機関との連携

国際機関やグローバルに事業を展開する企業と本学とのネットワークを最大限に活用し、連携して多様なコースを開発・実施しており、平成 30 年度は 6 部局でフィールドワークやインターンシップなどの 15 コースを実施した。

（10）アドバイザーボードの活用

社会の意見を本学の教育研究に反映させるため、平成 27 年度 4 月に学長の下に設置した「アドバイザーボード」を活用し、産業界・学界・官界・政界等の幅広い視点から本事業全体についての助言を受け、事業全体に反映させ、プログラムの質向上を図ることとしている。

1-3-2. 評価体制と PDCA サイクル

本プログラムの効果的な展開のため、「神戸グローバルチャレンジプログラム委員会」において、各実施コース及びプログラム全体に関する自己点検・評価を行っている。また、全学の教育評価・FDを担当する「全学評価・FD 委員会」が本事業を点検して評価・改善に関する助言を行うとともに、全学の教育を担う「大学教育推進委員会」が、事業の全体を管理し、学内の PDCA サイクルを確立している。

さらに、学外の有識者による本プログラムの点検・評価を行うために、国際的な活動実績のある社会人や国際交流の専門家、教育関係者等で構成される「外部評価委員会」を設置している。

2. 平成 30 年度の取組

2-1. プログラムの実施と自己評価

平成 30 年度において、本プログラムでは以下のとおり取組を行った。

なお、2-1-2 の自己評価においては、取組計画に対し 5 段階（「5：計画を大幅に超えて実施できた」「4：計画を十分実施できた」「3：計画どおり実施できた」「2：計画どおり十分に実施できなかった」「1：実施できなかった」）で評価を行った。

2-1-1. プログラム実施計画

平成 30 年度は補助金調書において次のとおりプログラムの実施を計画した。

・平成 30 年度実施計画

（総論）本補助事業の本年度の目的は、補助事業全体の目的を達成するために、下記の取組を実施することである。

- 1) 平成 27～29 年度に構築した本プログラムの各コースを実施する。実施に当たっては、平成 29 年度に受審した本補助事業の中間評価の結果を踏まえて、事業の改善や本プログラムの各コースの更なる充実を図るとともに、広報を充実することにより参加学生の増加を図る。
- 2) 事業の継続・発展を目指し、平成 31 年度実施に向けて新たなコースの開拓・調査を行い派遣先の拡充を図る。
- 3) 本プログラムのシンポジウムを開催して、本プログラムを中心に本学における教育改革の取組・成果を社会に発信する。

（具体的な取組内容）

- ①教育改革の一環として高度教養科目を開講する。
- ②全学部 1 年生を対象に英語外部試験を実施する。
- ③プログラム担当のコーディネーター等教職員を雇用する。
- ④プログラムに係るウェブサイトを保守・更新する。
- ⑤神戸グローバルチャレンジプログラム委員会を開催する。
- ⑥プログラムの各コースを実施する。
- ⑦プログラム実施に係る TA や SA、学生補佐員を雇用する。
- ⑧学生受入先の調査を行う。
- ⑨事業の中間評価を基に、事業の改善について協議を行う。
- ⑩プログラム参加学生による全体報告会を実施する。
- ⑪外国人講師を雇用し、学生向けの英語力向上セミナーを実施する。
- ⑫教職員への FD・SD を実施する。
- ⑬次年度に実施するコースをグローバルチャレンジプログラム委員会で認定する。
- ⑭次年度以降の事業の在り方について検討を行う。
- ⑮神戸グローバルチャレンジプログラムのシンポジウムを開催する。
- ⑯ループブックを活用して、プログラム参加学生の評価を行う。また、評価結果の経年変化を分析する。
- ⑰パンフレットを作成し、学生への配布と学内外への広報を行う。
- ⑱総合科目 I 「アジアへの誘い」を開講する。
- ⑲前年度参加学生とのプログラム意見交換会を実施する。
- ⑳事業の自己点検・評価を神戸グローバルチャレンジプログラム委員会において行う。
- ㉑事業の自己点検・評価を全学評価・FD 委員会、大学教育推進委員会において行う。

2-1-2. プログラムの取組実績・具体的成果

(総論)

【自己評価】4：計画を十分実施できた

取組実績

補助事業全体の目的を達成するために、平成30年度は主として次の①～③の取組を実施した。

- ①平成29年度の神戸グローバルチャレンジプログラム委員会において認定された16コース(大学教育推進機構、国際人間科学部、理学部、工学部、農学部、国際教育総合センターにて企画)で参加学生を募集し、うち15コースを実施した。計117名の学生が本プログラムに参加し、うち115名が海外で学外学修活動を行った。
- ②平成31年度に実施するプログラムのコースについて検討を行い、9月に開催した神戸グローバルチャレンジプログラム委員会において、実施コースを認定した。その後、平成31年度から開始する各コースの準備及び学生募集を開始した。
- ③11月3日に、「世界へ飛び出す学生たち～Global Challenge from KOBE」をテーマとした公開シンポジウムを開催し、これまでの本プログラムの取組と成果報告を行い、社会へ発信した。

具体的な成果

- ①参加後のアンケートでは、参加コースについて高い満足度(「満足」68.6%、「概ね満足」30.4%)を得るとともに、本プログラムへの参加を契機としたさらなる留学や関心を持ったテーマについて、「より長期的な留学等に挑戦したい」、「より深く学修したい」について、ともに9割近い回答を得ており、長期留学等の国際的な活動への更なるチャレンジやより専門的なテーマへの学修意欲の向上等、本プログラムが全体を通じて設定している「学びの動機づけ」という目標に対して順調に成果が現れていることが確認できた。
- ②各部局が学生の活動先と協定等を交わして企画したコースを、教育効果の観点を踏まえて委員会で審査し、本プログラムにおけるコースとして認定することで、各コースの教育の質を保証することができた。また、平成31年度は、6部局等(大学教育推進機構、国際人間科学部、理学部、工学部、農学部、国際教育総合センター)で17コースを実施することとし、本事業の継続・発展を図ることが可能となった。
- ③公開シンポジウムでは、これまでの本プログラムの取組と成果報告として、本プログラムの参加学生及び学内の関連プログラムの参加生の成果発表、学外からの講演を行った。学内外から約100名の参加があり、関係者だけでなく、一般の方へも広く、本学のグローバル化の展望等を発信する機会となった。特に、「学生による発表」では、プログラムの学修成果が生かされている様子やプログラム参加がきっかけとなったキャリア選択についての報告があり、シンポジウム参加者のアンケートからも高い満足度(「プログラムに参加した学生さんが成長していく過程がすごく感じられた。」「実際の経験の質が優れていることを確認でき、プログラムの価値を確信できた。」等)を得た。

(具体的な取組内容)

- ①教育改革の一環として高度教養科目を開講する。

取組実績

平成28年度に教育改革の一環として、クォーター制の開始、教養教育のカリキュラムの再編、及び初年次セミナーの導入を行っており、本年度から3年次対象の高度教養科目を本格開講した。

具体的な成果

専門科目を学修した様々な学部の高年次生が、共通の課題について、協働して解決方法を探ることにより、「分野融合」「文理融合」の意義、協働の大切さを学ぶ機会を提供した。

②全学部1年生を対象に英語外部試験を実施する。

取組実績

全学部の新入生を対象に、4月に英語外部試験（TOEIC または TOEFL）を実施し、1年次生 2,611 名中 2,527 名が受験した。

具体的な成果

英語外部試験を受験させたことで、学生に自己の英語能力を認識させ、自主的な英語学修を促進することができた。また、英語外部試験の結果をプログラム参加学生の選考、奨学金の選考と事前学修に活用することができた。

③プログラム担当のコーディネーター等教職員を雇用する。

取組実績

本プログラム担当のコーディネーターを大学教育研究推進室に引き続き配置し、また、事業実施を補佐する職員を雇用した。

具体的な成果

本事業の中心的な役割を担うプログラム担当のコーディネーターを雇用することで、コースの企画・立案・実施や受入先との交渉、調整を行うことが可能となり、学生の学外学修を順調に実施することができた。また、平成 30 年度はシンポジウムを開催するにあたり、事務作業を補助するために非常勤職員を雇用したことで、円滑に本事業を実施することができた。

④プログラムに係るウェブサイトを保守・更新する。

取組実績

各コースの募集案内や参加した学生の体験談、各種セミナーや研修の案内・実施報告など、本プログラムの取組に関する最新の情報を従来のウェブサイトに掲載することに加え、本プログラムの Facebook を立ち上げ、学内外に広く情報発信した。

具体的な成果

平成 30 年度は、本プログラムの Facebook を立ち上げ、従来のホームページに加え、若い世代の学生たちに身近な SNS による発信も行うことで、これまで以上に本プログラムの詳細な内容を広く学内外に情報発信することができ、学内における本プログラムの認知度を高めることで参加学生を増加させることができた。セミナーの案内やコースの紹介・募集、学生の体験談や自己評価・外部評価の報告書を掲載するなど、従来のウェブサイトも適宜更新し、充実を図っている。

⑤神戸グローバルチャレンジプログラム委員会を開催する。

取組実績

神戸グローバルチャレンジプログラム委員会を 7 回開催した。委員会では、平成 31 年度実施コースの審査・認定、予算執行、参加学生の単位授与、奨学金制度の見直し、シンポジウム開催に係る事項、関連する制度の整備、危機管理体制、学生及び学内外への本プログラムの周知方法の検討及びその他本プログラムの運営についての意思決定を行った。

【平成 30 年度神戸 GCP 委員会 審議事項】

第 1 回委員会（平成 30 年 4 月 13 日（金）開催）

1. 平成 30 年度神戸 GCP の予算配分について
2. 平成 30 年度大学改革推進等補助金調書について
3. 平成 29 年度大学改革推進等補助金の残額調整について
4. 学生の単位授与について
5. 平成 29 年度実績報告書について
6. 平成 29 年度自己点検・評価報告書について

第 2 回委員会（平成 30 年 6 月 1 日（金）開催）

1. 学生の成績評価報告について
2. 平成 30 年度神戸 GCP コースの変更について
3. 神戸 GCP 奨学金の支給基準等について
4. 総合教養科目「グローバルチャレンジ実習」の履修登録について
5. 神戸 GCP シンポジウムの開催について
6. 平成 30 年度神戸 GCP 秋フェアの実施について

臨時委員会（平成 30 年 8 月 3 日（金）～平成 30 年 8 月 9 日（木）持ち回り審議開催）

1. 平成 30 年度神戸グローバルチャレンジプログラム
「グローバルチャレンジコース（学生企画型）」の実施概要（案）について

第 3 回委員会（平成 30 年 9 月 14 日（金）開催）

1. 平成 31 年度実施コースの申請及び認定について
2. 平成 31 年度 JASSO 奨学金の申請について
3. GEMS 運用に係る神戸 GCP のコース登録について
4. 平成 30 年度神戸 GCP 秋フェアの実施について
5. 神戸 GCP シンポジウムの参加依頼について

第 4 回委員会（平成 30 年 10 月 12 日（金）～平成 30 年 10 月 18 日（木）持ち回り審議開催）

1. 平成 31 年度神戸 GCP 参加学生との懇談会の実施について

第 5 回委員会（平成 30 年 12 月 14 日（金）開催）

1. 平成 30 年度夏実施コースの学生の成績評価報告について
2. 平成 30 年度神戸 GCP 自己点検・評価の実施について
3. 平成 30 年度 AP 補助金の執行状況及び残額の調整について
4. 2019 年度 AP 補助金の予算配分について
5. 2019 年度神戸 GCP コースの変更について
6. 「神戸グローバルチャレンジプログラム学外学修活動（海外/国内）実施コース参加要項」の改定について
7. コース実施時における学生の提出物（各シート）の見直しについて
8. 2019 年度神戸 GCP パンフレットの作成について
9. 2019 年度共通シラバスの作成について
10. 海外旅行保険（付帯海学）の補償について

第 6 回委員会（平成 31 年 1 月 8 日（火）～平成 31 年 1 月 15 日（火）持ち回り審議開催）

1. 平成 30 年度 AP 補助金の残額の調整について
2. 平成 31（2019）年度神戸 GCP 春フェアの実施について

第 7 回委員会（平成 31 年 3 月 8 日（金）開催）

1. 平成 30 年度大学改革推進等補助金（AP 補助金）実績報告書について
2. 平成 31（2019）年度大学改革推進等補助金（AP 補助金）調書について
3. 「神戸 GCP 海外派遣学生への助成金支給について」の改定について
4. 神戸大学基金・平成 31（2019）年度事業計画書（予算要求書）について
5. 「神戸 GCP JASSO 奨学金支給基準等について」の改定について

具体的な成果

平成 31 年度実施コースの審査・認定、予算執行、参加学生の単位授与、奨学金制度の見直し、シンポジウム開催に係る事項、関連する制度の整備、学外学修時の危機管理体制、学生及び学内外への本プログラムの周知方法の検討及びその他本プログラムの運営について委員会が中心となり意思決定を行うことで、本事業を円滑に実施することができた。

⑥プログラムの各コースを実施する。

取組実績

平成 29 年度の神戸グローバルチャレンジプログラム委員会において認定された 16 コース(大学教育推進機構、国際人間科学部、理学部、工学部、農学部、国際教育総合センターにて企画)で参加学生を募集し、うち 15 コースを実施した。計 117 名の学生が本プログラムに参加し、うち 115 名が海外で学外学修活動を行った。

具体的な成果

参加後のアンケートでは、参加コースについて高い満足度を得るとともに、本プログラムへの参加を契機としたさらなる留学や関心を持ったテーマについて、「より長期的な留学等に挑戦したい」、「より深く学修したい」について、ともに 9 割近い回答を得ており、長期留学等の国際的な活動への更なるチャレンジやより専門的なテーマへの学修意欲の向上等、本プログラムが全体を通じて設定している「学びの動機づけ」という目標に対して順調に成果が現れていることが確認できた。

⑦プログラム実施に係る TA や SA、学生補佐員を雇用する。

取組実績

TA は本プログラムで企画・開講した総合科目「アジアへの誘い」にて講義運営補助、出席管理補助、資料整理等を行い、SA はシンポジウムの運営スタッフや学外学修帰国後の事後学修にて、全体説明会で行われる活動成果の報告発表及びパネル展示資料作成の指導補助にあたった。また、学生補佐員は大学全体の催事等でのイベント運営補助業務を行った。

具体的な成果

アジアでの学外学修経験のある TA を雇用したことにより、自らの経験を活かして質問に答えることでアジアへの親近感をより湧きやすくなるなど、受講学生のアジアへの関心を促進させる効果があった。また、学外学修活動参加経験のある SA が事後学修の指導補助にあたることで、本プログラム参加学生の報告資料作成をスムーズに進めることができた。さらに、参加学生を学生補佐員として雇用し、学修成果の展示報告やシンポジウム・ホームカミングデイでの活動成果報告を行うことで、自己の能力を更に高めるよう意識づけられるとともに、他の学生にも刺激を与え、学修を牽引していく効果が得られた。

⑧学生受入先の調査を行う。

取組実績

プログラムのコースの拡充のため、コーディネーター及びコース責任者等が、国内外の本学現地同窓会や協定校、大学関係者のネットワークを活用しつつ、学生の受入機関の調査・開拓を行った。

具体的な成果

国内外の本学現地同窓会や協定校を中心に、大学関係者ネットワークの支援を受けつつ、現地の情報収集や現地調査を行い、受入先との協議を行うことで、学生の安全確保を踏まえた実施環境を整備することができた。また、海外の企業、国際機関、協定校等と受け入れについて協議を行うことで、ロシア・アルメニア等の新規コース開設に繋がり、学生の学外学修活動先の更なる拡充を図ることができた。また、海外からの本プログラムの視察訪問もあり、今後更なる拡充が期待できる。

⑨事業の中間評価を基に、事業の改善について協議を行う。

取組実績

平成 29 年度に受審した中間評価の結果に基づき、神戸グローバルチャレンジプログラム委員会で事業を点検し、改善を進めた。

具体的な成果

本事業の具体的な手続や仕組・体制等について点検し、実際の運用に合わせて見直しを行いながら事業の改善を図ることで、本プログラムを円滑に実施することができた。

⑩プログラム参加学生による全体報告会を実施する。

取組実績

全学部 1・2 年次生を対象に、4 月に 4 回、10 月に 3 回、全体報告会を実施し、延べ 431 名が参加した。4 月には、参加者アンケートも行った。

具体的な成果

全体報告会を開催することで、学生同士がネットワークを構築し、刺激し合ってモチベーションの維持を図り、更なる活動にチャレンジする力を付けさせるとともに、学修内容を振り返ることで学修効果を定着させることができた。特に 4 月の報告会は、主として新入生を対象として開催した説明会の中に、参加学生による報告会を組み込んだことで、本プログラムの成果を広く学内にアピールし、より多くの学生にプログラムの周知を図ることができ、海外での学外学修活動への更なる参加を促すことができた。参加者アンケートでは、本プログラムへの興味・参加意欲が高まったという回答が多く得られた。

⑪外国人講師を雇用し、学生向けの英語力向上セミナーを実施する。

取組実績

外国人講師を雇用し、本プログラム対象者である 1・2 年次生を主に対象としたスピーキング力の向上に重点をおいた英語力向上セミナーを実施し、23 名の参加があった。

具体的な成果

英語力向上セミナーを実施し、学生が事前学修期間中に外国人講師によるネイティブの英語に触れることで、語学面において、国際的なフィールドでの学外学修活動に取り組みやすくなった。また、正規の授業以外の場で実践的なスピーキング力を向上させる良い機会となった。

⑫教職員への FD・SD を実施する。

取組実績

本年度 11 月に、本事業に関連した各方面から専門家を招聘して実施した公開シンポジウムは、プログラムに関わる教職員を含め、約 100 名が参加し、これまでのプログラムの取組と成果を議論し合うなど、今後の運営・指導等を行うに当たって、情報交換を行う機会となった。

具体的な成果

シンポジウムでは、本事業に関連した専門家の講演を踏まえ、本学の海外プログラム参加生が成果発表とパネルディスカッションを行うことで、講演者及び参加生共に、本プログラムの知見を深める機会となった。また、プログラム参加学生はコースの成果を発信するための準備を通して、プログラムに参加して得たことを振り返り、学修効果を定着させることができた。パネル展示や意見交換会では、講演者を交えて「グローバル人材育成」や「キャリア選択」などについて積極的に議論をすることで、教職員も海外プログラムを運営・担当する立場としての知見を高めることができた。その他、海外から講師を招聘し、セミナーを実施するコース(理学 UPLB コース)もあった。

⑬次年度に実施するコースをグローバルチャレンジプログラム委員会で認定する。

取組実績

平成 31 年度に実施するプログラムのコースについて検討を行い、9 月に開催した神戸グローバルチャレンジプログラム委員会において、実施コースを認定した。その後、平成 31 年度から開始する各コースの準備及び学生募集を開始した。

具体的な成果

各部局が学生の活動先と協定等を交わして企画したコースを、教育効果の観点を踏まえて委員会で審査し、本プログラムにおけるコースとして認定することで、各コースの教育の質を保証することができた。また、平成 31 年度は、6 部局等（大学教育推進機構、国際人間科学部、理学部、工学部、農学部、国際教育総合センター）で 17 コースを実施することとし、本事業の継続・発展を図ることが可能となった。

⑭次年度以降の事業の在り方について検討を行う。

取組実績

本プログラム開始後 3 年目を迎え、これまでの参加者アンケートや関係教職員からの意見を踏まえ、本プログラムに関する手続き・様式等を見直した。また、経済的支援についても、支給基準の見直しを行った。

具体的な成果

プログラムの実際の実施状況に合わせて、様々な運用を見直すことで、プログラムの更なる充実と発展、また参加者の増加が期待できる。今後も、本事業補助期間終了後の事業の継続実施を見据え、システムの導入等を含め、より効率化を図った運営体制を引き続き検討していく。

経済的支援については、平成 30 年度及び平成 31 年度について、以下のような全学的な基準を定めた。

<平成 30 年度>

神戸 GCP 参加者の増加に伴い、JASSO 奨学金への申請者が JASSO の支給枠を超える可能性があるため、学部 1 年生の学力基準について明確にした。また、夏・春実施コースのそれぞれで JASSO 奨学金の支給枠を設けることで、年間を通じてバランスよく支給することとした。

<平成 31 年度>

平成 31 年度 JASSO 奨学金の学力基準の見直し及び平成 30 年度からの支給枠減少に伴い、本学における学力基準及び夏・春実施コースの支給枠のバランスについて見直しを行った。また、JASSO 奨学金の学力基準を満たすにもかかわらず、支給枠を超えるために JASSO 奨学金を受給することができない学生に対して、同額を神戸大学基金から助成することとした。

⑮事業の自己点検・評価を神戸グローバルチャレンジプログラム委員会において行う。

取組実績

11 月 3 日に、「世界へ飛び出す学生たち～Global Challenge from KOBE」をテーマとした公開シンポジウムを開催し、これまでの本プログラムの取組と成果報告を行い、社会へ発信した。

具体的な成果

公開シンポジウムでは、これまでの本プログラムの取組と成果報告として、本プログラムの参加学生及び学内の関連プログラムの参加生の成果発表、学外からの講演を行った。学内外から約 100 名の

参加があり、関係者だけでなく、一般の方へも広く、本学のグローバル化の展望等を発信する機会となった。特に、「学生による発表」では、プログラム参加がきっかけとなったキャリア選択、プログラムの学修成果が生かされている様子が伝わり、参加者のアンケートからも高い満足度を得ていた。

⑩ルーブリックを活用して、プログラム参加学生の評価を行う。また、評価結果の経年変化を分析する。

取組実績

本プログラム参加学生が伸ばすことが期待される3つの力、「チームワーク力」「自己修正力」「課題挑戦力」について、平成29年度に改訂したルーブリック指標により、事前学修時及び事後学修時に参加学生が自己評価を行った。また、経年変化の分析のために、前年度までの参加学生に対して、本学の教務システムを用いて同じルーブリック指標による自己評価を行った。

具体的な成果

ルーブリックを用いて評価を行うことで、本プログラムで身につけることが期待される3つの能力を統一的に測定することができ、コース参加学生に対して統一的な評価を行うとともに、本プログラムの教育効果を把握することができた(ルーブリック教育効果については、「3-1. プログラム目標能力に関する自己評価」を参照)。

⑪パンフレットを作成し、学生への配布と学内外への広報を行う。

取組実績

本プログラムを広報するために、プログラムに関するパンフレットを8,000部作成した。次年度の1・2年生に配布するとともに、全国主要都市で開催した入学説明会にて全国のSGH指定校や近畿圏の主要高等学校、学外学修の新規受入先や受験生に対しても配布する。また、学内の本プログラム広報ポスターも作成した。さらに、来年度に向けて、一般の方にも分かり易い広報チラシを新しく作成し、高校生を含め、保護者等へも新入生オリエンテーションにて新たに配布することとなった。

具体的な成果

広報チラシを作成することで、高校生や学外の一般の方にも、本プログラムの取組をより分かり易くアピールすることが期待できる。また、パンフレットを用いて、本事業の具体的な取組や手続き、募集についての情報を本学の学生に周知することができる。また、パンフレットを用いてコースの内容や実績を記載することで、学外学修先の新規開拓を行うとともに、本学を志望する受験生にもアピールすることができる。

⑫総合科目Ⅰ「アジアへの誘い」を開講する。

取組実績

全学部学生を対象とする教養教育において、本プログラムで企画した総合科目「アジアへの誘い」を開講し、学生にアジアの国々の現状や課題について学修させ、34名の学生が履修した。

具体的な成果

学外学修を多数開催しているアジアの国・地域に焦点を当てた講義を本学の全学共通授業科目として開講することで、年次の早い段階で海外への関心や意識を高め、海外での学外学修への学生の参加促進を図ることができた。

⑬前年度参加学生とのプログラム意見交換会を実施する。

取組実績

平成 29 年度に実施したコースの参加学生と教職員との学修成果等の情報共有を行うプログラム意見交換会（参加学生 11 名、教職員 15 名）を 1 月に実施した。

具体的な成果

前年度参加学生とのプログラム意見交換会を実施したことにより、参加学生は学修内容を振り返ることで学修効果を定着させるとともに、学生同士がネットワークを構築し、刺激し合ってモチベーションを維持・向上させることができた。お互いのキャリアについての議論等を行ったことで、将来に向けて更なる活動にチャレンジする意欲が見られた。併せて、参加学生からの要望を聞き、改善点についての有効な意見を得たことで、今後の本事業の運営に取り込んでいく。

⑩事業の自己点検・評価を神戸グローバルチャレンジプログラム委員会において行う。

取組実績

神戸グローバルチャレンジプログラム委員会において、事業全体及び各取組部局の実施状況について自己点検・評価を依頼し、その結果を確認するために、とりまとめて集計した。

具体的な成果

プログラム全体の運営体制、平成 30 年度に実施した各コースの取組状況、ループリックに基づく参加学生の自己評価及びプログラム参加後のアンケート結果により本プログラムの実施状況を点検した結果、多くの学生は本プログラムへの参加を通じて「課題発見・解決能力」の必要性に気づき、「学びの動機づけ」を得て「主体的な学修姿勢」を身につけており、本プログラムの目標達成に向けた活動は計画どおり進行していることが確認できた。

⑪事業の自己点検・評価を全学評価・FD 委員会、大学教育推進委員会において行う。

取組実績

全学評価・FD 委員、大学教育推進委員会において、自己評価・外部評価の結果を報告・点検する準備をした。

具体的な成果

本事業の実施体制や実施状況・成果について自己点検・評価を行うことで、次年度の事業実施のために改善を図るなど PDCA サイクルを適切に実施することができ、プログラムの更なる発展と向上を図ることができる。

2-2. 各コースの実施と自己評価

神戸 GCP における学外学修コースについては、プログラム委員会で実施について認定を行うこととしており、平成 30 年度に学外学修を行うコースとして 16 コースが認定され、平成 30 年 7 月～10 月、及び平成 31 年 2 月～3 月に海外で学外活動学修が行われた。

なお、自己評価においては、取組計画に対し 5 段階（「5：計画を大幅に超えて実施できた」「4：計画を十分実施できた」「3：計画どおり実施できた」「2：計画どおり十分に実施できなかった」「1：実施できなかった」）で評価を行った。

(1) グローバル都市ニューヨークのコミュニティと文化を学ぶ (ニューヨークコース)

《平成 30 年度コース実績》

- ・参加学生数：20 名
- ・学外活動学修時期：平成 30 年 9 月 4 日～9 月 22 日
- ・学外活動学修先：アメリカ合衆国・ニューヨーク市

《学修目標・期待される効果》

ニューヨーク市内のフィールドワークに向けた事前の調査プランづくり、現地での実際のフィールドワーク調査、帰国後の報告会に向けた調査の分析を通じて、参加学生たちは集団での討論能力、企画立案能力、交渉能力、実践的な英語の運用能力、危機管理能力、歴史に対する想像力を総合的に涵養することが期待される。米国におけるアートとファイナンスの動態を学ぶことが学修目標である。

《実施内容》

・学生受入先の開拓・調査

ニューヨーク市立大学クイーンズ校に附属する語学学校（ELI）に昨年度に引き続いて受け入れをお願いしただけでなく、クイーンズ校の the Division of Arts and Humanities の教員である Mari Fujimoto 氏との協議の下で、クイーンズ校の学生有志の会である日本文化クラブ（JCC）との交流の機会を昨年度に引き続いて開拓した。

・事前学修

各学生は、担当教員と他の参加学生の前で順番に、現地でフィールドワークをしたいことについてプレゼンテーションを行った後、その内容について討論や追加学習も行った。各種の危機管理学修にも参加し、渡米中の安全管理について学んだ。

・学外学修

語学学校の先生方のサポートを得つつ、複数の site visits を実施した。具体的な実施先としては、ルイ・アームストロングミュージアム（クイーンズ区）、テネメントミュージアム（マンハッタン）、自由の女神及びエリス島移民博物館（マンハッタン）である。また、参加学生は各自、個人でフィールドワークを行い、その状況を学外学修日誌に記録した。

・事後学修

事後学修では、学生企画活動である、クイーンズ校で知り合った日本文化クラブの学生の中で本人が移民の一世ないしは二世の学生に対して、自分たちで考えた質問を基にインタビューを行った後、それを動画に撮影したものの発表を行った。その発表を踏まえ、アメリカという国やそこに住む人びとについて参加学生全体で討論をした。

・学生が企画した活動

上記のとおり、参加学生たちはクイーンズ校で知り合った日本文化クラブの学生の中で本人が移民の一世ないしは二世の学生に対して、自分たちで考えた質問をもとにインタビューを行った後、それをスマートフォンの動画機能を使って記録した。参加学生 20 名がグループに分かれてこの活動を行った。実施件数は 7 件である。

《自己評価・成果及び課題》

【自己評価】 3：計画通り実施できた

昨年度と比較して、今年度は事前の計画を現地において変更することがほぼなかった。また、今年度は昨年度の10名の参加学生の2倍である20名の参加学生を得ただけでなく、経済学部、海事科学部、農学部、理学部、法学部から1名ずつの参加学生を得ることができ、GCPの全学的な波及に、ニューヨークコースとして一定の貢献をすることができたと言える。

・ルーブリック評価

事前学修と事後学修時のルーブリック評価を比較すると、2-1 や 2-2 の指標、つまり行動の見直しや苦手の克服という点でスコアの上昇が観察された。

・具体的な成果

自己評価でも触れたように、今年度は国際人間学部の学生だけでなく、学内の様々な学部の学生の参加を幅広く得ることができ、GCPの全学的な波及に貢献することができた。また、このコースに参加した国際人間科学部の12名の2年生のうち1名が、ニューヨーク市立大学の交換留学の内定を得た。

・今後の課題・改善点

語学学校において神戸大学以外の学生、具体的には日本人以外の学生との混合クラスで受講したいとの声が参加学生の中から多く聞かれた。これを実現するためには、語学学校の正規の夏季講習にニューヨークコースが合流する必要がある、具体的には第2クォーターから渡米する必要がある。しかし実際にはその第2クォーターに必修科目を入れている学部が多く、渡米は事実上不可能である。クォーター制度がプログラム改善に対して障壁となっていると言わざるを得ない。

《その他》

・派遣先の拡充(H31)

フィールドワークのさらなる実質化に向けてニューヨーク市立大学クイーンズ校の Director of Education Abroad であるモハメド・タブラニ氏と打ち合わせを行った。

・非常勤職員の雇用

引率に際して学生補佐員を雇用した。この学生補佐員は、ニューヨーク市立大学クイーンズ校の交換留学経験者であり、昨年度も学生補佐員としてニューヨークコースに帯同した。この補佐員は昨年度に引き続き、事前学修にもゲストとして参加し、現地で生活しなければわからない危険情報や生活上の有益な情報を参加学生に伝達してくれたばかりか、現地での学外学修中には積極的に英語でコミュニケーションを現地の人々と取り、参加学生にとって上回生のロールモデルとしての役割を果たした。長期留学経験のある学生補佐員の雇用は、極めて教育効果が高いと今年度も感じた。

(2) ハンブルク異文化理解コース (ハンブルクコース)

《平成 30 年度コース実績》

- ・参加学生数：8名
- ・学外活動学修時期：平成 30 年 8 月 1 日～8 月 31 日
- ・学外活動学修先：ドイツ・ハンブルク

《学修目標・期待される効果》

外国で 1 月間生活して異文化を体験し、その異文化を意識化することを目指す。差異を観察して要因を考察するとともにその差異に関連する課題について発見し、その解決に向けた方策を思考し議論する能力を学生に身に付けさせることを学修目標とする。異文化へのさらなる興味関心の喚起と、理解を深めようという意欲をもつことが期待される。

《実施内容》

・学生受入先の開拓・調査

ハンブルク大学との協定を利用し、ハンブルク市内の強制収容所視察やハンザ都市リュubeck 見学などについて、ハンブルク大学教員と打ち合わせを行った。

・事前学修

- ・学生の活動計画について発表し合い、参加者同士で情報を共有し協力できる体制を構築した。
- ・昨年度の参加者に協力してもらって、フィールドワークの具体例の報告及び助言をしてもらい、意見交換を行った。
- ・異文化環境で生活する上で事前に知っておくべき知識を身に付けるとともに、危機管理について学んだ。

・学外学修

ハンブルク大学ドイツ語サマースクールの参加の機会を利用し、自身の学修計画に基づき、ハンブルク大学の学生と交流しつつ、ハンブルク市内の施設等でのフィールドワークを行った。これまで当たり前だと信じてきたことが当たり前でない異文化環境で、差異を発見し、それについて参加者同士で意見交換した。

・事後学修

派遣先での学修について振り返り、口頭での報告を行うとともに報告書を作成し、ポスター発表の準備を行った。

・学生が企画した活動

各自が自分の専門や関心から企画して活動を行った（6 件）

- ・音楽を専門とする学生が、音楽文化のテーマで教会のパイプオルガンや博物館を見学するとともに日常生活の中で音楽に触れる環境を調べて日本との違いを考察した。
- ・環境をテーマに、日常生活の中のリサイクル制度を調査し、デポジット制度の利点など日本との違いを調べた。
- ・文化と建築というテーマで、教会や民家、街並みを調査し、日本とは異なる歴史と文化に気づくことができた。

- ・玩具をテーマとし、どのような種類の玩具が店頭で売られているかを調査し、日本と同じ点と異なる点に気づくことができた。
- ・薬局で売られている薬の成分について調査し、漢方薬がないなど、日本との違いに気づくことができた。
- ・ハンブルクに本社のあるニベアの製品について調査し、マーケティングの違いから異文化に気づくことができた。

《自己評価・成果及び課題》

【自己評価】 4：計画を十分実施できた

・ルーブリック評価

事前と事後を比較すると、どの項目の平均も上昇している。個人レベルで見れば、一部自己評価を下げた学生もいるが、1月間の外国滞在によって、自分の弱点への気づきも得られたと見てよいだろう。

・具体的な成果

参加者同士が協力し合うことで、情報収集や議論において自分と違う視点での意見の重要性が学べた。また異文化に触れて物おじせずにコミュニケーションを図ることができ、次への学修の意欲が高まった。また、参加者から、長期留学への相談があったことから、海外での学びへの意欲につながったと言える。

・今後の課題・改善点

全学部が対象であるため、参加者の授業にばらつきがあり、事前学修の時間の都合が合いにくい。また、昼休みなども利用しているが、学部間移動も簡単ではない。

《その他》

・広報関係

学部ウェブサイトで情報を公開・学内数箇所にポスターを掲示・1年生のドイツ語全クラスでチラシを配布・説明会を実施。

(3) カナダ・トロントの多文化社会研究 (トロント大学コース)

《平成 30 年度コース実績》

- ・参加学生数：16 名
- ・学外活動学修時期：平成 30 年 9 月 4 日～9 月 28 日
- ・学外活動学修先：カナダ・トロント市

《学修目標・期待される効果》

「言語情報コミュニケーションの動態を深く理解し、現代のグローバル社会の諸課題に取り組むことができる」能力の醸成や、「多様な境界線を越えて人々と自在にコミュニケーションを取り、課題の共有と解決に向けてリーダーシップを発揮できる」というようなコミュニケーション能力の獲得や自分と異なる文化背景をもつ人々の視点を取ることができることを目指す。

《実施内容》

・学生受入先の開拓・調査

平成 30 年 1 月にトロント大学を訪問し、平成 30 年度実施のコースの内容についての調査及び打ち合わせを行った。

・事前学修

- ・7 月 6 日に、オタワ大学からの交換留学生によるカナダの多文化主義についての発表と質疑応答の機会を持った。全て英語で実施した。
- ・7 月 13 日には 2016 年トロント大学研修参加者による体験発表と質疑応答を行った。
- ・7 月 27 日に参加者各自のフィールドワークのトピック設定についての事前学修を行った。
- ・8 月 29 日には出発直前の問題解決のための事前学修を行った。

・学外学修

- ・トロント大学 School of Continuing Studies に依頼して企画したカナダの多文化主義に関わる 4 回の特別講演を受講した（9 月 7 日、10 日、18 日、25 日）。
- ・トロントの多様性についての、学生独自のテーマに基づくフィールドワークを実施した。
- ・ボランティアプログラムに参加し、トロント市民との交流を通じてトロントの多様性に触れた。

・事後学修

10 月 15 日と 22 日に事後実習を行った。研修の振り返りを行うとともに、全体報告会（10 月 29 日の昼休み、於 B109）の発表準備を行った。

・学生が企画した活動

上記の学外学修の項で挙げたフィールドワークの具体的な内容は全て学生企画のため、活動の内容は参加者数の 16 通りある。

《自己評価・成果及び課題》

【自己評価】 4：計画を十分実施できた

・ループリック評価

事前学修時と比べて、事後学修時の評価では、水準1の評価が減り、水準2の評価が増えるとともに、事前学修時点では(2-1を除いて)ほとんど該当のなかった水準3の評価が増えていた。これは研修での経験によって、学生の気づき、分析・理解、行動・成果が促進された結果だと言える。

・具体的な成果

- ・研修後では長期留学を志望する学生が69.00%と多く、研修がグローバル志向の醸成に役立った。
- ・実際の異文化間コミュニケーションを通じて、以下の三点に学生が気づいた。
 - ・自発性が不足していることの認識
 - ・問題解決への自助努力の必要性
 - ・実際のコミュニケーションで必要となる英語能力獲得のために具体的な対策を施して目標に近づこうという積極的な態度

・今後の課題・改善点

- ・通常カリキュラムとの兼ね合いで、事前学修を実施する機会の確保が難しい点が問題である。学生、教員ともにタイトなスケジュールの中で実施するため、余裕を持って授業に臨めない。この点が改善されれば、研修参加前に学生のレディネスをより高め、より良いラポートを構築することができるであろう。
- ・研修後に向上した問題意識や長期留学志向を維持して一過性のものにせず、どのように次段階に結びつけるかが鍵である。

《その他》

・派遣先の拡充(H31)

平成30年9月にカリフォルニア大学バークレー校(UCB)を訪問し、神戸大学生の受け入れについての覚書を作成することについて双方が合意し、2020年度のUCBプログラムの実施に向けて調整中である。

・非常勤職員の雇用

- ・事前学修においてカナダ人留学生と2016年トロント大学研修参加者の神戸大学生を雇用した。
- ・研修期間中ずっと参加学生と過ごすSAを部局予算により雇用した。

・英語力向上セミナー

先にも述べたが、カナダ人交換留学生を雇用し、カナダの多様性についての英語でのプレゼンテーションと質疑応答の機会を設けた。

・広報関係

神戸GCPのウェブサイト、部局のウェブサイトで広報するとともに、引率者が担当する複数の授業において積極的に広報を行った。海外渡航未経験者の多くは引率者の授業履修者であったことから、授業担当者が引率する海外研修(引率担当者の顔が見える海外研修)であることが、海外渡航未経験者が海外研修に踏み切る一因ではないかと考える。

(4) アジア・フィールドワークコース（リアウ州）（アジア・フィールドワークコース（リアウ））

《平成 30 年度コース実績》

- ・参加学生数：4名
- ・学外活動学修時期：平成 30 年 8 月 20 日～8 月 30 日
- ・学外活動学修先：インドネシア・リアウ州

《学修目標・期待される効果》

本コースでは、インドネシアの海上集落における教育現場を訪ね、共通言語の無い状態で、現地の小学校・中学校・高校訪問し、現地の学生との異文化交流会を学生主体で企画・実践を試みることで、言葉や宗教、文化の異なるコミュニティにおける自己表現方法を学ぶ（現地大学生たちが交流会企画のサポートあり。）。また、インドネシアの多民族がともに暮らす海上集落において、短期のホームステイ経験やフィールドワークを通して、国や地域をこえた多民族共生問題に対して、グローバルな視点とローカルな視点から捉えようとする多面的な思考や探究心を育てることを目指す。

《実施内容》

・学生受入先の開拓・調査

インドネシア・リアウ州におけるプログラムは、平成 30 年 3 月に事前調査は実施し、その後はカウンターパート機関のリアウ大学と密に連絡を取り、プログラムを組んだ。

・事前学修

事前学修としては、①安全対策・病気予防②宗教、文化及びマナーを座学講義によって学ぶ。

さらに、学生が現地フィールドにおいて、自ら課題を設定し、それをどのように学んでいくかを計画・立案ができるようにフィールド調査の基礎を実習形式で学ぶ。

・学外学修

ブキット・バトゥ村は、インドネシアスマトラ島東岸の河口に位置します。村は豊かなマングローブに囲まれ、地元民族ムラユの人々が漁業などを営みながら暮らしています。ブキット・バトゥ村は、オランダやポルトガルなどによる植民地の歴史、シンガポールに近い海上交易の歴史などにも深く関係し、こうした歴史が色濃く残る地域で、人々は多様な文化や生業を今に継承する。

本プログラムでは、村の中でも住居が川の上に建てられている杭上集落と呼ばれる集落で、短期ホームステイをしながら、リアウ大学の学生とともに現地の小・中学校を訪問し、子どもたちと交流会を企画します。また、貝採りや工芸品・織物づくりなどを通じて、人々の暮らし、多様な文化、そして、暮らしと自然環境の調和などを肌で感じる。

・事後学修

現地で発表した内容を報告書にまとめ、グローバルチャレンジ合同報告会に向けたプレゼンテーションの準備を行う。さらに、これらの報告書や報告会の内容はインドネシアの参加学生とも共有し、次年度のプログラム計画に向けて学生側からの意見やアドバイスをまとめてもらう。

・学生が企画した活動

学外活動が実施された直後にインドネシア・南スラウェシ州において大きな災害が発生したため、アジア・フィールドワーク（スラウェシコース）と協力し、11 月の六甲祭においてインドネシア料理

を販売し、その収益金を現地 NGO に寄付した。

《自己評価・成果及び課題》

【自己評価】 4：計画を十分実施できた

・ルーブリック評価

事前と事後の自己評価を「学内外の活動へ参加し、自分の役割を担う」、「メンバーと協力し、チームの目標を達成する」、及び「自己を認識し、他者への理解を通して、自分の考えや行動を見直すことができる」の3つの課題に対して比較すると、水準3に上がっている学生もいるが、水準1・水準2のままの学生が多い。

引率者の視点から評価すると、異文化や異なる環境下で、ホームステイをしながら、フィールドワークを実施し、彼らなりに上記の課題に対して向き合えていたと思う。これらの課題に対して、自信を持って行動に出せた・具体化できたと自己評価できるようになるまでには、もっと経験や時間が必要であるのではないだろうか。留学などの次の機会には、さらなる成長が期待できるだろう。

・具体的な成果

南スラウェシ州が大きな災害に見舞われた際、スラウェシコースと協力し、学生自ら寄付を募る企画を計画し、現地 NGO に寄付金を送付した。また、事後学修の一環で、現在、フィールドワークの成果を報告書にまとめ、2月のセミナーでプレゼン発表を行う予定である。さらに、1名の学生がインドネシアの教育機関で日本語を教えるボランティアを行うために国際交流基金の日本語パートナーズに申請し、現時点で最終審査まで残っている。

このように、本プログラムの経験を通して、学生自身が視野や世界を広げるための次への一歩を踏み出している。

・今後の課題・改善点

学外学修の10日間の間に、多くの課題やイベントを盛り込みすぎたため、学生自身が、現場でゆっくりと振り返る機会が無かったように思う。学生が自ら考え、行動に移せるようにするためにも、もう少しゆとりあるプログラムを組む必要がある。

《その他》

・派遣先の拡充(H31)

上海（中国コース）の次年度に向けた打合せの実施予定（3月）

・広報関係

学生への広報チラシの作成と実施後の報告書の作成

(5) アジア・フィールドワークコース(スラウェシ州) (アジア・フィールドワークコース(スラウェシ))

《平成 30 年度コース実績》

- ・参加学生数：4名
- ・学外活動学修時期：平成 30 年 9 月 15 日～9 月 25 日
- ・学外活動学修先：インドネシア・南スラウェシ州

《学修目標・期待される効果》

本コースでは、異なる学部学生同士がインドネシアの大学生たちとともに、フィールドワークを通して、地域が直面する環境問題・社会問題を深く理解することを目指す。前半では、インドネシアの漁村において、ホームステイをしながら、漁撈活動やマングローブ植林活動などの体験型プログラムに参加する。後半では、これらの活動を通して、学生自らが立案したフィールドワークを遂行しながら、地域の魅力や地域課題を見つける。そして、住民や現地の大学生とともに、地域おこしプロジェクトを企画し、実践することで課題解決型アプローチを学ぶ。

《実施内容》

・学生受入先の開拓・調査

インドネシア・南スラウェシ州におけるプログラムは、平成 28 年に引き続き、2 度目であったため事前調査は実施せず。カウンターパート機関のハサスディン大学と密に連絡を取り、プログラムを組んだ。

・事前学修

事前学修としては、①安全対策・病気予防②宗教、文化及びマナーを座学講義によって学ぶ。

さらに、学生が現地フィールドにおいて、自ら課題を設定し、それをどのように学んでいくかを計画・立案ができるようにフィールド調査の基礎を実習形式で学ぶ。

・学外学修

異なる学部学生同士が、インドネシアの大学生たちとともに、自らが立案したフィールドワークを通して、地域が直面する環境問題・社会問題をより深く理解することを目指す。インドネシアの漁村において、ホームステイをしながら、村落調査や植林活動などの体験型プログラムを行う。後半では、これらの活動を通して学生自らが立案したフィールドワークを遂行しながら地域の魅力や地域課題を見つける。そして、住民や現地の大学生とともに地域おこしプロジェクトを企画し、実践することで課題解決型アプローチを学ぶ。

・事後学修

現地で発表した内容を報告書にまとめ、グローバルチャレンジ合同報告会に向けたプレゼンテーションの準備を行う。さらに、これらの報告書や報告会の内容はインドネシアの参加学生とも共有し、次年度のプログラム計画に向けて学生側からの意見やアドバイスをまとめてもらう。

・学生が企画した活動

学外活動が実施された直後にインドネシア・南スラウェシ州において大きな災害が発生したため、11 月の六甲祭において南スラウェシ州の郷土料理を販売し、その収益金を現地 NGO に寄付した。

《自己評価・成果及び課題》

【自己評価】 4：計画を十分実施できた

・ルーブリック評価

「学内外の活動へ参加し、自分の役割を担う」、「メンバーと協力し、チームの目標を達成する」、及び「自己を認識し、他者への理解を通して、自分の考えや行動を見直すことができる」の3課題に対する自己評価は、水準1・水準2を選択した学生が多い。

引率者の視点から評価すると、異文化や異なる環境下で、ホームステイをしながら、フィールドワークを実施し、彼らなりに上記の課題に対して向き合えていたと思う。これらの課題に対して、自信を持って行動に出せた・具体化できたと自己評価できるようになるまでには、もっと経験や時間が必要であるのではないだろうか。留学などの次の機会には、さらなる成長が期待できると感じた。

・具体的な成果

南スラウェシ州が大きな災害に見舞われた時に、学生自ら寄付を募る企画を計画し、現地 NGO に寄付を行った。また、事後学修の一環で、現在、フィールドワークの結果を報告書にまとめ、2月のセミナーでプレゼン発表を行う予定である。さらに、2名の学生がハサスディン大学の学生にサポートしてもらいながら、春休みを利用してプログラム中にお世話になったホームステイ先を再訪問する計画を立てている。このように本プログラムの経験を通して、学生自身が主体的に活動範囲を広げているといえる。

・今後の課題・改善点

学外学修の10日間の間に、多くの課題やイベントを盛り込みすぎたため、学生自身が、現場でゆっくりと振り返る機会が無かったように思う。学生が自ら考え、行動に移せるようにするためにも、もう少しゆとりあるプログラムを組む必要がある。

《その他》

・派遣先の拡充(H31)

上海（中国コース）の次年度に向けた打合せの実施予定（3月）

・広報関係

学生への広報チラシの作成と実施後の報告書の作成

(6) 理学グローバルチャレンジプログラム UPLB コース (理学 UPLB コース)

《平成 30 年度コース実績》

- ・参加学生数：4名
- ・学外活動学修時期：平成 30 年 9 月 10 日～9 月 29 日
- ・学外活動学修先：フィリピン共和国・国立フィリピン大学ロスバニョス校

《学修目標・期待される効果》

基本となるサイエンスを学ぶだけでなく、異文化に身を置くことにより、自らが身を置く専門分野以外のサイエンスも含めて、より総合的に学ぶことで、サイエンスの理解をさらに深化させる。

《実施内容》

・学生受入先の開拓・調査

受け入れ側との事前の打ち合わせが十分なされている。

・事前学修

以下の内容の講義を農学部との共同で行う。1) 海外での安全について 2) 海外での健康管理について 3) フィリピンの生活と文化 4) タガログ語講座 5) コースの内容と注意事項 6) UPLB からの招聘教員による事前指導 (これのみ理学部独自)

・学外学修

3 週間の英語語学研修 (LITE) プログラム (UPLB 農学英語コースとの共催) を受ける。原則、午前中 2 時間、午後 2 時間程度・平日は英語レッスン終了後 (16:00～18:00) に、UPLB 所属の進行補助学生と様々な交流活動を行う。この活動により状況に応じた活きた英語を学ぶ。また、派遣期間中、数度のキャンパス内外での集団活動を行い、植物園、国際稲研究所、名所・旧跡等を訪問・見学する。

・事後学修

派遣先での学修について、振り返りを行い、リフレクションシートを作成・提出する。全学で実施される「グローバルチャレンジ合同報告会」に向け、ポスタープレゼンテーションの準備を行う。

・学生が企画した活動

該当なし

《自己評価・成果及び課題》

【自己評価】4：計画を十分実施できた

・ルーブリック評価

より積極性を獲得した学生もいることから、評価は上昇している。

・具体的な成果

英語力の向上や積極性の獲得。

外国文化・生活の理解が深まる。

・ 今後の課題・改善点

台風などの自然災害への対処方法に今後工夫が必要。

派遣先での健康管理についての周知は改善したが徹底が必要。

《その他》

・ 派遣先の拡充 (H31)

・ タイ王国のタンマサート大学シリントン国際工学部への派遣を協議中（理学・工学部の共同）

→平成 31 年度より実施予定

・ 中華人民共和国の汕頭大学への派遣を協議中（理学部独自）

・ FD・SD の実施

危機管理に関する訓練等

・ 広報関係

・ 理学部 WEB において広報している。

<http://www.sci.kobe-u.ac.jp/gcp/index.htm>

・ 学生向け掲示版に募集案内を掲示

・ 学生向け説明会を開催（理学部独自＋農学部と共催）

(7) 理学グローバルチャレンジ Nanyang/Sci コース (理学 Nanyang コース)

《平成 30 年度コース実績》

- ・参加学生数：2名
- ・学外活動学修時期：平成 30 年 9 月 17 日～9 月 28 日
- ・学外活動学修先：シンガポール共和国・南洋理工大学

《学修目標・期待される効果》

基本となるサイエンスを学ぶだけでなく、異文化に身を置くことにより、自らが身を置く専門分野以外のサイエンスも含めて、より総合的に学ぶことで、サイエンスの理解をさらに深化させる。

《実施内容》

・学生受入先の開拓・調査

受け入れ側との事前の打ち合わせが十分なされている。

・事前学修

アドバイザー教員指導の下、詳細な学修目標・計画を記入したチャレンジシートと企画書を提出する。危機管理オリエンテーション及び OSSMA 講習会に参加し、安全管理について学ぶ。

・学外学修

学修目標・計画に従い現地で学修を行う。実験以外の、60 分、120 分、60 分がセットになった化学分野の科目を 5 科目 2 週間にわたり履修。

・事後学修

派遣先での学修について、振り返りを行い、リフレクションシートを作成・提出する。全学で実施される「グローバルチャレンジ合同報告会」及び理学ホームカミングデイに向け、ポスタープレゼンテーションの準備を行う。

・学生が企画した活動

該当なし

《自己評価・成果及び課題》

【自己評価】 4：計画を十分実施できた

・ルーブリック評価

課外活動にも積極性が増すなどの効果を確認。

・具体的な成果

国際評価の高い大学を体験し、本学の教育の充実ぶりを認識。

・今後の課題・改善点

台風などの自然災害への対処方法に今後工夫が必要。

きめ細かい事前指導に労力を要する。工夫が必要。

《その他》

・派遣先の拡充(H31)

- ・タイ王国のタンマサート大学シリントン国際工学部への派遣を協議中（理学・工学部の共同）
→平成 31 年度より実施予定
- ・中華人民共和国の汕頭大学への派遣を協議中（理学分独自）

・非常勤職員の雇用

派遣学生の指導のため、南洋理工大学大学院生を TA として雇用

・FD・SD の実施

危機管理に関する訓練等

・広報関係

- ・理学部 WEB において広報している。
<http://www.sci.kobe-u.ac.jp/gcp/index.htm>
- ・学生向け掲示版に募集案内を掲示
- ・学生向け説明会を開催（理学部独自＋農学部と共催）

(8) ギャップターム海外協定校派遣コース (ギャップターム海外協定校派遣コース)

《平成 30 年度コース実績》

- ・参加学生数：12 名
- ・学外活動学修時期：平成 30 年 9 月 24 日～9 月 29 日
- ・学外活動学修先：国立台湾大学（台湾・台北）、国内グローバル企業

《学修目標・期待される効果》

- ・英語コミュニケーション力の向上及び英語による工学知識を習得可能とする能力の向上。
- ・国内外でのインターンシップ等や協定校での体験を通して日本、ひいては各自の進むべき方向性を見出し、広い視野を獲得すること。

《実施内容》

・学生受入先の開拓・調査

海外研修については前年度及び平成 30 年度に関係教員が派遣先を訪問し、具体的なプログラムについての打ち合わせを行った。

国内グローバル企業については、各学科担当教員から企業訪問の受入について打診を行い、訪問の調整を行った。

・事前学修

本学部教員による修学指導の下、海外研修先及び実習予定のグローバル企業の事前調査と研修先での課題と到達目標を設定し、チャレンジシートの作成を行った。

また、コーディネーターによる危機管理についての授業を受講し、海外渡航時の安全危機管理、緊急時行動フローチャート等について学んだ。

さらに、マイナビによる企業訪問に関する事前研修を受講した。

・学外学修

第 2 クォーター（ギャップターム）に 1 週間の海外協定校への派遣、国内グローバル企業研修を実施した。派遣先の海外協定校では、工学関係の研究施設や企業の見学、英語による現地授業への参加、現地学生との交流を行った。

国内グローバル企業では、関西圏の企業 5 社から各学生の専攻に関連の深い企業を選択し、合計 5 日間の企業訪問に参加した。訪問先では、企業の事業内容や海外における事業展開、海外赴任時のエピソードなどについて聞き、実際にグローバルに働くことがどのようなことであるのかについて学んだ。

・事後学修

海外協定校及び国内グローバル企業での学修内容について振り返りを行い、リフレクションシートを作成・提出した。各自の体験をプレゼンテーションとしてまとめ、報告会での報告を行った。

・学生が企画した活動

該当なし

《自己評価・成果及び課題》

【自己評価】 3：計画通り実施できた

・ルーブリック評価

どの項目においても、事前学修では水準1が多くみられたが、研修後では水準2での回答が多くみられる。この実習を通じて、自分の問題点を自己分析し、改善するための方策を得ているように判断する。

・具体的な成果

参加した学生からは、企業研修や海外研修を通して、将来海外で学ことや働くことを意識するようになったとの意見が多くみられた。また、海外研修後、長期の交換留学を行いたいという学生もあり、訪問した国立台湾大学へ来年度後期から交換留学を予定している参加者もいる。

・今後の課題・改善点

予算削減に伴い、今後本事業が継続できるかどうかが課題となる。また、本プログラム参加学生にとっての神戸 GCP の評価及び成果を算出することが困難であること。

《その他》

・派遣先の拡充(H31)

次年度に海外研修先となるロイヤルメルボルン工科大学へは、関係教員が訪問し、プログラム内容についての打ち合わせを行った。また、同じメルボルン市内の協定校であるモナシュ大学についても、先方の教員が来学した際に海外研修時の訪問について相談を行った。

・非常勤職員の雇用

工学英語入門にて非常勤講師を雇用。

・英語力向上セミナー

本プログラムに選抜された学生は平成 29 年後期に外国人非常勤講師による工学英語入門の受講を義務づけ、準備学修を行った。

・広報関係

プログラムに係るパンフレットの作成や4月初旬の説明会の開催。

(9) UPLB 農学英語コース (UPLB コース)

《平成 30 年度コース実績》

- ・参加学生数：15 名
- ・学外活動学修時期：平成 30 年 9 月 10 日～9 月 29 日
- ・学外活動学修先：フィリピン・ラグナ

《学修目標・期待される効果》

フィリピン大学ロスバニョス校 (UPLB) で、現地学生と交流しながら英語で生活する。その中で、英語によるコミュニケーション・プレゼンテーション・ディスカッションの能力の向上を図る。

さらに、国際稲研究所 (IRRI) 等各種研究所・農場等を訪問することにより、アジアの農業・世界の農業研究の最前線を体感する。

《実施内容》

・学生受入先の開拓・調査

受け入れ先は UPLB である。すでに 2013 年から毎年学生を受け入れてもらっており、調査は不要である。

・事前学修

次の事項について事前学修を行った。1) 海外での安全について 2) 海外での健康管理について 3) フィリピンの生活と文化 4) タガログ語講座 5) コースの内容と注意事項

・学外学修

国際イネ研究所、植物園、自然史博物館、有機農場を訪問した。

・事後学修

日本語及び英語で感想文を書かせた。英語感想文については、UPLB の担当スタッフに送付・検討してもらった。さらに、派遣チーム「解散式」を行い、帰国後の活動についての意見交換・情報交換を行った。

・学生が企画した活動

基本的に、毎日夕方 4 時から 6 時までは、UPLB 学生との交流の時間 (名称「Guided Interaction」) とした。この時間にどのような activity を行うかは、学生が自主的に企画した。従って、件数は、5 チーム×15 日=75 件となる。

《自己評価・成果及び課題》

【自己評価】4：計画を十分実施できた

・ルーブリック評価

プログラム経験による「成長」をストレートに評価する学生 (参加後に高い水準を選択) がいる一方、経験を通じて今後達成したい具体的な目標を見つけたことで、現時点達していない自分に対して低い水準を選択する、という学生もいる。いずれのタイプも参加後に繋がる手ごたえを得られたことが、全参加者に提出を課した「報告書」内容からも読み取ることができる。

- ・ 具体的な成果

英会話能力が格段に向上するとともに、グローバルな視野を身に付けることができた。

- ・ 今後の課題・改善点

特になし

《その他》

- ・ 非常勤職員の雇用現地 UPLB

雇用現地 UPLB の学生を 2 名、Student Guardian として雇用した。

- ・ 広報関係

2018 年度 UPLB 演習報告を、農学部ホームページに掲載した。<http://www.ans.kobe-u.ac.jp/zaigakusei/uplb2018.pdf>)

(10) EU フィールドワークコース (KUPES コース)

《平成 30 年度コース実績》

- ・参加学生数：6名（履修登録した7名の内1名は体調不良により学外学修前に辞退）
- ・学外活動学修時期：平成 31 年 2 月 25 日～3 月 8 日
- ・学外活動学修先：フランス・パリ、イタリア・トリノ、ベルギー・ブリュッセル及びルーヴェン、英国・ロンドン及びオランダ・アムステルダム

《学修目標・期待される効果》

「日欧比較」をテーマに、学生自らが企画し、計画・実施することにより、日欧が抱える共通課題を深く知ること、及び現地に赴くことで、その解決に向けた方策を思考する能力を学生に身に付けさせることを学修目標とする。また、フィールドでの実践活動が3年生後期からの交換留学につながり、成長と飛躍が期待できる。

《実施内容》

・学生受入先の開拓・調査

日欧のフィールドワーク先を開拓すべく、複数回、東京に出張し在京の国際機関（OECD 東京センター）、関係省庁（外務省、厚生労働省、公正取引委員会事務局等）を訪問し、日欧におけるフィールドワークへの協力を依頼した。今回の学外学修にて OECD 東京センターを通じて、OECD パリ本部への訪問が実現する等の成果があった。

・事前学修

まず、各自の関心を踏まえてフィールドワークでの研究テーマと問いを設定し、フィールドワーク計画書とチャレンジシートの作成や訪問先へのアポイントメールの送付など、協力して準備を進めた。「日欧比較セミナーⅡ」の授業の1コマを使い、フィールドワークの中間報告会を行ない、他の KUPES 生及び欧州からの交換留学生よりフィードバックを受け、計画を進めた。さらに、渡欧前に春季アカデミック英語集中コースなどを通じて英語力を強化し、現地での活動に役立つコミュニケーションスキルを磨くとともに、危機管理セミナーを受講して渡航中の安全管理も学んだ。

・学外学修

主な活動として、フランスで OECD 本部を訪問した後、協定校のパリ 7 大学において日本学を専門とするフランス人教員とのゼミを行った。イタリアのトリノに移動し、本学法学研究科による ILO 研修センターでの国際機関に関する集中セミナーに参加した。ベルギーでは、協定校のルーヴェン大学において日本語学科の学生との合同ゼミを行い、ブリュッセルでは欧州議会を視察し、グループに分かれてオルタ美術館の見学、ベルギー対外貿易庁及び国際金融情報センターブリュッセル事務所を往訪し、関係者から EU の多様性と展望、ベルギー人のアイデンティティと対外的役割、日 EU 関係などについて意見を聴取した。また、本学ロンドン同窓会において、日系企業に勤務する OB より欧州での仕事や生活などについて話を聞くことができた。

・事後学修

学外学修を振り返り、フィールドワーク報告書とリフレクションシートを作成し、成果をまとめた。また、4月の神戸 GCP 報告会において、プレゼンテーション又はパネル展示により、活動成果を発表する予定である。

・ 学生が企画した活動

該当なし

《自己評価・成果及び課題》

【自己評価】 4：計画を十分実施できた

・ ルーブリック評価

事前評価と事後評価を比較して顕著な伸びが見られる「学内外の活動へ参加し、自分の役割を担う」について、水準3が0%から25%、「メンバーと協力し、チームの目標を達成する」について、水準3が0%から50%へと大幅に伸びている。また、「自己を認識し、他者への理解を通して、自分の考えや行動を見直すことができる」について、水準3が15%から50%、水準2が0%から25%へと着実に伸びている。「得意分野を伸ばし、苦手分野を克服する」についても、水準3には到達しなかったものの、水準2が0%から50%へと大きく伸長している。さらに、「課題を見つけ、解決をはかる」について、水準3が0%から25%、水準2が15%から75%へと大きな変化が見られる。

・ 具体的な成果

上述した大きな変化に見られるように、事前学修そして学外活動を通して「チームワーク力」を高めた。また、多様な人々と交流して多くの気づきや刺激を受ける中で「自己修正力」を身に付けており、自分の関心と得意分野及びキャリアの方向性を考える好機につなげた。さらに、今年秋からの交換留学に向けて準備を進める強い動機づけがなされ、「課題挑戦力」も向上した。

・ 今後の課題・改善点

英語力、コミュニケーション力、知識量の差から意見交換が難しい面がときおり見られ、訪問先における意見聴取においても、英語による聞き取りや質疑応答に苦勞する面があったことが課題にあげられる。来年度は、議論や質疑応答などのポイントを想定した指導に努めたい。また、訪問先について事前調査を十分に行之、活発な意見交換ができるよう事前学修を充実させたい。

《その他》

・ 派遣先の拡充 (H31)

訪問先の本学協定校、欧州議会などの国際機関及び政府機関などに、来年度も訪問の受入れを依頼し、了承を得た。

・ 英語力向上セミナー

上述した春季アカデミック英語集中コースを2月18日から22日まで実施した。英語ネイティブの外部講師により、学生の英語力に応じて3つのレベルに分け、英語4技能の向上とEUに関する基礎知識を図った。

・ 広報関係

KUPES のパンフレットやウェブサイトに掲載し、KUPES 生が登録するフェイスブックの非公開グループに活動内容を掲示した。来年度の履修対象者となるKUPES6期生（現1年生）に対しても、KUPESの説明会や合宿などにおいて本コースを紹介し、履修を促した。

(11) グローバルチャレンジコース(学生企画型) タイプA (グローバルチャレンジコースA)

<前期>

- ①グローバルチャレンジコースA (ベトナム・ホーチミン)
- ②グローバルチャレンジコースA (カナダ)

《平成 30 年度コース実績》

- ・参加学生数：①1名、②1名
- ・学外活動学修時期：①平成30年8月13日～9月1日、②平成30年9月13日～10月3日
- ・学外活動学修先：①ベトナム・ホーチミン、②カナダ・ゲルフ

《学修目標・期待される効果》(全コース共通で記載)

【学修目標】渡航国の社会が抱える課題に関して取り組む組織での活動を通じ、現地社会事情、専門的な知識を深めるとともに、現場の運営ノウハウや現場が抱える問題等について知見を深める。そして、それを基に上位学年での各自の専門分野の研究や活動に繋げる。また、単身渡航に加え、ある一定期間、現地コミュニティの中で生活することを通じ、自己を見つめ直し、新たな自分を知る機会となり、現地での活動や生活で直面するであろう様々な壁を一つひとつ乗り越えていく方策を思考する能力を伸ばすと同時に、海外で生活する自信をつける。

【期待される効果】学外学修活動を学生自ら企画立案、受入機関との連絡や交渉を自分たちで行うことで、社会人として、広くはボーダレスに活躍できる人材としての対応、行動の起こし方などを学ぶことができる。

《実施内容》

・学生受入先の開拓・調査

- ・学外学修活動で取り組むことができる活動プログラムとして学生に提案ができそうな海外プログラムを持つ教育関連団体と随時打合せを行う。
- ・本学に在籍する留学生とともに、当該学生の母国でフィールドワークやインターンシップが実施できる機関・団体、現地大学を調査、視察

・学生団体 AIESEC との連携

・事前学修 (全コース共通で記載)

- ・渡航先で取り組む活動テーマに沿った渡航国の現状についての講義と発表
- ・現地活動の準備 (活動で使用するような専門用語に関する英語学修等)
- ・チャレンジシートの作成、本プログラムで設定した3つの目標能力の自己評価
- ・危機管理学修
- ・渡航に際してのガイダンス

・学外学修 (小分類されたコース別で記載)

①ベトナム：チャイルドケアのボランティア活動に取り組む。ベトナム戦争の枯葉剤の影響を受けた両親の遺伝により精神的、肉体的疾患を持った子どもが日中過ごす障がい者施設で、食事のサポート、一緒に遊ぶなどのボランティア活動を行った。また、様々な国籍のボランティアと活動や共同生活をし、英語スキルのみならず異文化理解を促進する機会となった。

②カナダ：フードバンクでのボランティア活動に取り組む。在庫管理、仕入れの手伝い、分別、箱詰め、ゴミ処理、掃除等、現場のその時々状況に応じ、柔軟に様々な業務にあたった。また、現場で働くことによりフードバンクの運営システムなどを学ぶ。また、ホームステイ先でホストファミリーとかなりの時間を過ごし、英語スキルのみならず異文化理解を促進する機会となった。

・事後学修（全コース共通で記載）

- ・活動の振り返りと共有
- ・リフレクションシートとフィードバックシートの作成、本プログラムで設定した3つの目標能力の自己評価
- ・全体報告会でのパネル展示用活動成果報告ポスターの作成

・学生が企画した活動

今コース2件の学外学修活動は学生が企画した活動となります。

その意味では上記の活動内容2件

《自己評価・成果及び課題》

【自己評価】3：計画通り実施できた

・ルーブリック評価

※1名分、渡航後の自己評価の提出がないため、1名分の学生の変化について記載

＜チームワーク力＞

- ・1-1は、渡航前と渡航後では変化がないが（水準2→水準2）、1-2は、水準2→水準3と、1レベル水準を上げている。

＜自己修正力＞

- ・2-1は渡航前より水準3と高く、この水準を維持している。2-2は水準2から水準3へレベルを1つ上げている。

＜課題挑戦力＞

- ・渡航前より水準3と高く、この水準を維持している。

・具体的な成果

・現地で取り組んだ活動に関する事柄（ベトナム：ベトナム戦争の悲惨さとその負の連鎖が現在にも脈々と繋がり、ベトナム社会の重い課題となっている現状、カナダ：貧困格差とその政策）について理解を深めた。

- ・チャレンジ精神の醸成
- ・上位学年での留学で、専攻したい研究テーマの決定
- ・英語コミュニケーションスキルの向上

・今後の課題・改善点

後期、本コースへの学生の参加がなかったため、参加を促進するために提携プログラムを強化し、活動オプションを増やす。

《その他》

・派遣先の拡充(H31)

本コースと趣旨の合う海外プログラムを提供する外部団体関係者と打合せを行った。

(以下の内容は、グローバルチャレンジコースA・B、フィールドワークコース、インターンシップコース、ボランティアコースで共通)

・非常勤職員の雇用

・学生補佐員の雇用：延べ32名

⇒春と夏に実施する神戸GCPフェアでの全体説明会及び活動報告パネル展示運営(4、10月)、ホームカミングデイでの活動報告発表(10月)、神戸GCPシンポジウム運営(11月)及び活動成果報告発表準備(10月)、新規コースの作成補助と現地連絡調整及びコーディネーター視察時の現地手配(4-7月)、本プログラムHPの更新・保守管理(5-2月)

・SAの雇用：延べ3名

⇒事前学修にて現地事情についてのレクチャー(7月)/事後学修にて活動成果報告資料作成指導(10月)、本プログラムで開講する総合科目I「アジアへの誘い」(オムニバス形式)第2回目にて現地事情の発表(12月)

・TAの雇用：延べ2名

⇒前記「アジアへの誘い」にて講義準備、出席管理、資料整理等(12-2月)、フィールドワークチャレンジコース・ミャンマー/ヤンゴンコースの活動準備、現地連絡調整、事前学修及び学外学修活動での学修支援(12-2月)

・非常勤講師の雇用：延べ2名

⇒英語力向上セミナー指導(6-7月)、前記「アジアへの誘い」第6回目講義担当(1月)

・ゲストスピーカー：延べ2名

⇒前記「アジアへの誘い」第1回目講義担当(12月)とフィールドワークチャレンジコース・タイでの植物観察に関する講義と観察方法指導(1月)

・FD・SDの実施

11/3(土)、神戸GCPシンポジウムを開催。当日は、教育界、経済界、学外学修先受入れ担当者による基調講演、本学の特徴ある海外プログラムへ参加した学生による4件の学外学修活動成果発表、平成30年度8-9月に実施された学外学修コースによる活動成果報告のポスター展示、基調講演者、発表学生計9名による「海外での学びをどう活かすか」をテーマにしたパネルディスカッションを通じ、本プログラムの取組状況を振り返り、低年次で主体的に取り組む学外学修活動に参加する意義を再認識し、また、本学のグローバル人材育成に向けた今後の展開について考える機会となった。なお、当日は学内関係者及び一般参加者約100名の参加があった。

・英語力向上セミナー

英語ネイティブ格子指導の英語のスピーキングに重点を置いたセミナーを6月下旬から7月下旬にかけ実施した。週1日1コマ(90分)計5回開講し、23名が受講した。

・広報関係

＜プログラムパンフレット及び専用HP＞

昨年度11月より今年度パンフレットを作成し、2月中旬に完成したものを3月下旬より学内配布

開始。

GCP 関連イベントの告知等を専用 HP に掲載。

また、前期、後期、各時期に実施されるコースの募集案内や、各時期の学外学修コース参加学生による体験談も専用 HP で発信した。

さらに、SNS で学生生活に役立つ情報を収集する学生の主流に合わせ、本プログラムの Facebook ページを立ち上げ、HP の内容をフォローする形で本プログラムの情報発信を行い、学生が本プログラムのお知らせ等に日常的に目に触れるようにした。

<学外への広報>

- ・首都圏及び阪神地域で開催される大学フェアで本プログラムパンフレット配布（6-9 月）
- ・本プログラムシンポジウム案内送付時、全国の主要大学、SGH、各都道府県教育委員会等へ本プログラムのパンフレットを配布（9 月）

<そのほか本学発刊掲載冊子/雑誌、学内参加イベント>

- ・大学案内 2018, p. 21.
- ・学生生活案内 平成 30 年度版, p. 72.
- ・広報誌「風」12 号, 2018. 12 月, p. 22.
- ・ホームカミングデイ 記念式典内での活動成果発表（10 月）

(12) グローバルチャレンジコース(学生企画型) タイプB (グローバルチャレンジコースB)

<前期>

- ①グローバルチャレンジコースB (ハーバードメディカルスクール)
- ②グローバルチャレンジコースB (アイスランド)
- ③グローバルチャレンジコースB (ベトナム・ハノイ)

《平成 30 年度コース実績》

- ・参加学生数：①1名、②2名、③1名
- ・学外活動学修時期：①平成30年8月20日～8月31日、②平成30年8月24日～9月5日、
③平成30年9月14日～9月26日
- ・学外活動学修先：①アメリカ合衆国・ボストン、②アイスランド・フィヤルザビッグズ、
③ベトナム・ハノイ

《学修目標・期待される効果》

(①のコースについて)

【学修目標】自身の関心のある医学研究分野の研究室にある一定期間在籍し、今後、研究者としてどのようにキャリアを積むか考える機会とする。また、将来のアメリカ留学に備え、現地での大学院生活、現地生活がイメージできるよう下見・準備の機会とする。

【期待される効果】研究室の実験や議論に参加し、専門分野の知識や実験スキルなどを向上させる。また研究員と交流することにより、専門分野の英語能力を向上させるほか、今後の学修のモチベーションとする。

(②③のコース共通で記載)

【学修目標】渡航国の社会が抱える課題に関して取り組む組織での活動を通じ、現地社会事情、専門的な知識を深めるとともに、現場の運営ノウハウや現場が抱える問題等について知見を深める。そしてそれを基に上位学年での各自の専門分野の研究や活動に繋げる。また、現地で様々な国籍の人々との共同生活を通じ、自己を見つめ直し、新たな自分を知る機会となり、現地での活動や生活で直面するであろう様々な壁を一つひとつ乗り越えていく方策を思考する能力を伸ばすと同時に、海外で生活する自信をつける。

【期待される効果】学外学修活動を学生自ら企画立案、受入機関との連絡や交渉を自分たちで行うことで、社会人として、広くはボーダレスに活躍できる人材としての対応、行動の起こし方などを学ぶことができる。

《実施内容》

・学生受入先の開拓・調査

- ・学外学修活動で取り組むことができる活動プログラムとして学生に提案ができそうな海外プログラムを持つ教育関連団体と随時打合せを行う。
- ・本学に在籍する留学生と共に、当該学生の母国でフィールドワークやインターンシップが実施できる機関・団体、現地大学を調査、視察

・事前学修

(①のコースについて)

- ・渡航先の町、学外学修活動を行う大学院と関連機関、研究室の教授が取り組む研究についての講義

と発表

- ・学外学修先で行うプレゼン準備
- ・チャレンジシートの作成、本プログラムで設定した3つの目標能力の自己評価
- ・危機管理学修
- ・渡航に際してのガイダンス

(②③のコース共通で記載)

- ・渡航先で取り組む活動テーマに沿った渡航国の現状についての講義と発表
- ・現地活動の準備（活動で使用するような専門用語に関する英語学修等）
- ・チャレンジシートの作成、本プログラムで設定した3つの目標能力の自己評価
- ・危機管理学修
- ・渡航に際してのガイダンス

・学外学修（小分類されたコース別で記載）

- ①ハーバード大学メディカルスクール：同スクール教育附属病院ベス・イスラエル・ディーコネス・メディカル・センター小林先生の研究室にて、どのように研究が進められているか説明を聞いた
り、実験準備を手伝ったりやり方を指導してもらうなどした。また、研究室の研究者から医療分
野の英語をチュータリングしてもらい、専門英語のスキルを伸ばした。研究室外での活動として、
附属病院の診察に立ち会い、アメリカの診察の進め方、患部への触り方などについて学んだり、
メディカルスクールに在職する日本人研究者数名と会い、キャリアについてのインタビューを行
い、キャリアに関する意見やアドバイスをもらったりしながら、将来設計について視野を広げた。
- ②アイスランド：自然環境保護のボランティアで草刈り、ゴミ拾いといった活動を通じ、アイスラ
ンドの環境保護について見識を深めるとともに、アイスランド人のゴミに対する意識を学ぶ。ま
た、滞在は様々な国籍のボランティアとの共同生活だったことから、日本料理を教えたり、日本
文化紹介や折り紙をしたりして交流を図った。
- ③ベトナム：2つのボランティア活動に従事した。1つ目は、仕事を求め都市部に来たが生活が立
ち動かなくなり水上生活をする人々の村（フィッシャービレッジ）で、生活水のろ過装置の手入
れ作業を行ったり、水上の家と岸をつなぐ橋を修理したり、中秋節のお菓子を村人に配るなどの
活動を行った。続いて、精神的・知的障害のある子どもが過ごす児童福祉施設で、中秋節に行わ
れる行事に参加し、子どもたちの踊りの発表や運動会のようなイベントを観覧するほか、中秋節
のお菓子や仮面を作り、子どもたちへ配った。その他、施設職員に運営課題に関するインタビュ
ーを行い、NGOの支援のみならず、支援される側の置かれている状況について理解を深めた。

・事後学修（全コース共通で記載）

- ・活動の振り返りと共有
- ・リフレクションシートとフィードバックシートの作成、本プログラムで設定した3つの目標能力の
自己評価
- ・全体報告会での活動生活発表のための発表資料、もしくはパネル展示用活動成果報告ポスターの作
成

・学生が企画した活動

今コース3件の学外学修活動は学生が企画した活動となります。

その意味では上記の活動内容3件

《自己評価・成果及び課題》

【自己評価】 3：計画通り実施できた

・ルーブリック評価

※4名について記載

＜チームワーク力＞

・1-1 について、渡航前に水準1とした学生が1名、水準2とした学生が3名である。渡航後、渡航前に水準2とした学生3名は水準2のまま変わりがなく、水準1とした学生は水準2に1段階上げている。

・1-2 について、渡航前に水準3・1名、水準2・2名、水準1・1名であった。渡航後、渡航前に水準3あるいは水準2としていた学生が、渡航後、水準を1つ下げ、水準3→水準1、水準3→水準1としている。また、渡航前に水準2としたもう1名は、渡航後も水準に変わらない。渡航前に水準1とした学生は渡航後、水準2に1つ段階を上げている。水準を下げている学生が半数いることについて、取り組んだ活動内容への記述を読むと、これは従来、自分が属していた社会でのスケールから、現地での活動で、多様な人たちと実践的な活動するというスケールが広がり、自分をより広い視野で捉えた結果だと考えられる。

＜自己修正力＞

・2-1 について、4名全員、渡航前の評価を水準2としている。渡航後、うち2名が水準3と段階を上げ、残る2名は水準2のままで変化がない。

・2-2 について、渡航前に水準3とした学生が2名、水準2とした学生が2名いたが、渡航後、水準3とした学生2名は段階を維持、水準2とした学生2名は、1名が水準3へ段階を上げ、1名が水準1へ段階を下げた・

＜課題挑戦力＞

・全体的に渡航前から自己評価の水準が高く、水準3・3名、水準2・1名となっている。渡航前に水準3とした学生は渡航後、水準3を維持した学生が1名、水準2へ段階を落とした学生が2名。渡航前に水準2とした学生も渡航後の水準は2のままで変化がない。

・具体的な成果

- ・今後の学修課題の認識
- ・現地社会や文化への理解促進
- ・英語コミュニケーション能力の向上

・今後の課題・改善点

後期、本コースへの学生の参加がなかったため、参加を更に促進するために提携プログラムを強化し、活動オプションを増やす。

《その他》

・派遣先の拡充(H31)

本コースと趣旨の合う海外プログラムを提供する外部団体関係者と打合せを行った。

・非常勤職員の雇用、FD・SDの実施、英語力向上セミナー、広報関係

「(11) グローバルチャレンジコース(学生企画型) タイプA」の同項目を参照。

(13) フィールドワークチャレンジコース (フィールドワークコース)

<前期>

- ①フィールドワークチャレンジコース (マレーシア)

<後期>

- ②フィールドワークチャレンジコース (ミャンマー・ヤンゴン)
③フィールドワークチャレンジコース (ミャンマー・マンダレー)
④フィールドワークチャレンジコース (タイ)
⑤フィールドワークチャレンジコース (ドイツ) [不催行]

《平成 30 年度コース実績》

- ・参加学生数：① 5名、② 2名、③ 4名、④ 3名、⑤ 0名
- ・学外活動学修時期：①平成 30 年 9 月 3 日～9 月 25 日、②平成 31 年 2 月 18 日～3 月 2 日、
③平成 31 年 2 月 18 日～3 月 2 日、④平成 31 年 2 月 18 日～3 月 2 日、
⑤不催行
- ・学外活動学修先：①マレーシア・クアラルンプール及びスバンジャヤ、シンガポール
②ミャンマー・ヤンゴン/チャイティヨー
③ミャンマー・ヤンゴン/マンダレー/バガン
④タイ・チェンライ/バンコク/アユタヤ、ミャンマー/タチレク
⑤ドイツ・フランクフルト及びデュッセルドルフ [不催行]

《学修目標・期待される効果》(全コース共通で記載)

- 【学修目標】日本政府機関/企業訪問、フィールドリサーチ活動や現地の人との交流や意見交換を通じて得た様々な気づきから自身のキャリア形成を考える機会とする。
- 【期待される効果】マスメディアによる報道やインターネットから得る情報ではなく、東南アジアの現在を自分の眼、自分の肌で感じ、知見を深めたり、様々なキャリアやバックグラウンドを持つ人々と交流したりすることで、自身の考え方、視点、キャリア形成等にインパクトを与える。

《実施内容》

・学生受入先の開拓・調査

- ・本学に在籍する留学生と共に、当該学生の母国でフィールドワークやインターンシップが実施できる機関・団体、現地大学を調査、視察

・事前学修

(①のコースについて記載)

- ・渡航国の社会、政治、経済、宗教、文化、歴史等に関する概論的な講義と各活動テーマに関する講義
- ・渡航国に関する自分の関心や専門性と結び付けたトピックを一つ選び、調べた結果を発表
- ・現地での活動準備

<例>マレーシア：フィールドリサーチの準備、

ミャンマー：現地大学での交流会で実施する日本文化紹介のプレゼンテーション準備、

タイ：植物観察の準備（観察シートの作成等）

- ・ チャレンジシートの作成、本プログラムで設定した3つの目標能力の自己評価
- ・ 危機管理学修
- ・ 渡航に際してのガイダンス

・ 学外学修

- ①マレーシア：大きく3つの活動（英語学修、機関・企業訪問、フィールドリサーチ）に取り組んだ。

まず、クアラルンプールにてオーストラリア系の英語学校（ELC）で2週間、英語の授業を受講。その後、スバンジャヤでのフィールドワーク活動に入った。JETRO マレーシア事務所、MIDA（マレーシア投資開発庁）にて、マレーシアの経済事情、外国からの投資状況、日本企業の進出状況等について理解を深め、また、キューピー・マレーシアを訪問し、日系食品会社がイスラム社会に進出する際の課題、商品開発の工夫等を学んだ。その他、2～3名のグループに分かれ、グループ毎にリサーチテーマを設定し、それに基づき街頭インタビューや店員への聞き取り調査を行い、その調査を分析、結果をまとめ、英語で発表し、マレーシア社会の事象について理解を深めた。その他、マレーシア駐在の本学OBOGとの交流会等も実施した。

- ②ヤンゴン：ミャンマーにおける日系企業の活躍を知るための活動を中心に大きく分けて5つの活動（日系機関・日系企業訪問、ミャンマーの日本語教育事情を知る、現地学生交流、フィールドリサーチ、ミャンマーの仏教、歴史を学ぶ）に取り組んだ。

まず、日本大使館、JETROを訪問し、現地概況、日本の対ミャンマーODA、ミャンマー経済や日系企業の現地投資状況等を学ぶ。現地企業と事業提携、或いは買収し事業展開している日系企業を訪問し、ミャンマーでの事業内容や市場の傾向についてブリーフィングを受けたり、現場を視察したりした。また、現地携帯電話会社の販促キャンペーンにインターンとして参加した。現地日本語教育事情を知るため、ティンミャンマーランゲージセンターやヤンゴン外国語大学(YUFL)日本語学科を訪問。国際交流基金より派遣され YUFL で教鞭を執る日本語教師により同国の日本語関心度や日本語教育の現在の状況について学ぶ。また、日本文化を紹介したり、折り紙を行ったりするなどして、学生交流を図った。これに加え、YUFL の学生とはバディを組み、予め提示したトピックを基にヤンゴン市内で街頭インタビューを行うフィールドリサーチを行った。その他、ヤンゴン市内、チャイティヨーで寺院や仏教遺跡を視察し、上座部仏教及びミャンマーの文化について知見を深めた。

- ③マンダレー：ミャンマーの上座部仏教と歴史を学ぶ活動を中心に大きく分けて5つの活動（寺院・僧院、遺跡視察、機関・企業訪問、ミャンマーの日本語教育事情を知る、現地学生交流、フィールドリサーチ）に取り組んだ。

今コースのミャンマーの仏教を学ぶ学修としては、ヤンゴン、マンダレー、バガンの寺院や僧院を訪問するほか、ヤンゴンで日本大使館、ミャンマー概況や日緬関係について学んだ後、マンダレーで日系企業を訪問し、日系企業の現地事業展開がミャンマー社会へどのような貢献をしているか、インパクトを与えているかについて学んだ。また、日本語学校2校（ティンミャンマーランゲージセンター（ヤンゴン）と“のりき”日本語学校（マンダレー））を訪問、また、マンダレー外国語大学を訪問し、日本語を学ぶ学生と日本文化紹介のプレゼンを行い、同世代の学生と交流を行った。また、マンダレー外国語大学の学生とはバディを組み、予め提示したトピックを基に、マンダレー市内で街頭インタビューを行うフィールドリサーチを行った。そして仏教を学ぶ活動としては、早朝の托鉢、僧院学校の視察、僧侶から上座部仏教に関する講義や寺院でお祈りの捧げ方を学んだり、歴代王朝の都が置かれたマンダレー、インワ、アマナプラ、ミンゴン、ザ

ガイン、バガン、そしてヤンゴンの仏教遺跡や寺院を訪問したりし、上座部仏教の歴史や文化への理解を深めたほか、ビルマ中世～近代の歴史、各時代の建築様式等について学修した。また、マンダレー、ザガインで第二次世界大戦中、同国に進軍した日本軍の痕跡を辿ることで、先の戦争におけるアジアでの日本軍の歴史を改め知る機会となった。

- ④タイ：チェンライ北部での植物観察を中心大きく4つ（植物・植生観察、タイ・ミャンマー・ラオス国境地帯の視察、かつてゴールデントライアングル地域一帯の歴史を学ぶ、タイの仏教、歴史、文化についての学修）に取り組んだ。

植物・植生観察は、チェンライ県内の3つの国立公園及び森林公園1か所で樹木を中心とした植物観察を行った。その結果は図鑑を編纂する際の参考となるようカルテにまとめ、また今回の活動成果を発信するためにHPを立ち上げ、そちらでも観察結果を公表する準備をした。また、タイ・ミャンマー・ラオスの国境地帯を視察し、人の移動や流通の様子を観察したり、かつてこの地域一帯で盛んに栽培されていたアヘン栽培とそれに翻弄された地域の歴史及びアヘンと人類の歴史やアヘンの代替作物としてのコーヒー栽培への転換事業、王室によるこの地域の住民の生活の質向上事業の取組などを学んだりした。その他、チェンライ市内、バンコク、アユタヤの仏教寺院や仏教遺跡を視察し、タイの仏教文化や歴史についても造詣を深めた。

<参考>

不催行コースの学修予定内容と不催行理由は次の通り

- ⑤ドイツ：フランクフルトにて欧州中央銀行、日系企業、現地大学訪問。デュッセルドルフにて日系企業、日本人学校を訪問。また、ドイツ同窓会との交流。

不催行理由―活動を実施依頼した団体と渡航費用面で折り合わず、最小催行人数を集めることができないと判断されたため、実施を見送った。

・事後学修（全コース共通で記載）

- ・活動の振り返りと共有
- ・リフレクションシートとフィードバックシートの作成、本プログラムで設定した3つの目標能力の自己評価
- ・全体報告会での活動生活発表のための発表資料、もしくはパネル展示用活動成果報告ポスターの作成

・学生が企画した活動

- ①マレーシア：フィールドリサーチ、シンガポールでの学修活動
- ②ミャンマー（ヤンゴン）：日本文化紹介プレゼン（2回）、折り紙のワークショップ、チャイティヨーでの学修活動
- ③ミャンマー（マンダレー）：日本文化紹介プレゼン（2回）、バガンでの学修活動
- ④タイ：植物観察結果のHP作成、アユタヤでの学修活動

《自己評価・成果及び課題》

【自己評価】4：計画を十分実施できた

・ルーブリック評価

※全14名分

<チームワーク力>

・1-1 について、渡航前に水準2とした学生が7名と最も多く、続いて水準1が6名、水準3が1名であった。この渡航前に水準2としたもののうち、5名は渡航後も水準2としており変化がなかったが、残る2名は水準2から水準3へ1つレベルを上げた学生、水準2から水準1へレベルを1つ下げた学生がいる。また、水準1とした学生6名は渡航後、いずれもレベルを上げており、水準1から水準2が2名、水準3へは4名である。また、渡航前に水準3とした学生は渡航後、水準2とレベルを下げています。

・1-2 について、渡航前水準2とした学生が10名と最も多く、続いて水準1が3名、水準3が1名であった。この渡航前に水準2とした学生のうち4名が渡航後に水準1にレベルを下げており、続いて3名が水準2のままで変化がなく、水準2から3へレベルを1段階上げた学生は3名となっている。また、渡航前に水準1とした学生3名の渡航後の評価は三者三様で、渡航後、水準1と変化のない学生が1名、レベルを1段階上げ水準2とした学生が1名、2段階上げ水準3とした学生が1名となっている。そして渡航前に水準3とした学生は渡航後もその評価を水準3と維持している。

<自己修正力>

・2-1 について、渡航前に水準0・1名、水準1・7名、水準2・4名、水準3・2名であった。渡航後、水準0だった学生はレベルを1つ上げている。渡航前、水準1とした7名も全員レベルを上げているが、うち3名は水準2に、4名が水準3にレベルとなっている。また、渡航前に水準2と自己評価した4名のうち、渡航後に1名はレベルを1つ下げ、水準1としたが、残る3名は水準3とレベルを1つ上げた。そして、当初水準3と自己評価した2名のうち、1名は渡航後も水準3を維持、もう1名は水準2へ評価を下げた。

・2-2 について、渡航前の自己評価では、水準0・2名、水準1・7名、水準2・5名、水準3・0名であった。渡航後、水準0だった学生はそれぞれ水準2、水準3と2, 3段階レベルを上げた。また、最も多い水準1と自己評価した学生は、渡航後、水準2が5名、水準3が1名と1, 2段階レベルを上げたが、水準1のままとした学生も1名いた。そして、渡航前に水準2とした学生5名は、3名が渡航後も水準2とする一方、水準3とした学生が1名、水準1とレベルを下げた学生が1名となっている。

<課題挑戦力>

・渡航前の自己評価では水準0・2名、水準1・5名、水準2・6名、水準3・1名であった。渡航後、渡航前に水準0とした学生は、水準0のままが1名、水準を一気に3段階上げ水準3と自己評価する学生1名である。そして、渡航前に水準1とした5名の学生のうち、3名が渡航後に水準2、2名が水準3と自己評価している。また、渡航前に水準2とした6名のうち4名が渡航後も水準2のまま、2名が水準3とした。最後に、渡航前に水準3と自己評価した学生は、渡航後も水準3を維持している。

・具体的な成果

- ・ASEAN 諸国の現在の情勢について知見を得た。
- ・イスラム、仏教に対する理解を深めた。
- ・学外学修国の日本との関わりや固有の歴史について知識を深めた。
- ・現地の人との交流や街頭調査を通じ、異文化理解を促進した。
- ・今後のキャリアビジョンを考える機会となった。

・今後の課題・改善点

フィールドワークの学外学修は学生が受動的に学修することが続く傾向にあるため、自主的に活動

を企画し、取り組む要素をさらに盛り込む。

《その他》

・派遣先の拡充 (H31)

アジア圏外でのフィールドワークコースを実施予定

・非常勤職員の雇用、FD・SD の実施、**英語力向上セミナー**、広報関係

「(11) グローバルチャレンジコース(学生企画型) タイプA 」の同項目を参照。

(14) インターンシップチャレンジコース (インターンシップコース)

<前期>

- ①インターンシップチャレンジコース (インド)
- ②インターンシップチャレンジコース (ベトナム)
- ③インターンシップチャレンジコース (モンゴル) [不催行]

《平成 30 年度コース実績》

- ・参加学生数：①1名、②1名、③0名
- ・学外活動学修時期：①平成 30 年 8 月 27 日～9 月 21 日、②平成 30 年 9 月 3 日～9 月 28 日、
③不催行
- ・学外活動学修先：①インド・デリー、②ベトナム・ホーチミン、
③モンゴル・ウランバートル [不催行]

《学修目標・期待される効果》

(①②のコースについて記載)

【学修目標】海外での業務や生活は、現地の人々のサポートがなければ社会生活を円滑に営めないという実体験を通じ、渡航国の慣習、考え方、宗教、文化、歴史等を深く理解すると共に、現地の人々を尊重することが重要であることを再確認すること。また、日本を外から見ることで、日本の尺度、価値観等が全ての基準ではないということを知ると同時にグローバルパーソンに求められる要素を考察する。

【期待される効果】異文化理解の促進。海外である一定期間、同じ場所に身を置くことで自己を客観的に捉え直し、新たな自分を発見し、キャリアパスを考えるきっかけにすること。

《実施内容》

・学生受入先の開拓・調査

- ・本学に在籍する留学生と共に、当該学生の母国でフィールドワークやインターンシップが実施できる機関・団体、現地大学を調査、視察
- ・本学を卒業した同窓会ネットワーク関係者より、インターンシップ受入れ候補の現地企業や団体を紹介いただき、視察や打合せを行った。

・事前学修

(①②のコースについて記載)

- ・渡航国の社会、政治、経済、宗教、文化、歴史等に関する概論的な講義
- ・渡航国に関する自分の関心や専門性と結び付けたトピックを一つ選び、調べた結果を発表
- ・現地で従事する業務の下準備
- ・チャレンジシートの作成、本プログラムで設定した 3 つの目標能力の自己評価
- ・危機管理学修
- ・渡航に際してのガイダンス

・学外学修

(①②のコースについて記載)

- ①インド：日本語学校での日本語授業補助（会話練習や字の書き方指導等）、日本文化・日本事情紹

介及び教材作成。その他、インドの歴史や文化を学ぶため、歴史的建造物・文化施設への訪問視察なども行う。

- ②ベトナム：日系コンサルタント会社にて、現地在留邦人対象にホーチミンの居住環境に関するヒヤリング、現地学生へ高校や大学受験制度についての調査の補助のほか、同社が経営する日本の服を売る店舗の管理を行う。また、同社より日系学習塾に派遣され、日本語授業の指導補助も行った。

<参考>

不催行コースの学修予定内容は次の通り

- ③モンゴル：ウランバートルの高専の日本語授業で日本語教育補助、日本文化・日本事情教育の補助及び学校行事の運営補助。モンゴルの本学同窓会ネットワークとの交流。

・事後学修（全コース共通で記載）

- ・活動の振り返りと共有
- ・リフレクションシートとフィードバックシートの作成、本プログラムで設定した3つの目標能力の自己評価
- ・全体報告会での活動生活発表のための発表資料、もしくはパネル展示用活動成果報告ポスターの作成

・学生が企画した活動

- ・インド：日本文化紹介発表1件
- ・ベトナム：該当なし

《自己評価・成果及び課題》

【自己評価】4：計画を十分実施できた

・ルーブリック評価

※2名について記載

<チームワーク力>

- ・1-1について、渡航前に2名とも水準2と評価しているが、渡航後に変わりのないとする学生が1名（水準2→水準2）、レベルを1つ上げた学生が1名となっている（水準2→水準3）。
- ・1-2については、渡航前に水準2とした学生1名はレベルの変化がない一方、渡航前に水準1とした学生は水準2と上げた。

<自己修正力>

- ・2-1について、渡航前に2名とも水準2と評価しているが、渡航後に変わりのない学生1名（水準2→水準2）、レベルを1つ上げた学生1名（水準2→水準3）となっている。
- ・2-2については、渡航前に水準1とした学生は水準2にレベルを1つ上げる一方、渡航前に水準3と高評価を付けた学生は渡航後、水準2にレベルを1つ下げた。

<課題挑戦力>

- ・渡航前に2名とも水準1と評価していたが、渡航後に変わりのない学生（水準1→水準1）、レベルを2つ上げた学生（水準1→水準3）がいる。全体を通じて、渡航前と渡航後の自己評価に変化の乏しい学生がいるが、これは前年度にも本プログラム別コースに参加しているため、前年度から自己評価をしているため、評価がほかの学生よりも厳しくなっているのではないかと考えられる。

・具体的な成果

- ・社会的なスキルが醸成できた（業務に際しての態度、効率よく業務を進める、様々な価値観を受け入れる、積極性、視点の転換等）
- ・異文化理解の重要性を認識
- ・コミュニケーション能力の向上
- ・キャリアを考える機会となる

・今後の課題・改善点

今年度、モンゴルでの学外学修コースが不催行となったため、次年度は参加促進に努める。

《その他》

・派遣先の拡充(H31)

インターンシップに関しては、インドでの企業インターンシップとアルメニアでの日本語・日本事情指導教育補助のインターンシップを実施予定

・非常勤職員の雇用、FD・SDの実施、英語力向上セミナー、広報関係

「(11) グローバルチャレンジコース(学生企画型) タイプA 」の同項目を参照。

(15) ボランティアチャレンジコース (ボランティアコース)

<前期>

① ボランティアチャレンジコース (ネパール)

<後期>

② ボランティアチャレンジコース (ラオス) [不催行]

《平成 30 年度コース実績》

- ・参加学生数：① 3 名、② 0 名
- ・学外活動学修時期：① 平成 30 年 9 月 3 日～9 月 15 日、② 不催行
- ・学外活動学修先：① ネパール・カトマンドゥ及びダディン郡、
② ラオス・ビエンチャン及びルアンパバーン [不催行]

《学修目標・期待される効果》(全コース共通で記載)

【学修目標】困難な状況に直面した際の問題解決能力や創意工夫する力、コミュニケーション能力を伸ばす。また、短期間であるが、開発途上国の現状を見たり、現地で活動したりすることを通じ、開発支援活動の在り方、開発協力の意義、日本が果たせる役割について考える機会とする。

【期待される効果】自分たちと全く異なる環境で暮らす人々とともに作業をすることで、現地の人から学ぶ重要性を認識し、そこに暮らす人々たちにとって効果のある活動は何かを考察したり、国際協力分野でのキャリアを積む場合、個々が今後身につけたい知識、技術を見つけたりした。

《実施内容》

・学生受入先の開拓・調査

- ・ネパールでの活動地域の拡大を図った。

・事前学修

(①コースについて記載)

- ・ネパールの社会、政治、経済、宗教、文化、歴史等に関する概論的な講義とネパールの教育現状、学校現場の実情に関する講義
- ・渡航国に関する自分の関心や専門性と結び付けたトピックを 1 つ選び、調べた結果を発表
- ・現地での活動準備
- ・チャレンジシートの作成、本プログラムで設定した 3 つの目標能力の自己評価
- ・危機管理学修
- ・渡航に際してのガイダンス

・学外学修

①ネパール：カトマンドゥにて日本大使館や JICA を訪問し、現地概況、教育事情、日本の開発支援活動への貢献、震災後のネパールの状況などについてレクチャーを受ける。また、現地の公立学校 2 校を訪問し、都市部の公立学校を視察、子どもたちと交流するとともに、校長からブリーフィングを受け教育現場が抱える問題などについて理解を深める。続く、ダディン郡の農村部の小学校にて、学生が企画した青少年活動（図工、体育や現地の歌や踊り）を実施。その他、身体障がい者の

職業訓練校を訪問し、交流。村の農作業を手伝うボランティア、や日本料理を作り、村の人たちへ振舞い、交流を図った。その他、ヒンドゥー教寺院や博物館などを視察し、ネパールの歴史、ヒンドゥー教、ヒンドゥー文化について理解を深めた。

＜参考＞

不催行コースの学修予定内容と不催行理由は次の通り

②ラオス：ビエンチャンにて日本大使館、JICA を訪問し、現地概況や教育事情に関するレクチャーを受けるほか、ビエンチャンの都市部小学校訪問、ラオス国立大学日本語学科の学生との交流会等。続いて、ルアンパバーンの農村部の小学校にて学生が企画した青少年活動を行う。

不催行理由－青少年活動実施予定の小学校が学校の事情により受入ができなかったため実施を見送った。

・事後学修（全コース共通で記載）

- ・活動の振り返りと共有
- ・リフレクションシートとフィードバックシートの作成、本プログラムで設定した3つの目標能力の自己評価
- ・全体報告会でのパネル展示用活動成果報告ポスターの作成

・学生が企画した活動

村の小学校での青少年活動全般

《自己評価・成果及び課題》

【自己評価】4：計画を十分実施できた

・ループリック評価

※3名分について記載

＜チームワーク力＞

・1-1 について渡航前の自己評価では水準1, 2, 3それぞれ評価が分かれているが、渡航後でのそれぞれの評価に変化が見られない。また、1-2 についても同様である。

・1-2 について渡航前に水準2とした学生2名、水準1とした学生1名となっているが、こちらも1-1と同様に、渡航後のそれぞれの評価に変化が見られない。

＜自己修正力＞

・2-1 について、渡航前に水準1とした学生2名、水準2とした学生1名となっている。渡航後、渡航前に水準1とした学生2名とも1, 2段階上げ、水準2または水準3と評価している。また、渡航前に水準2とした学生は、渡航後に水準の変化はない。

・2-2 について、渡航前の評価で、水準0とした学生が2名、水準1とした学生が1名となっている。渡航後、渡航前に水準0とした学生2名ともに、水準2と段階を上げた。また渡航前に水準1とした学生は、渡航後に水準の変化はない。

＜課題挑戦力＞

・渡航前に水準2とした学生2名、水準0とした学生1名となっている。渡航後、渡航前に水準2とした学生は水準2のまま、もしくは水準1へ段階を下げています。また、渡航前に水準0とした学生は水準1としています。

・具体的な成果

- ・自分に足りないスキルや要素について気づきを得た
- ・直面する問題に状況を分析し対処する力、ものないところで、創意工夫して活動する力、どのような環境でも柔軟性に対応する力、積極性を伸ばした。
- ・ノンバーバルコミュニケーション能力の醸成
- ・開発途上国の現状への理解を深化、異文化理解の促進
- ・どの国でも英語力が求められることを認識

・今後の課題・改善点

今年度、モンゴルでの学外学修コースが不催行となったため、次年度は参加促進に努める。

《その他》

・派遣先の拡充(H31)

農村部の青少年活動を実施する小学校を増やす。

・非常勤職員の雇用、FD・SD の実施、英語力向上セミナー、広報関係

「(11) グローバルチャレンジコース(学生企画型) タイプA 」の同項目を参照。

なお、以下の1コースについては、募集した結果、参加者が催行人数に達せず、平成30年度は実施しなかった。

(16) 理学グローバルチャレンジ Tsinghua/Life コース (理学 Tsinghua コース)

《平成30年度コース実績》

- ・学外活動学修時期：平成30年8月～9月（3週間程度を予定）
- ・学外活動学修先：中華人民共和国・清華大学生命科学学院

《学修目標・期待される効果》

基本となるサイエンスを学ぶだけでなく、異文化に身を置くことにより、自らが身を置く専門分野以外のサイエンスも含めて、より総合的に学ぶことで、サイエンスの理解をさらに深化させる。

3. プログラム全体の自己評価 ―成果と課題―

3-1. プログラム目標能力に関する自己評価

本プログラムでは、参加学生が卒業するまでに身に付ける3つのチカラ（「チームワーク力」「自己修正力」「課題挑戦力」）をルーブリックにより測定することとし、神戸GCP委員会で制定したルーブリック指標（表1）をプログラム全体で統一して利用している。参加学生は事前学修時、事後学修時に加えて、参加した翌年度以降も毎年1回、卒業時までルーブリックによる自己評価を行う。

なお、平成30年度の参加学生だけでなく、平成29年度及び平成28年度の参加学生も改訂したルーブリック指標により自己評価を行い、プログラム参加後の経年変化を測定している。

表1：ルーブリック指標（上段：平成28年度／下段：平成29年度以降（改訂版））

H28	水準0		水準1		水準2		水準3	
	チームワーク力	他者とともに学ぶ	一参加者としての段階	● 自分の意見を他者に分かるように説明することができる。 ● 他者の意見を理解するために、質問をすることができる。（＝問いかけを厭わない） ● 他者の意見、姿勢、感情に共感することができる。	周辺の立場から運営に関わる段階	● 他者の個性や特質をふまえて接することができる。 ● 困っていることがないか、声掛けなどをして他者をサポートできる。	リーダー役やマネージャー役を果たす段階	● 質問や観察などを通して、他者の意見を引き出すことができる。 ● 他者の個性や特質をふまえて、適切な課題を提示することができる。 ● 他者を励まし、他者の意欲を高めることができる。
	自己修正力	他者から学びとる	他者からの指摘に耳を傾ける段階	● 他者に意見を求めることができる。 ● 他者から自分に対する反対意見や批判的意見を、感情的にならずに聞くことができる。	指摘の意味を把握し自分のものとする段階	● 自分の考え方(思考パターン)や行動の仕方(行動パターン)を知っている。（＝自己パターンの把握） ● 他者からの指摘を、自己パターンに当てはめて解決策・修正策を考えることができる。	自己の思考や学修方法を適切に修正できる段階	● 自己の解決・修正に向けた取り組みべき諸課題を知り、その優先順位を付けることができる。 ● 自分で設定した課題と、その優先順位に従い、(課題に)取り組むことができる。 ● 修正プロセスに間違いを見つけたら、そのプロセスを修正することができる。
	課題挑戦力	目標を見極める	与えられた問題の解決に必要な能力を見極める段階	● 複数ある課題に優先順位をつけることができる。 ● 取り組むべき課題について理解し、課題解決に向けて必要な知識や技術を選択することができる。 ● 優先順位に沿って、必要な知識や技術を用いて、課題に取り組むことができる。	挑戦する価値のある課題を設定する段階	● (課題解決に向けた)選択した知識や技術を組み合わせ、課題解決策を組み立てることができる。 ● データ・事実・既知の事柄をもとにして、未知の事柄を推し量ることができる。（＝推論）また、それを言語化(文字・言葉)することができる。	課題を解決するための方略を策定し不断に挑戦し続ける段階	● 失敗したことのある解決すべき課題に、再度(再々度、何度か)取り組むための意思を持続できる。 ● 長期間にわたって感情のコントロールができる。 ● 想定外の事態に対処できる。
H29	3つのチカラ	構成要素	【水準0】 意識していない	【水準1】 気づき	【水準2】 分析・理解	【水準3】 行動・成果	記述（左の選択について、具体的に説明する。）	
	※ 1 チームワーク力	1-1. 学内外の活動へ参加し、自分の役割を担う	水準1に達していない。	活動に参加する際、自分の役割について意識し、理解しようとしている。	活動に参加する際、自分の役割に基づいて発言や行動をしている。	チームの活動において自分の役割を遂行し、それが成果へと繋がっている。	水準2、水準3と回答した人は具体的な内容を書いて下さい。 【記述】	
		1-2. メンバーと協力し、チームの目標を達成する	水準1に達していない。	メンバーの意見や立場を尊重し、チームの目標を理解している。	メンバーの意見や立場を尊重し、意思疎通を図りながらチームの活動に取り組んでいる。	メンバーと協力し、チームの目標を達成している。	水準2、水準3と回答した人は具体的な内容を書いて下さい。 【記述】	
	2 自己修正力	2-1. 自己を認識し、他者への理解を通して、自分の考えや行動を見直すことができる	水準1に達していない。	自分の考えや行動について認識している。	自分以外の人の考えや行動を理解し、自分の見直すべきことについて理解している。	自分以外の人の考えや行動を参考に、自分の考えや行動を見直している。	水準2、水準3と回答した人は具体的な内容を書いて下さい。 【記述】	
		2-2. 得意分野を伸ばし、苦手分野を克服する	水準1に達していない。	自分の得意分野や苦手分野について理解している。	自分の得意分野を伸ばす方法、苦手分野を克服する方法を模索している。	自分の得意分野を伸ばすため、苦手分野を克服するための実践を行っている。	水準2、水準3と回答した人は具体的な内容を書いて下さい。 【記述】	
	3 課題挑戦力	3-1. 課題を見つけ、解決をはかる	水準1に達していない。	解決すべき課題を見つけることができる。	見つけた課題を解決する方法を模索している。	見つけた課題の解決に向けて取り組んでいる。	水準2、水準3と回答した人は具体的な内容を書いて下さい。 【記述】	

※ この「チームワーク」とは、神戸GCPで参加したコースにおけるチーム活動も含めますが、それ以外のチーム活動を想定した回答でも結構です。
（例えば、クラブ活動、ゼミ活動など）

3-1-1. ルーブリック指標に基づく自己評価（平成30年度参加学生）

平成30年度参加学生が事前学修時（コース参加前）及び事後学修時（コース参加後）に行ったルーブリックによる自己評価結果は、表1～3のとおりである。

また、それぞれに関するコース参加前後の自己評価結果を比較したのが図1～3である。いずれの能力においても、コースへの参加によって向上したことが確認できる。

① チームワーク力

事後学修時において「水準3」と回答した学生が、1-1で17.6%、1-2では23.0%それぞれ事前学修時より増加した。水準2以上の学生は、1-1では24.7%、1-2では12.0%増加しており、全体では約7割の学生が事後学修時に水準2以上となっている。特に事後学修時の自己評価では、

「マレーシアで行ったフィールドワークにおいて、2人で役割分担をして自分に任されたことは最後まで責任を持って成し遂げることができたと思う。最終的に中身のある発表が完成した。」「フィールドワークで相手の意見をなるべく否定せずに質問したり、うなずいたりするのを心掛けたこと。」「一緒にプレゼンテーションをする相手と、情報収集の段取りや発表内容の分担をきちんと話し合った上で行動し、プレゼンテーションを無事に終えられた。」

などの具体的な事例・根拠に基づき水準を判断・選択しており、これらのことから、コースへの参加によってチームワーク力が高まったことが窺える。

② 自己修正力

事後学修時において「水準3」と回答した学生が、2-1では15.9%、2-2では13.9%それぞれ事前学修時より増加した。水準2以上の学生は、2-1では23.8%、2-2では29.1%増加しており、全体では7割弱の学生が事後学修時に水準2以上となっている。特に事後学修時の自己評価では、「マレーシアで1ヶ月間いろいろな人と出会い、暮らしたことで、自分と他者との考え方や行動の違いがよりわかるようになり、良い点を取り入れようと努力するようになった。」「人付き合いが苦手だが克服するためにいろんな方法を試している最中である。」

などの具体的な事例・根拠に基づき水準を判断・選択しており、これらのことから、コースへの参加によって自己修正力が高まったことが窺える。

③ 課題挑戦力

事後学修時において「水準3」と回答した学生が、14.0%事前学修時より増加した。また水準2以上の学生が22.7%増加した。全体では約62%の学生が事後学修時に水準2以上となっている。特に事後学修時の自己評価では、「第3Qから英会話学校に通うなど、台湾大学の学生のように積極的に物事に挑戦している。」「大学で学んでいることや、サークルでの活動の経験を生かして自分に何ができるのかを総合的に考えるようになった。」

などの具体的な事例・根拠に基づき水準を判断・選択しており、これらのことから、コースへの参加によって課題挑戦力が高まったことが窺える。

表 1 自己評価結果（チームワーク力）

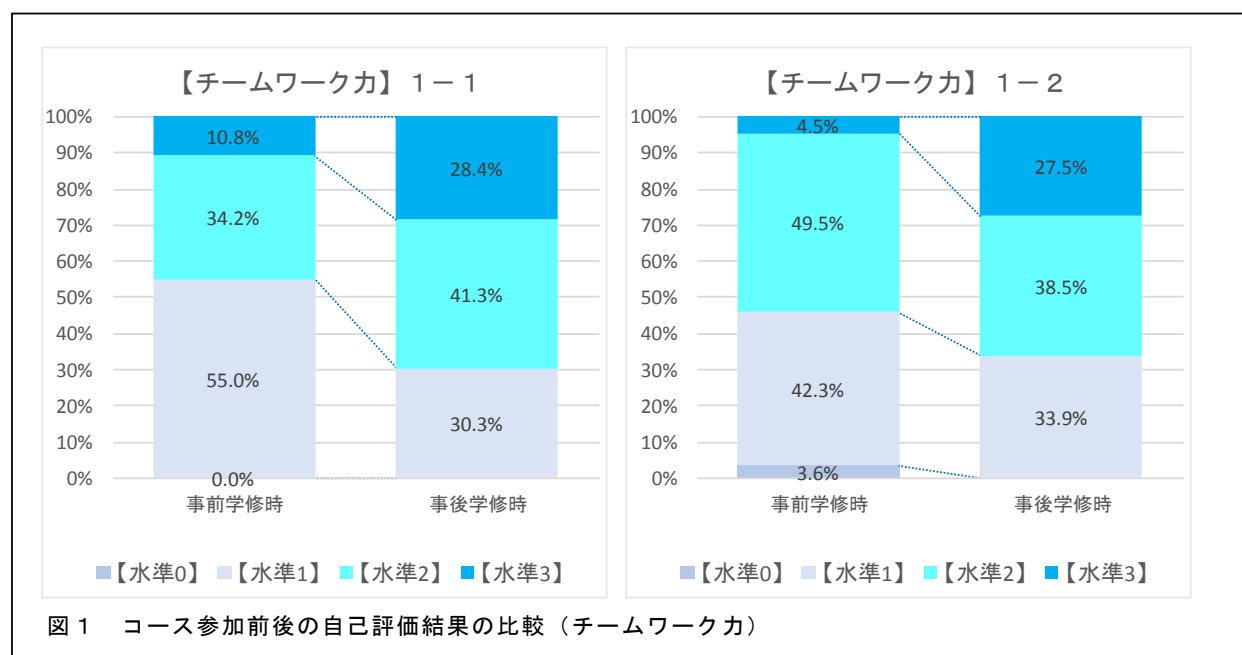
【チームワーク力】

1-1. 学内外の活動へ参加し、自分の役割を担う

		事前学修 (人)	事前学修時	事後学修 (人)	事後学修時
【水準3】	チームの活動において自分の役割を遂行し、それが成果へと繋がっている。	12	10.8%	31	28.4%
【水準2】	活動に参加する際、自分の役割に基づいて発言や行動をしている。	38	34.2%	45	41.3%
【水準1】	活動に参加する際、自分の役割について意識し、理解しようとしている。	61	55.0%	33	30.3%
【水準0】	水準1に達していない。	0	0.0%	0	0.0%

1-2. メンバーと協力し、チームの目標を達成する

		事前学修 (人)	事前学修時	事後学修 (人)	事後学修時
【水準3】	メンバーと協力し、チームの目標を達成している。	5	4.5%	30	27.5%
【水準2】	メンバーの意見や立場を尊重し、意思疎通を図りながらチームの活動に取り組んでいる。	55	49.5%	42	38.5%
【水準1】	メンバーの意見や立場を尊重し、チームの目標を理解している。	47	42.3%	37	33.9%
【水準0】	水準1に達していない。	4	3.6%	0	0.0%



—水準選択における具体的な説明（水準2・水準3）—

【チームワーク力】 1-1. 学内外の活動へ参加し、自分の役割を担う

●事前学修時

【水準3】

- ・部活動で今のチームの現状を考えたり、周りを巻き込むような声かけを率先して行ったりしている。
- ・以下、課外活動として行っている、アイセック神戸大学委員会での活動に関して記述します。アイセックは海外インターンシップの運営を行っていて、活動内容としては、インターンシップを受け入れてくれる

企業を探すため、いろいろな会社に電話をかけアポを取り、営業に行きます。受け入れを承諾してもらい契約できると成果となります。私は営業に行く役割を担い、3つの企業との契約に成功しました。その後も契約した企業とインターンシップに来る海外の学生とのマッチングを行い、つい先月からインターンシップが開始しました。この過程の中で、営業の練習を行ったり、何人もの学生と面接を行い、どうすれば企業に価値を提供できるかなどを考えたりしていました。

- ・私は体育会系フットサル部のマネージャーとして日々活動している。選手のサポートはもちろん、組織においてもフットサルという競技をもっと日本に広めるためにメディア班として普及活動を行っている。
- ・ボール拾いや声出し、次の試合の確認などをしてスムーズな試合展開になるように努めている。
- ・サークルでは積極的にイベントの運営に携わり、フォローし合いながら進めている。
- ・私は ESS という部活に所属しているが、そこでは様々なイベントの運営や仕事をこなすことで部活に貢献している。
- ・クラブ活動において、渉外としての役割を担っているが様々なトラブルがあった際に自分の役割とされていた部分を遂行し、早めに手を打つことができた。
- ・高校の寮生活では 24 人で過ごし、10 人の同期と寮建設や後輩育成に取り組んだ。10 人それぞれが自分の学校、寮生活の経験に基づいて悩む後輩にアドバイスして解決に導いたり励ましたりした。
- ・空手道部において、自分がするべきだと思う仕事を進んで果たしている。
- ・マスターズ甲子園というボランティアで、大会の運営から本番まで関わらせていただきました。本番の半年ほど前から、自分の役割が決まっていた、それを成し遂げるにはどうすればいいかなどを考え、本番では成果を出せた。
- ・高校の文化祭で、劇の準備の際、大道具のリーダーとして目標とスケジュールを照らし合わせながら、人員の采配等に取り組み、本番に間に合わせる事が出来、好評を得た。

【水準 2】

- ・自分が GSP に参加している学生であるということを理解した上で研修に取り組んでいる。
- ・ゼミで合同の発表をする際、役割分担に応じてパワーポイントなどを作成し、発表した。
- ・マップから目的地へ行くための電車を探し出した。
- ・配分された質問などに対して考え発言している。
- ・昔から生徒会や部の幹部としてチームの役割を果たしてきました。今も体育会の部活動の一環として、大学フットサルの普及という役割を広報活動しながら果たしています。
- ・音楽系の部活に参加しています。合宿や演奏会の曲決めなどでチーム活動をする際この点を心がけています。
- ・サークル活動における、学際やその他イベントに向けた準備。
- ・留学生の日本語実習に参加した際、日本人学生としての自分の役割を考えながら留学生とのコミュニケーションの取り方を工夫した。
- ・得意分野、および担当分野においては積極的に発言し、知識の乏しい分野は他人の先導の元活動を行った。
- ・議論を始める際の引き金となるように心がけて行動している。
- ・部活において、後輩に対する技術指導、チームメイトと戦術について議論し合い、互いの理解を深める。
- ・サークル活動でお茶会(喫茶店のようなもの)を運営する活動に参加しているが、洗い物が溜まってきたら食器を洗ったり、来てくれた方で退屈そうにしている人がいる場合には話し相手になったりと状況に応じて変わる自分の役割を認識し行動している。成果につながっているかはまだわからないので水準 2 とした。
- ・サークルの代表補佐として、率先してみんなの意見を聞いたり、スケジュール調整をしたりしている
- ・中学・高校時代の部活では積極的に役職に就いた。責任感が強いと思っているので、部員に忠告することも多かった。
- ・サッカー部で部長を務めたことがあり、その時にチームを率先して発言や行動をしていた。
- ・サークルでのボランティア活動。
- ・サークル活動において、試合のときに場の雰囲気が良くなるように、声かけをしました。
- ・部活中に一回生とい立場を考慮しつつ、議論中に発言をする。
- ・アルバイトの勤務先で教育係としてわかりやすい指導・手本となるような行動をしている。
- ・ここではまだだが、サークルでの新歓担当で、様々な企画についての提案や批評を積極的に行なった。

- ・高校生の自分において、クラブ内で与えられた副部長としての役割を果たすため、部長の補佐またクラブ全体がしっかりと動くことのできる潤滑油として他のチームメイトと積極的にコミュニケーションをとったから。
- ・部活動では、ミーティングの際、自身の役回りを意識して発言するようにしています。
- ・委員長として文化祭などでクラスの役割をその人にあった適性に基づいて指名した。
- ・ランニングサークルに所属し、自分が練習リーダーの日にはチームのみんなに声をかけて引っ張った。
- ・所属していた合唱団で、パートリーダーとして1年間パートをまとめられた。
- ・高校時代の部活で副キャプテンだった。他の人がやらない雑用をしたり積極的に部員に話しかけて雰囲気をもくしたりした。
- ・現在所属している部活で、打ち上げをした時に、下準備や料理の手伝い、後片付けを積極的に手伝いました。
- ・高校時代に生徒会に所属しており、文化祭や体育祭の企画時に今までになかった幕間の演出や新競技などを提案し、協力して実行した。
- ・生徒会の書記をやり、一年間会長を支えた。でも、自ら行動することはなく、常に受け身だった。
- ・夏休みに UPLB に行った際、お世話になった人へのアルバム作成を担当した。
- ・サークルで PJ に所属し、TNM という役割で活動。基本的に生活面の補助を担当した。
- ・現在 SA として毎週の授業アシスタントを行っており、自分の役割を理解し、それを果たすために活動している。しかし、いつもそこから得られるアウトプットは 100%満足いくものではない。確実な成果を生む行動を取る能力が必要である。
- ・部活動のとき自分のポジションに求められること強みはなにかを理解して行動に移していた。
- ・中、高の部活動(バレー部)で大きな成果にはなっていないが、主体的な行動はとれた。課外活動への参加も意欲的だった。

●事後学修時

【水準3】

- ・クラブ活動で、キャプテン、いちプレイヤーとして自分の出来ることを精一杯やっている。
- ・留学先の授業内におけるポスターを用いたグループのプレゼンテーション。
- ・バイト先での新人指導、サークル活動での備品の買い足しなど。
- ・語学学校でプレゼンなどの課題を行った際に、自分の担当の箇所だけでなく、課題を最後にまとめた。
- ・ボランティアなどでも、自分の役割を把握して遂行し、ペアとのプレゼンテーションにおいても役割を分担して行った結果うまくいった。
- ・参加したボランティア活動できちんと自分の仕事を行った。
- ・チームでプレゼンテーションを行うための、インタビューを率先して行った。
- ・GCP 内の活動の企画や、報告書の作成に取り組んだ。
- ・スライドの発表準備が円滑に進むよう、指揮をとった。
- ・国立台湾大学や帰国後に行ったプレゼンテーションで自分の担当をやり遂げた。
- ・事前同様に、クラブ活動においてトラブル時の対応において自分の役割を遂行しており、成果へとつながっている。
- ・マレーシアで行ったフィールドワークにおいて、2人で役割分担をして自分に任されたことは最後まで責任を持って成し遂げることができたと思う。最終的に中身のある発表が完成した。
- ・卒業式での劇の発表の準備で、スクリプト、パワーポイントの作成、音源編集などをした。
- ・全員で行う最終プレゼンテーションの題材を提案し、プレゼンは上手くいった。
- ・チームで英語の劇を行い、話し合って決めた自分の役を私はきちんとこなしました。見てくれた人の興味をそそる、わかりやすく面白い劇をつくることができました。
- ・授業での英語の劇やクロージングセレモニーでの発表。
- ・留学先で劇をした際、自分の立ち位置を認識し物事がうまくいくように進行した。
- ・積極的に意見を言い、まとめていった。

- ・なるべく奇抜でユーモアのある意見を出すことを念頭に置き、その上でチーム全体を俯瞰して、全員が参加できるようなディスカッションの流れを作ることには貢献できたから。
- ・私は、多くの人と楽しむのが好きなので、留学中は、様々な人と積極的に関わっていた。特に、みんなと一緒に夕食を食べるのを自分から提案し、実際に楽しく食事できたときは自分から誘って良かったと思った。
- ・留学の際、メンバー内で自分に与えられた役割を十分に果たしたため。
- ・日本の服のブランドの広告を作ったり、日本人にインタビューをしたりなど、自分にあった業務を与えてもらい、しっかりとこなすことができた。
- ・帰りの飛行機のチケットを取り替える際に一緒にいた参加者より英語が得意だったので、スタッフとの交渉をした。無事とりたかったチケットをとることができた。
- ・植生観察において丁寧な写真撮影を心掛け、それを結果に反映することができたと思われる。
- ・今回の植生観察において、私は観察時においては植物の撮影の補助、資料のまとめの時には私は HP の作成に回るといったように自分の役割を作業ごとに明確にしながら、チーム全体への成果へと貢献した。
- ・植物観察中、記録・写真・採集と役割分担をしたため、効率よく作業が進んだ。
- ・チャイティヨー行きのバスのチケットを現地の学生にお願いしたり、ホテルの人に聞いたりして、自らが動いて現地でチケットを取ることができた。
- ・今回の活動において私の役割のひとつは、英語ができない他のメンバーが現地の人々と会話するのをサポートすることであった。私はそれを全てやってあげるのではなく、メンバーが困っている時にのみ手を貸すことで、他のメンバーの成長を阻害しない環境作りに徹した。それにより、みんなが何かしら成長できる研修にすることができたと思う。

【水準 2】

- ・授業のペアワークなどを通して求められている課題を協力してこなした。
- ・移民についてのインタビューにおいて、インタビューの準備をしたり、質問を考えたり、インタビュー相手を探したりした。
- ・課題に取り組む際に積極的に意見発言した。
- ・授業内における発言など。
- ・マップを見て目的地への生き方を探し出した。
- ・グループワークの際、グループとして質問したいことと流れを自分から進んで作り、インタビューの流れを作った。
- ・活動がスムーズに進めるように周りと一緒に努力しました。
- ・クラスの雰囲気作りなど。
- ・私が所属する体育会系フットサル部内においてマネージャーとしての仕事や役割を果たしている。
- ・黙らずに発言しようとしている。
- ・授業において積極的に参加できた。
- ・クラブ活動において、自分の役割を全うしている。
- ・授業やゼミ活動において、グループの中で決めた役割を認識して調べてきたり、発言したり意見をまとめたりしている。
- ・ボランティア活動の際、割り当てられた役割をきちんとこなすとともに、他のメンバーが何か困っているようなら手助けに行く。
- ・現地で積極性を学び、以前に比べ自分から積極的に発言できるようになった。
- ・客観的な意見を自分から言えるようになった。
- ・GCP のグループで出店した学祭の模擬で、準備や運営に取り組んだ。
- ・フィールドワークで相手の意見をなるべく否定せずに質問したり、うなずいたりするのを心掛けたこと。
- ・マレーシアにおいて 5 人で行動したときなど、自分は一歩下がってみんなのサポートをする方が得意だと感じ、なるべくそうするように心掛けた。
- ・原稿の英文を考え、MIDA へのお礼メールを書いた。
- ・授業内のプレゼン内容を考える際、アイデアを積極的に出したり、友達の意見を訳したりした結果スピードが上がっていったこと。
- ・グループワーク時にメンバーから意見を引き出すためにまずは自らが進んで意見をだすようにした。

- ・常に話そう話そうとして、話せないことに焦っていたけれど、3週間自分を見つめて、皆とたくさん関わっているうちにメンバーを見てその輪の中での自分らしい振る舞いをなんとなくだけどわかった。
- ・授業においてグループでプレゼンをするときに他の人とは違った見方の意見を出すように心がけた。
- ・自分は人の意見を受け入れやすいので、その理解に努めている。
- ・同じグループの人と協力してドイツ語を学ぶことができた。
- ・現地でのフィールドワークの計画などで、自分が学びたいことなどをきちんと整理し発言できたと思うから。
- ・自身の気づきを言葉に出す。
- ・ボランティアで与えられた指示をさらに発展させて最後には新しい人に指示も出せるようになった
- ・文化祭で宣伝を任されたので、自分の仕事は確実にこなせるようにした。
- ・部活動内では役割について意識している。
- ・指示された通りにプレゼンテーションをして、評価してもらった。また、PCR や電気泳動の実験をさせてもらうときも、研究員の方の説明をよく聞き行った。
- ・児童福祉施設を訪れる準備をする際、仮面のデザインを提案したり、日本のおもちゃの紹介について考えたりすることで、子ども達に喜んでもらったり日本の文化について知ってもらったりできるように行動した。
- ・教材づくりをする際お互いの意見を踏まえて効率よく作れるように頑張った。
- ・まつりのときに踊るのは自分の役目だと思っていたので、積極的に踊った。レッサムフィリリを暗記して踊るくらいはできただろう。
- ・自分の得意分野を活かすよう努力している。
- ・グループで自由時間があつた際に、それぞれのやりたいことを聞いて次に何をするか話を進める役割を担ったと思う。論点がずれた時に元に戻していたと思う。
- ・1日の旅程のルートなどを提案し、責任を持って実行すること。
- ・レンタルカーで助手席に座ったときに昼どきだったのでホテルに戻るのではなく近くのレストランによるようにいい、値段の交渉などをした。
- ・交通手段、ルート等を自分から探して提案できた。

【チームワーク力】1-2. メンバーと協力し、チームの目標を達成する

●事前学習時

【水準3】

- ・大事な試合を控えた選手たちの士気をあげるための動画も作成し、チームの勝利を導いている。
- ・高校のダンス部活動で大会や舞台前にミーティングを開き、それぞれの意気込みやチーム全体でその大会や舞台に出る目標を再確認しそれを達成できた。
- ・高校の文化祭で実行委員長として委員のみんなと協力し、文化祭を運営した。
- ・高校2年生の時、文化祭で、クラスで作成した映画で重要な役を担当し、クラスメイトも各々が自分のやりたい役を担当して、話し合いもスムーズに進み、その映画は好評であった。

【水準2】

- ・この研修には様々な学部や学年の人がいることを踏まえながら、自分の位置を理解して事前学習でのグループワークなどに取り組んだ。
- ・部活動でチームの目標が達成できる様チーム全体でミーティングをしたり、コミュニケーションをとったりしながら練習をしている。
- ・アイセックでは、イシュー（教育やITや医療といった分野）でチームに分かれて活動しています。私は教育のイシューに取り組むチームで活動していて、チームの中でも、インターンシップのプログラム作成や、チームビルディング、営業活動、インターンシップに来ている海外の学生のサポートなどそれぞれ自分のしたいことに合わせた役割を担っています。お互いにチームの目標達成のため、各役割が協力し、良いインターンシップを作るため活動しています。
- ・他のメンバーと話し合って意見が食い違った場合は、きちんと理由を聞きそのうえで決定をしたりした。

- ・メンバーの意見を聞きながらグループワークに取り組んだ。
- ・最近ではサークルの新歓で目標をみんなでたて、積極的に活動に参加した。
- ・フットサルというチームスポーツで試合に勝つためには各々が意見しながら尊重し合い、一番良い結果になるよう努めなければいけません。
- ・部活の話し合いでも自分の考えを一方的に押すのではなく、他人の考え方も考慮しながらお互い討論を進みあっている。
- ・自分の意見ばかりに目を向けず相手の意見もしっかり聞き、一緒に考える。
- ・アメリカの大学で行うプレゼンにおいてそれぞれが協力して自分の役割を果たせている。
- ・自分たちで1つのトピックを決め、ゼミでグループ発表を行った。
- ・試合前のメンバーの話をよく聞き、試合中得点を決めた時やミスした時などは互いに駆け寄って声をかけるなどしている。
- ・集団内の関係性なども考慮しながら、より円滑に活動できるような意思疎通を重視している。
- ・部活において部員と相談しながら練習し、問題解決をしている。
- ・基礎演習でグループ活動をする際、メンバー全員の意見を尊重しながらグループとしての考えをまとめるように意識して取り組んでいる。
- ・サークルでは、イベントを作り上げる上で、皆で意見を出し合いながら留学生が楽しめるように、いかにうまく進めることができるかを考え取り組んでいる。
- ・所属している合唱部において、指揮者やパートリーダーなど重要な役職を決める際にはメンバーそれぞれの意見を確認し、誰かの考えをないがしろにせず結論を出すよう努めている。
- ・異なる意見がでた時にはその折衷案ができないかを模索するなどして、各メンバーの意見を尊重するように気を付けている。
- ・プレゼンの際にチームメイトの提案に関心を寄せ、新しい知識として取り入れる。
- ・台湾大学での発表に使うスライドのプロトタイプを作り、みんなにスライドの作成及び発表の準備を促した。
- ・専門科目の実験において、実験班の班員と意思疎通をしながら実験を行っている。
- ・トラブル時に、自己判断のみではなくメンバーと相談した上で行動した。
- ・大学のでやっている活動の中で団体の目標を理解して自分に何ができるのか考えて、先輩にその考えをぶつけたり同期と一緒に話したりした。活動に対して積極的に取り組んだ。
- ・留学生とのキャンプを行った時など、実行委員として役割を果たし、他の役割の人をサポートすることで、無事にキャンプを成功させることができた。
- ・サークル活動で、対抗戦の時に応援ボーラーというものがあるが、その時は個人が重要だと思ふことを決め、それを踏まえてチーム内で1つの目標を決めるので、その点ではメンバーの意見を尊重してチームとして取り組んでいると思う。
- ・中学の部活でリーダーになり、だれかを最良にすることなくなるべくみんなの意見を聞こうと心掛けたことが、チームの団結に繋がったと思う。
- ・部活では、チーム全体の向上を常に考えながら行動している。
- ・部員の意見を聞き、チームの修正を行った。
- ・サークルでの演技発表。
- ・サークル活動の試合で、先輩方の体力を復活させるために私たちが走りまわるという目標を無事に達成できました。
- ・協力して答えを出す際、自分の意見を主張するだけでなく、挙がっている意見を分かりやすくしたり、整理したりすることを心掛けている。
- ・授業中でも部活中でも自分の意見を述べ、周りの意見を聞き、より良い方向へつながるように意見を収束させようとしている。
- ・授業でのチーム発表のテーマを決める際、一人一人の意見をまとめ、なるべく全員の意見に合が反映されるテーマを考えた。
- ・全員の意見を把握し、最善の方法を取れるように心がける。
- ・クラブ活動などにおいて、運営にもかかわっているが、ほかのマネージャーとの連携をとって円滑な運営ができるよう取り組んでいる。

- ・サークル活動では、副キャプテンとして、試合に勝つため、チームが強くなるためには、短い時間で効率よく練習する方法などを、チーム全員で考え練習しています。それでも、試合では、上手く勝つことができていないので、まだまだだなと感じています。
- ・上記の通り周りのメンバーとしっかりとコミュニケーションを取っていったから。
- ・部活動において、全体の目標を達成するため、コミュニケーションを重んじ、練習に励んでいる。
- ・高校野球で全員が毎日思ったことを共有して情報に基づいた作戦を立てた。
- ・高校の部活で一時人間関係が悪くなったが何度も話し合って最終的にはとても良い関係で終わった。
- ・高校時代バレーボール部に所属し、チームの状況を見ながら練習メニューを自分たちで考えて目標に向けて練習していた。
- ・サークルで広報の活動をする際、なるべく皆んなの意見を聞いて、自分の意見も言うようにしている。
- ・部活のマネージャーとして、選手とコミュニケーションをとりながら、率先して動くように心がけた。
- ・大道具のリーダーをした際は、技術に長けたメンバーや、忙しいメンバー等、それぞれの背景を捉えた上でより効率的に長所を生かした制作ができるように役割分担を考えた。
- ・夏季休暇に参加したインターンシップで、メンバーとのコミュニケーションを積極的に図った上で、臨機応変に各自で役割を変えながら課題に取り組んだ。
- ・部活で、互いに自分のプレーの意図を発信しフィードバックをし合っている。
- ・高校のとき、討論部に入部して活動を続け、地区大会で2位をとった。
- ・高校時代の陸上部でキャプテン、パート長に従いながら、人手の足りない所、追い付いていないところを補うように心がけて行動した。
- ・SAとして授業の事前準備に取り組む際、周囲の人々との意見交流をするが、時々意見の食い違いから、話し合いが滞ることがある。まだまだ改善の余地があると考える。
- ・小さい頃から部活や友人関係において、学年問わず相談を受けることがよくあり、全体の関係を和らげるような役をしていた。そのため意思疎通をとることを大切にはできていると思う。

●事後学修時

【水準3】

- ・現地学生へのインタビューをチームの皆で役割を分担し、質問内容などを事前に良く練って行うことができた。
- ・移民へのインタビューを共に協力して終わらせた。
- ・他のメンバーと話し合ったフィールドワークはすべて達成した。
- ・与えられた課題をメンバーと一緒に考えながら解いた。
- ・活動の際に、メンバーと協力し一つの作品を作り上げることができた。
- ・海外研修での授業において、メンバーと協力してプレゼンを成功させた。
- ・一緒にプレゼンテーションをする相手と、情報収集の段取りや発表内容の分担をきちんと話し合った上で行動し、プレゼンテーションを無事に終えられた。
- ・語学クラスにおいてクラスメイトと話す際に日本語を禁止していた。そして、きちんと遂行した。
- ・トロントの街を調査し、プレゼンにまとめることができた。
- ・GCP内の活動の企画や、報告書の作成に取り組んだ。
- ・プレゼンテーションにおいてメンバー内で協力できた。国立台湾大学で行ったマシュマロチャレンジでもチーム内で協力し様々な案を出し合った。
- ・GCPにおいて、メンバーと協力することがあり、チーム目標の達成に向かって活動をすることができるようになったように思う。
- ・マレーシアにおいて5人で生活する中でお互いの意見やりたい事を尊重し合うことができたし、フィールドリサーチもお互いの得意分野を任せ合うことで円滑に進められた。
- ・フィールドリサーチでグループのテーマを調査、発表した。
- ・劇の発表などで意見を出し合い上手くまとめた。
- ・メンバーとしっかり話し合い、目標に向かうことができた。
- ・授業での英語の劇やクロージングセレモニーでの発表。

- ・最終プレゼンが短時間しかない中でよいものができた。
- ・最後のプレゼンテーションに向けて何回も練習し、本番大成功した。
- ・みんなが話せるように工夫をした。
- ・グループで行うプレゼンで、配役など含め、メンバーが納得する内容のものをつくることができた。
- ・授業において英語で劇をするときなど、役割分担をきちんと決め、みんなで協力して最高のものを作ることができた。
- ・最後の口頭試験の時に、台湾人と一緒に事前に文章を作って発表しなければならなかった。文章を作っているときは、お互い書きたい内容を理解し合って、最高の文章を書けたと思う。そして、口頭試験まで、一緒に練習し合い、本番ではお互いが満足できた試験となった。
- ・スターバックスのアルバイトでレジとバーの意思疎通によりミスなくそして最高のドリンクを提供している。
- ・サークル活動では自分からも積極的に発言を行い、なすべきことをスムーズにこなせるように案を組み立てて実行できた。
- ・メンバーとしなければならないことを分担し、目標に向けて行動した。
- ・お互いに助け合って意見を出し合い、植物の同定作業を進めることができた。
- ・意思疎通は特に重要視したことだ。植生観察では屋外での活動が中心になるので、行動中はまずメンバーの調子をいつも気にかけた。同定作業についても、各々の作業内容を共有することをしっかり心掛け、結果として共通の目標に向けて三人皆で活動の駒を進めることができた。
- ・4人みんなで話し合い、それぞれの1番したいこと、行きたい所を優先しながら進めることができた。最初よりもかなり仲良くなれたと思う。

【水準2】

- ・下回生、上回生ともコミュニケーションをとりながら日本一を目指して日々練習をしている。
- ・インタビューをみんなで役割分担して行うことができた。
- ・率先して役割分担を行い、活動に取り組む。
- ・周りの人がどういう役回りをしたいのかに配慮している。
- ・周囲と話し合いを通して決め事をしました。
- ・試合の勝利に向けてのサポートを日々行い、また選手やマネージャーとの間での交流を図り活動している。
- ・相手の言うことをきちんと理解しようとしている。
- ・留学先でのボランティア活動、フィールドワーク。
- ・チーム全体の目標のために、メンバーと協力することはよくできる方だと思う。
- ・サークルで、試合中もチームの人とコミュニケーションをはかり、誰がボールをとるのかを判断している。
- ・プレゼンテーションにおいて意見を出し合った。
- ・クラブ活動において、目標に向かい、助け合って頑張っている最中である。
- ・プレゼンテーションではペアに確認をとりながらお互い合意のもと協力して準備をすすめた。友達と出かける際には友達の希望を取り入れながら共に行動した。
- ・相手の考えなどを積極的に伺い、尊重できるようになった。
- ・考えの違う人などの意見も受け入れる。
- ・なかなか思い通りにいかないことが多かったが、なんとか前日に発表を仕上げるということをせずに済んだのは良かったと思う。
- ・グループワーク等で様々な考え方ができることを理解し、それらを複合させてより完成度の高い結論を導くことができた。
- ・グループワークの際にはそれぞれの意見をまず聞いた上で、話を進めるように心がけた。
- ・チーム全員が必ず発言する劇を、意見を出し合って作った。
- ・大勢のでのディスカッションにおいて、会話に参加するばかりでなく、会話から身を引くことによって、ディスカッションのバランスをとった。
- ・チームであることが多く、意見の対立もあつたりしたけれど、すべて最終的には皆が納得する方へ皆で進めた。
- ・グループワークなどでは、自分が中心でやるべき時はやり、サポートすべき時はサポートする。
- ・フィールドワークの内容が似た人と計画的に学ぶことができた。

- ・メンバーとの会話を怠らず、誰がどういった役割に適しているかを話し合えるため。
- ・メンバーの意見もちちゃんと聞くことが出たと感じるから。
- ・チームでの活動が円滑に行えるように気を配った。
- ・自分の意見は主張しつつも、相手の意見もしっかりと聞くことは大切だと思う。
- ・部活で、文化祭の役割を決めて自分が他の人の役職に口出ししすぎず、自分の役職に専念できた。
- ・急な変更で別のプロジェクトの参加者と一緒に活動することにもなったが、お互いの参加者目的や目標を確認したり理解したりするために話し合いを行いながら活動できた。
- ・普段の会話でも日本語で説明することが難しく、うまく伝わらないことが多かったが、だからこそ協力しながら、双方が完全に理解できるまで努力した。
- ・サークル活動において、みんなで協力してダンスをした。
- ・メンバーで協力しながら、小学校での活動の計画を立て、実施することができた。
- ・小学校での活動内容を決めるときや、移動の車内の席の位置を決める際など、メンバーそれぞれの状況を考えて意思疎通し合い、大きな衝突なく2週間を過ごせた。
- ・同定作業中、個人で植物名を絞り込み、全体に共有した。葉の形や手触りの違いなど具体的な理由をあげて意見を言い合ったため、確信を持って同定できた。
- ・メンバーの体調ややり遂げたいことを聴きながら、現地での行動計画を立てることができた。
- ・時に意見がすれ違うこともあったが、それをないがしろにせず、みんなが納得いくまでしっかりと話し合い、結果的にみんながやりたいことや経験したいことを満遍なくすることができる研修となった。
- ・1日のスケジュールなどを相談することで、効率よくフィールドワークを行えた。

表2 自己評価結果（自己修正力）

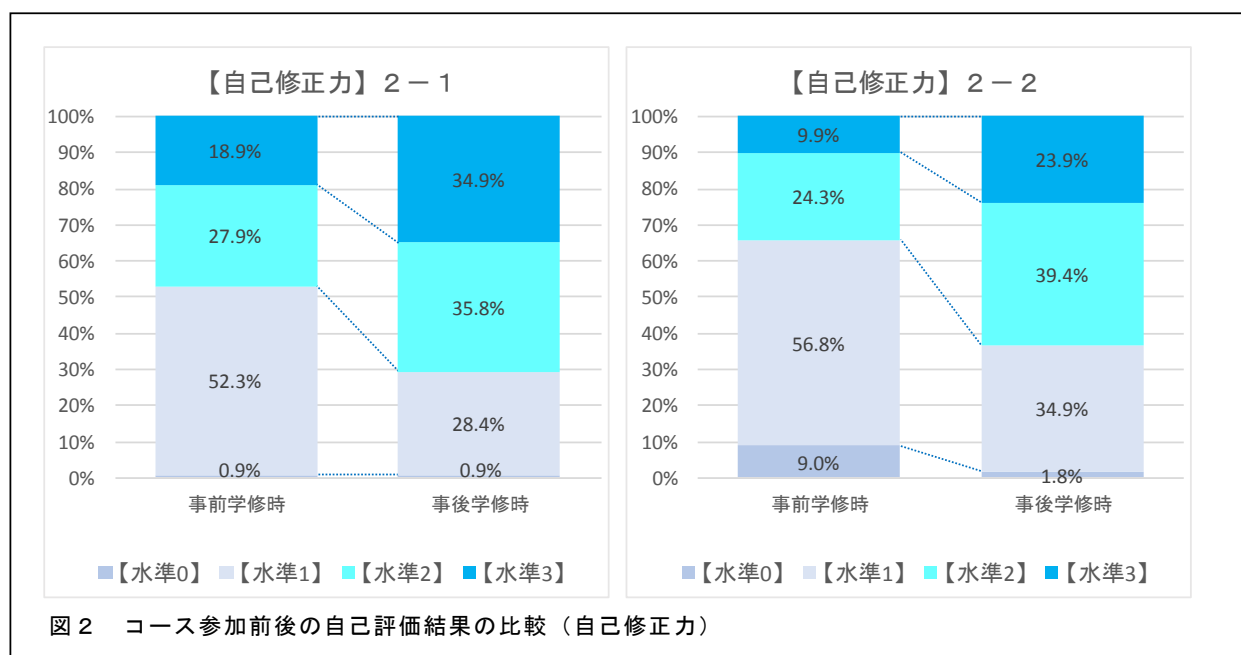
【自己修正力】

2-1. 自己を認識し、他者への理解を通して、自分の考えや行動を見直すことができる

		事前学修 (人)	事前学修時	事後学修 (人)	事後学修時
【水準3】	自分以外の人の考えや行動を参考にして、自分の考えや行動を見直している。	21	18.9%	38	34.9%
【水準2】	自分以外の人の考えや行動を理解し、自分の見直すべきことについて理解している。	31	27.9%	39	35.8%
【水準1】	自分の考えや行動について認識している。	58	52.3%	31	28.4%
【水準0】	水準1に達していない。	1	0.9%	1	0.9%

2-2. 得意分野を伸ばし、苦手分野を克服する

		事前学修 (人)	事前学修時	事後学修 (人)	事後学修時
【水準3】	自分の得意分野を伸ばすため、苦手分野を克服するための実践を行っている。	11	9.9%	26	23.9%
【水準2】	自分の得意分野を伸ばす方法、苦手分野を克服する方法を模索している。	27	24.3%	43	39.4%
【水準1】	自分の得意分野や苦手分野について理解している。	63	56.8%	38	34.9%
【水準0】	水準1に達していない。	10	9.0%	2	1.8%



—水準選択における具体的な説明（水準2・水準3）—

【自己修正力】2-1. 自己を認識し、他者への理解を通して、自分の考えや行動を見直すことができる

●事前学修時

【水準3】

- ・何が学びたいのかが明確になっている周りの学生の姿勢を発表から感じ、改めて自分がこの研修を通じて一番何が得たいと思ったのかをもう一度見直した。
- ・周りの人に「自分はこう考えるけど、〇〇はどう思う？」など相手の意見を積極的に聞いている。
- ・クラブ活動において意見が食い違った場合、相手の考えを聞き、自分の意見も言ったうえで間違えているところは見直した。
- ・特に見ていてひどい、不快と感じる言動は自分も同じことをしてはならないと強く意識している。

- ・自分の考えをはっきり言えるような人間にならなければならないと思っている。
- ・試験やサークル活動で上手くいかない時には、先輩や友達からアドバイスをもらいながら自分のできなかったこと、悪かったことを修正するようにする。
- ・先輩や友達からのアドバイスを聞いた上で、それまでの自分を振り返って、今回はできていない点を意識しながら取り組む。
- ・GCP 事前学習において、先輩の体験や他の人のフィールドワークの計画を聞き、自分の計画について見直し修正した。
- ・友達と意見交換を行うことで自分にはない観点到に気づき、理解し、自分の悪いところにおいては反省し、改善するように心掛けている。
- ・ESS には素晴らしい才能を持った人やリーダーシップにあふれた人がいるので、そのような人の行動を見て参考にすると同時に自分の行動を見直すようにしている。
- ・積極的に質疑応答する仲間を見て、自分も活発に質問することを心掛けた。
- ・迷惑な行為をしている人を見かけたときには自分は同じようなことをしてはいないだろうかと思問する。
- ・農家さんや留学生との交流、経済学部生とのゼミ活動を通じて、立場の違いから生まれる考えの違いを理解し、人それぞれ考えが違うことを実感できた。
- ・部活では、後輩にばかり負担がかからないように注意して、役割を分担している。
- ・人の良いところは積極的にまねるようにしている。
- ・いろんな先輩に1 回生のときにしておいたほうがよかったことなどを聞き、それが今の自分にできているかを確認し、できていない部分は実行しようと計画した。
- ・オーストラリアのホームステイで気を遣わずに自分の思ったことを言おうと言われてその通りだと思って実践した。
- ・体が硬かったが、部活の先輩が毎日ストレッチをしているというのを聞き、自分も毎日するようになった。
- ・元々理論的に考えることが好きだが、感情もくんだ動機付けが必要だと分かったり、感情的に突き進む人も多くて、論理だけではダメだと判断したりして、できるだけ論理ガチガチにならないように考えている。

【水準 2】

- ・毎日日記をつけて振り返りをしたり、自己認知のサイトなどを使って自分の強み弱みを探したりしています。他の人から自分の改善点などの指摘をもらうこともあります。
- ・周りの人がどのような行動をしているのか常に観察するようにしている。
- ・いろんな人の考え方に耳を傾けたい。自分との違いを見つけていつも刺激される。
- ・主観的な視点だけでなく客観的な視点をもって考えるようにしている。
- ・他の人の良いところをまねるよう努力している。
- ・他人の尊敬できることを意識的に実践している。
- ・発言が積極的なチームメイトを見習い、自分の消極的な発言を見直すべきだと考えている。
- ・属した社会における自分の立ち位置、能力を改めて認識し異文化の考えも素直に吸収できた。
- ・自分以外の人の考えなどに否定的になってしまいがちなことを見直すべきだと理解している。
- ・他人の考えと自分の考えで違う部分があったとき、その違いがどのようにして起こったのか考え、自分の見直す点を見つける手掛かりとした。
- ・寮生活で人間関係などに困難が生じた時、対話会を開いてそれぞれの行動を見つめ直し再出発できた。
- ・他人から指摘や新たな考えを提示されたときには、自分の考えも含めて考え直し、よりよい選択ができるように心がけている。
- ・自分の反省点を見つけ、それを改善するために考えている。
- ・頭で色々考えるより、実際に行動することが自分に足りない部分だと感じている。
- ・人の行動を気にし、いいところは取り入れようとしている。
- ・他の人の考えや行動を見て、見直すべきところは頭では分かっているのだが、それを実際にできるかというできていない。同じミスをしてしまうことがある。
- ・仲間が行なっていることを観察し、自己のいたらない部分を認識している。
- ・私はせっかちで、感じたことをすぐ表現してしまう。しかし周りの友達は理性があり、きちんと言葉を選んで表現しているので自分も見直さなければならないと思っている。
- ・人からの忠言を、ないがしろにせず改善策を考える。
- ・部活でもめたとき、話し合いをすることで自分のよくないところを再認識し、他人を気遣えるようになった。
- ・哲学のグループ発表で他者と自分の意見を議論することができた。
- ・他人とコミュニケーションを取っていく中で、相手が嫌がりそうなことを感じ取り、自分の発言に気をつけることができる。
- ・現在所属しているサークルでお年寄りの方や障害のある方など様々な方々と接して、自分の他者への接し方について考え直した。
- ・父の高校時代の参考書を見てマーカーの引き方を学習したり、生活習慣について書かれた本を読んだりして自らの生活を改善しようとした。
- ・優柔不断なので、サークルのミーティングなどでも意見を求められる際はなるべく早く自分の意見を言うように心がけた。

- ・友人と普段接する際などに、相手の考えやどうしてその行動になるのかをよく尋ねて理解するようにしている。自分で理解しにくい場合は、一旦相手の立場に立って考えるようにしている。
- ・人のふり見て我がふり直すことの大切さは理解していると自負している。しかし、時に自分の主張を突き通そうとしてしまうことがある。客観的に自らを俯瞰して取るべき最善の行動を見極める力をつけるべきである。
- ・自分の意見が間違っている可能性があるのも、他人の意見も参考にする。
- ・他人の目をかなり気にしてしまうので、相手が嫌だと少しでも思っていたら正す。しかし、自分の意見を曲げてしまいがちだ。

●事後学修時

【水準3】

- ・最初は自分からフィールドワークに出ることに消極的だったが、他の日本人学生の姿勢を見て例え一人でも自分の興味関心のある場所に出ようと努力することができた。
- ・周りが言ってくれる自分の短所、長所を元に自分の日頃の行動、発言を見直している。
- ・ホストマザーが移民だったが、移民を受け入れる危険性などを本人から聞いて考え直したりした。
- ・特にホームステイで一緒だったメンバーとの交流、生活において。
- ・自分が行いたいことと他人が行いことは異なるのが当たり前なので、それをどのようにしてお互い納得のいける形に持っていくかを心がけました。
- ・他者を見て行動力がないと感じたので、後半からは能動的に参加しようとした。
- ・留学先で出会った同じクラスの生徒の影響で自分の学生生活を見直そうと感じた。
- ・先輩や先生のアドバイスや意見を聞き、それによって自分の行動を考え直している。
- ・ボランティアや授業に取り組む姿勢などを見てとても触発され、自ら発言しようと努力したり、自発的な行動をとろうとしたり心がけた。また、ホームステイをするにあたって、ホストマザーの行動を観察し、自分の行動をカナダスタイルに合わせるよう努力した。
- ・トロントで複数の目的地に行く際、交通手段や訪れる順番などの計画が自分のものより別の友人のものの方が効率的だと感じた際には、互いの行きたい場所を尊重しつつ予定を組み替えた。
- ・あらゆる国の人の考え方や文化を知り、新しいものとして自分の中にも取り込んでいった。
- ・他者の意見をしっかり聞くことで自分の意見と比較している。
- ・イスラム文化の中で生活することで、異文化を理解することができた。
- ・GCP の活動内で何度も行われたディスカッションに(例. グローバルとは何か、など)において、他の人と考えていることが違うときに、自分の考えを見つめ直した。
- ・理解するだけでなく、考えを見直して行動に移すことが前よりできるようになったと考える。
- ・マレーシアで1ヶ月間いろいろな人と出会い、暮らしたことで、自分と他者との考え方や行動の違いがよりわかるようになり、良い点を取り入れようと努力するようになった。
- ・語学学校で友達と比べて積極的に話しかけることができていないと気づき、後半は意識して少し改善することができた。
- ・一緒に参加したメンバーやUPLBの学生には、同年代でありながらしっかりと意見を持ち、知識が豊かであることに非常に刺激を受けました。
- ・他人の発表を参考にして、次の発表ができた。
- ・積極的に英語を使う、失敗をおそれない、わからない部分があれば質問する、といった友人の姿をみて自身もそれに努力した。
- ・他人のユニークでユーモアのある言動は、なるべく吸収するようにしている。
- ・自分の考えを信じることも大切だけど、周りの人たちの気持ちをくんだりすることの重要性を感じている。
- ・留学メンバーと過ごし、積極性や協調性など自分に不足している要素を見つけ改善しようと努力したため。
- ・今回、始めは相手の考えや文化を受けていただけだったが、その姿勢から自己主張していく意識を掴んだ。
- ・実際に現地の人と話しをすることで、様々な意見を自分の中に取り入れることができたと感じるから
- ・海外の人は言うべきことをしっかり口に出していて私もそれを見習って積極的に発言し自分の気持ちを押し殺さないようにした。
- ・現地の日本人研究者の先生に、「何事も早め早めに気づいて行動していくことが大事」と言われ、試験勉強や、部活の試合においても、余裕をもって準備している。

- ・ベトナムで出会った人々のフレンドリーな点、礼儀正しい点が印象的であったので、自分も周囲に気を配ったり、外出先で出会った初対面の人との会話を楽しんだりした。
- ・社員の方が積極的に日本語の語句を覚えようとしているのを見て、自分もベトナム語の学習に励んだ。
- ・積極的にコミュニケーションをとり、活動に参加しようとするメンバーの姿を見て、自分もそのように活動していこうと努めることができた。
- ・色んな人の話を聞き、将来を考えた。
- ・現地の人の考え方と自国の一般的な考え方を比較した。
- ・メンバーが積極的に現地の方とコミュニケーションを取るのを見習って、自分も話しかけるようになった。
- ・自分自身の評価とする。今回は長い期間他者と行動を共にしたので、他者からどう見られているかを特に意識しつつ学んだことが数多くあった。やはり他人とこんなに長時間行動を共にしたことがなかったので、お土産の買い方や好きなお店、食べ物や生活リズム、人と人の交流の考え方で自分とは違う感覚であることをたくさん認識した。それと同時に他者への理解そして、自分が皆のようにより良い行動を示すためにはどうしたら良いのか、ということを常に考えるようになり、今回は自分ひとりだけでは改善できなかったことに数多く見直すことができたと思う。
- ・現地の学生と交流する際に、自分がいつも話す日本語は話し言葉で、母語としない人には伝わりにくかった。ので、書き言葉で、話すことを心がけた。
- ・ミャンマーの人々と接する中で、自分がいかに日本的バイアスに囚われているかがわかった。宗教観念、礼儀作法、一般常識、当たり前前に感じていたこと全てが、当たり前でない環境があり得るということを実感した。そして、ミャンマーの人々と共に生活していく中で、よりオープンな、より積極的な態度をとるように意識を変えた。そうすることで、ミャンマーでの取り組みがより円滑になったように感じた。
- ・他の人の意見を参考にすることで、フィールドワークのやり方に修正を加えた。
- ・プログラム中1番一緒にいた学部の先輩と話すことで、授業、将来、今のことを話せた。2年次から何をすべきかわかった。

【水準2】

- ・人に聞くや、発言するや、何かの行動につけ、あと一步のところまでとどまってしまうことが多いところが自分のなかで直したいところ。
- ・他人の意思を尊重しながらグループ活動で自分がやるべきことを見出した。
- ・部活動では、常に周りと話して自分のしたいプレーと周りがしたいプレーの調整を行っている。
- ・他者の行動を観察することで、自分はどのような行動をとればよいのか考えることができた。
- ・語学学校で他国からのクラスメイトの意欲を見て、消極的な自分を積極的に変えようと努力した。
- ・人の行動を見て自分に生かす。
- ・自分と違う考え方や価値観を理解し、そういう考え方もあるということをお理解し自分を見つめ直すように意識している。
- ・研修中に多様な文化や考えを見聞きし、これまでの自分の考えや価値観を見直している。
- ・友達が積極的に外国人の人と関わっているのを見て、自分も積極的に話しかけるようにした。
- ・積極的に英語で話したり、研究室の方に的確な質問したりするなど、周りの人の積極的な姿勢を見て、自分の行動を改めようと思った。
- ・理解していても、改善するために行動をまだ起こせていない。
- ・自らの知識や技能の不足によってコミュニケーションが成立しないことを防ぐために教養や知識を身につけることが必要だと考える。
- ・マレーシアに行くメンバーは自分と違う性格の人もいて冒険家タイプの人や、リーダータイプの人に多くを学んだこと。
- ・フィールドリサーチで話し合いを重ねる中で疑問に思わず見落としとしていた点や新たな考えなどに気づくことができた。英語学校でも周りに刺激をもらって自分の受講態度を改めることができた。
- ・自分の言い方にトゲがあることに気づき直した。
- ・人と違う考えを持った時には人の考えも聞き自分の考えと照らし合わせるようにしている。
- ・友人が留学中に自分の改善すべき点について考えているのを見て、自分ももっと英語を積極的に使おうと思わされました。
- ・先々のことを考えずに意見を述べてしまうところを直すべきだと考えている。

- ・自分のリスニング能力の低さを知ることができた。
- ・喋ったあとに、夜とかになって自分が言ってしまったことを反省したりすることがある。
- ・自身の中で反省すべきことは整理できている
- ・他人からしかわからない私自身は必ずあるので、そういった指摘は素直に受け入れ、取り入れるべき。
- ・活動中に海外の人たちがしっかりと自分の意見を言っているのを見て、自分が自分の考えをしっかりと持っていないことに気づき直そうと思った。
- ・部活動内では、他人の意見を理解し事故を振り返るようにしている。
- ・他人の意見は尊重するようにしている。
- ・クリシュナさんや村で晩御飯ごちそうになった家でネパールの教育について話すことができた。もっといろいろな人の話も聞けば良かった。
- ・ネパールの生活は日本のものとは全く違うもので、クリシュナさんとネパールや日本の話をした際に、日本で当たり前だと思って受け入れていたことは、実は間違っているのかもしれないと感じた。人生観など、狭い周りの意見にとらわれず、もっと色々な人に聞いてみたいと思った。
- ・同コース参加者が、自身の専門分野を絡めながら質問をしているのを見て、浮かんだ疑問の答えを推測して終わりにせず質問する積極性と専門性を身につけようと思った。
- ・些細な意見の不一致があったときに、私がマイノリティで意見して合意を撮ろうと思ったけれども、実行できなかった。
- ・東南アジア諸国での働き方や社会の状況を理解し、今まで日本にいる東南アジアの人にあまり良い印象を持っていなかったが、積極的に応援しようと思う。

【自己修正力】2-2. 得意分野を伸ばし、苦手分野を克服する

●事前学修時

【水準3】

- ・部活動では、走るスピードや反応、声の大きさを活かす為 OF だけでなく DF でも通用するキャッチ力を高める練習をしている。
- ・外国語試験に向けて、自分が得点を取れない分野を中心に参考書などを見ながら勉強している。
- ・プログラムを俯瞰し、滞りなく進めるようにみんなの為に行動するとともに、発表や質問に積極的に挑戦する。
- ・人前で発言をするのが苦手であるので積極的に発言をするよう試みている。
- ・苦手なことがあっても諦めずに挑戦している。得意なことは楽しんでより伸ばしている。
- ・英語が割と得意だったため、もっと能力を伸ばしたいと思ってこのコースに参加した。
- ・自分の得意分野は考えをはっきり伝えることなのだが、高校1年生ぐらいまでは、自分の主張だけを伝えたくて、他の人の話を聞かなかったのが苦手分野（自分の短所）だったが、高校2年生から、他の人の話をきちんと聞くように意識するようになった。
- ・面倒がるのをやめるため、進んで雑務を行うようにしている。
- ・高校時代、得意だった英語はそのまま頑張り、苦手だった数学は本番で目標を達成できた。
- ・高校生の時、得意な音楽はピアノと声楽を習い理解を深め、苦手な体育は基礎トレーニングから始め、ある程度克服した。
- ・高校時代に国語が苦手だったが、得意な友達にオススメの参考書や問題集、考え方などを聞き、参考にした。

【水準2】

- ・コミュニケーションが得意とはいえないのでどうすれば改善できるのかを考えている。
- ・強み弱みは理解したい把握していると思っていて、私は自分なりの価値観に基づいて意見構築しそれを発信できないという改善ポイントがありましたが、最近はその克服しようとしています。
- ・苦手分野である、英語のスピーキング、リスニングを克服するための方法を模索している。
- ・リスニング力をあげるための方法を模索している。

- ・理解も模索もしているが、実践まではしていない。今回のプログラムでもこの点における今後の気づきや直接行動へと踏み出すような経験をしてみたいと思う。
- ・なぜ苦手なのかを理解する。
- ・集団内での調和を保つ一方で、自己主張が苦手なので、それを克服する方法を模索している。
- ・英語について、自分の苦手なスピーキングの分野を向上する方法を試している。
- ・苦手な分野は他人に協力を要請しながら行った。
- ・課題を解決するために、とりあえず思いついたら行動を取ろうとしている。
- ・苦手分野を伸ばすために、自分にはできないことができる友人を観察したり、恥を捨てて直接相談したりすることが多い。
- ・ダンス部で定期的にジャンル分けのオーディションを行い、得意、不得意を他人の目から評価を受けることで認識して修正していった。
- ・自分の治すべき点については理解していふが、まだ治せずにいる点も多くある。
- ・生物の授業が高校の時に学んでいないため、苦手ですがその分勉強時間を多めにとっています。
- ・他の人にどうすれば苦手が国保区できるようになるのか相談する。
- ・社会関係の授業(ESD など)で、総合的な思考や、批評能力の強化を模索している一方、アイデアを魅力的に思わせる説得力の強化のために GSP、ESD やサークルでの活動で発案能力を吸収しようとはしているつもり。
- ・人付き合いが苦手だが克服するためにいろんな方法を試している最中である。
- ・人と話すのが得意なので、初めて話す人と出会ったときは積極的に話すようにしている。
- ・得意だった世界史を伸ばし、苦手だった数学も克服して好きになった。
- ・高校時代得意だった英語を伸ばすため、グローバルリーダーズキャンパスに参加し英語で読んだり、意見を言ったりした。初対面の人と上手く接するのが苦手だったので、地域の人と交流できるサークルに所属している。
- ・大学受験では自分の成績を常に分析しながら計画的に勉強するようにしていた。
- ・TOEFL の勉強に際し、得意なリーディングばかりに重きを置いて、苦手なリスニングの練習には積極的になれなかった。方法は考えてもすぐさま行動に移せない自分を変えるべきだと思う。
- ・自分の苦手分野を克服する意志はあるが、どのように対策すれば良いかを検討していくつもりである。

●事後学修時

【水準 3】

- ・苦手分野を克服するために、苦手なことから目を背けず、とことんやり続けている。
- ・芸術に関しての知識を増やそう、語学力を伸ばそうという心がけができたと思う。
- ・語学試験に向けた学習。
- ・英語能力に関して、スピーキング能力はあるが文法が弱いので、基本的な文法を意識して英語を使うようにしている。
- ・英語を使って初対面の人に話しかけるよう努力し、また成功した場面もあった。
- ・英語学習において、読解力を伸ばすためにより長く内容が深い本を読んでいる。苦手分野のスピーキングを克服する方法としては、録音機能や CD を用いて練習している。
- ・現地では自分の苦手分野が露わになったが、悔しい思いで、克服しようと努力するようになった。
- ・リーダーとして積極的にグループを引っ張って行った。
- ・時間をかけることと、効率化の 2 点で自己分析している。
- ・自分から話題を作るのが苦手だが、日本語・英語で積極的に話しかけ、会話をした。
- ・英語力の不足を解消するために英語力の向上に努めている。
- ・英語のリスニングが苦手なので、積極的に英語で話すようにした。
- ・興味のあることに重点をおき、学習を進めた。
- ・苦手な発音をファシリテーターに聞いて録音した
- ・英語の発音を学ぶとき、ネイティブの人の発音や口の動きを動画にとって、自分一人のときでも練習をした。

- ・私の得意分野は人とコミュニケーションをとること。留学を通して、より積極的にいろんな人とコミュニケーションがとれるようになったと実感した。また、自分はよく、自分の意見を通したがりがちで、相手のことを考えない時があったので、そこを留学中に意識して見つめ直したかった。実際に、自分の意見を言いたくても、一旦相手の意見を聞き、それを踏まえた上で、自分の意見を伝えられるようになったと思う。
- ・留学中、苦手な発音の練習を怠らなかったため。
- ・英語に関して苦手なリスニングやスピーキングは、外国人の人とコミュニケーションをとったり、洋画を英語字幕で見たりするようにしている。
- ・部活で、うまく歌えないところは先輩に見てもらうようにしている。
- ・もともと英語が得意だったが、現地の研究員と英語で質疑応答などを行うことで、英語のコミュニケーション能力が飛躍的に向上した。
- ・人の話を聞いたり質問したりすることが好き(得意?)なので、自分から質問したり個人的に施設に訪問するなど自主的に行動できた。初対面の人と打ち解けることが苦手だったが、行く先々で出会ったたくさんの人と会話をして少しは克服に近づけたように感じている。
- ・自分自身の評価とする。私は苦手なものと得意なものがはっきりしている。苦手なものは、私は克服という形ではなく、回避という形をとった。というのも私の苦手分野はおそらく他人から想像もつかないレベルで困難なものなので、無理をしない方が私も周りも安全だからである。結果として、自分の得意分野、例えば地図を読むことや周りへの気配りそして写真の撮影など、をどんどん伸ばすことができたので、大変満足である。
- ・コミュニケーション能力の高さを生かして交渉を行うため、タイ語を少しずつ覚えた。
- ・私の得意分野は物怖じせずに積極的に発言できることであつた。しかし、ミャンマーの優秀な学生さん達と交流する中で、ここで満足せずに、もうワンステップ上を常に目指さねばならないと強く思った。そこで今はより説得力のある意見を言えるような努力をしている。また、私の苦手分野は英語のスペリングであつたが、今、ミャンマーで出会った人達と SNS 上でのチャットを続けることで、その改善に取り組んでいる。

【水準 2】

- ・今回の研修で自分は語学能力よりもまず根本的なコミュニケーション能力の向上が必要だと分かったのでそれを克服する方法を模索している。
- ・自分が興味のある分野にもっと関わっていく方法を考えながら、その方法を取る上でやらざるをえない苦手なことを克服する方法を模索している。
- ・苦手分野であるリスニング、スピーキングに関しては積極的に機会を見つけていった。
- ・できるだけ多くの人とコミュニケーションをとろうとしている。
- ・得意分野は継続し改善点を見つけること、苦手分野はとにかく何度も行い、苦手意識をまずなくすことが重要であると考え。
- ・意見をいうのは得意だが、自分と異なる考えを理解することが苦手であるため、周りに聞くなどして、自分を見つめ直している。
- ・今回のプログラムを通じて得意なリスニングを更に向上させられたと感じる一方で、スピーキングがまだまだ不足している。原因は語彙力の少なさだと考えている。
- ・英語でのスピーキングが苦手だったが、意識して英語を使うようにした。
- ・帰国後、自分自身のことをよく考えるようになった。
- ・得意分野(他人の感情把握) 苦手分野(他人の意見把握)である。
- ・自分の得意分野は人をまとめることなので、スライド作成では自分の力を発揮できた。積極性という面では克服に挑んだが、周りの積極性に圧倒され、自分の苦手分野の克服には繋がらなかったように思える。
- ・自分が得意なことや苦手なことを見つけることができ、今の自分にどのような勉強が必要か考えられるようになったと感じる。
- ・研修で英語の伝える力、自分の性格の欠点に気づいてもっと弱点を克服するために何をしたいのか考えていること。
- ・マレーシアに行って、キューピー・マレーシアの見学や、有機野菜に関するフィールドリサーチを行なったことで、自分の食に対する関心を再確認でき、それを伸ばす方法を考えている。

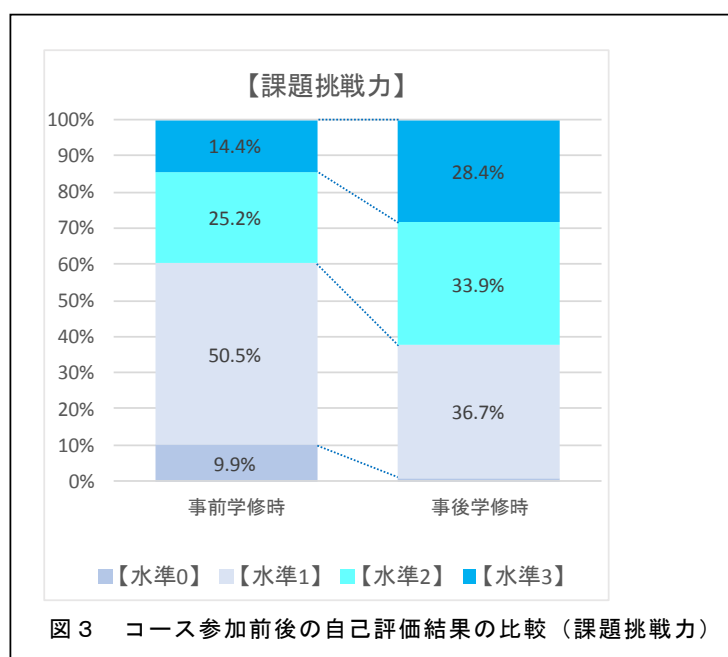
- ・英語に関してクラスの生徒達と授業を受けて自分の得意分野と苦手分野を理解することはできた。帰国してからは専門分野で手一杯になってしまっており、中々手をつけられずにいる。
- ・英語リスニング力を向上させるためにクラス担任やルームメイトに意見を求めた。まだ実行できてないものもあるが、今は自分に合った英語リスニングのウェブサイトを探している。
- ・語学を使うことを積極的に取り組みクラスでの発言、インタビューに臨むのはどちらかといえば得意で、計画を立てたり下準備したりすることが苦手。
- ・英語が苦手なので大学の UPLB コースに参加して少しでも苦手意識を軽減しようと思いました。
- ・英語を積極的に話すことは達成できたのでスムーズな会話を練習したい。
- ・ELS でリスニング力を高めていこうと思う。
- ・英語の発音の練習に至っても、練習の積み重ねが大事なことがわかった。
- ・まだまだ英語を自分から話することができていないため、アルバイトなどで、英語を使う場を探している。
- ・英語の発音について、向上できるよう努力した。
- ・留学先の人になるべく話すように心がけた。
- ・積極的に外国語を使って会話しようとした。
- ・語学的な部分の修正や向上の方法の模索。
- ・先生に相談などをもち掛けている。
- ・量子化学が苦手だったが、NTU では復習に力を入れた。
- ・私は初対面の人とすぐに仲良くなるのが苦手であるが、今回出会う人は初対面の方ばかりであったのでそのような人ともコミュニケーションを取る機会がたくさんあり、少しは改善されたかと思う。
- ・優柔不断なので、あまり悩まないようにしている。
- ・語学力など、自分に足りない様々な課題を見つけることが出来たが、克服のための実践がまだできていない。
- ・自分は他の科目よりは英語が得意だと思っていたけれど、香港の人の英語は速くて全然わからなかったもので、ネイティブとも意思疎通できるようもっとスキルアップしたいと感じた。また、英語はただの1つの言語にすぎないとわかったので、英語だけでなく他の色々な言語にも挑戦したいと思った。
- ・何かに取り組んだ後のリフレクションで苦手分野、得意分野を模索する。
- ・自分が得意とする、周囲の人に気負わず話しかけるといふのには、語学力が必要だと感じている。また、自分が苦手とするフットワークの軽さには、体力が必要だと感じている。
- ・自分の伝えたいことが相手に伝えられない。グループで活動するときに、違うことがやりたいと思っても、相手がそれをやりたいと言っていたら、伝えようと思ってもなかなか自分の意見を伝えられなかった。
- ・英語によるコミュニケーションが得意ではないので、それをこれから改善できるようにしたい。
- ・日本語で現地の学生と話す際、話を膨らませたり、盛り上げたりすることがあまりできなかった。初対面の人と話すことは苦手ではないが、もっと仲良くなるための会話をできるようにになりたいと思った。

表3 自己評価結果（課題挑戦力）

【課題挑戦力】

3-1. 課題を見つけ、解決をはかる

		事前学修 (人)	事前学修時	事後学修 (人)	事後学修時
【水準3】	見つけた課題の解決に向けて取り組んでいる。	16	14.4%	31	28.4%
【水準2】	見つけた課題を解決する方法を模索している。	28	25.2%	37	33.9%
【水準1】	解決すべき課題を見つけることができる。	56	50.5%	40	36.7%
【水準0】	水準1に達していない。	11	9.9%	1	0.9%



—水準選択における具体的な説明（水準2・水準3）—

【課題挑戦力】3-1. 課題を見つけ、解決をはかる

●事前学修時

【水準3】

- ・2-2 で書いた様に苦手分野を今の課題と捉え練習している。
- ・アイセックにおいて、インターンシップ運営の体制に対して問題意識を持っていて、今その改善をはかるため、まず問題意識を人に話したり、自分のチーム内だけでも良い方向へと変えていく行動を取ったりしている。
- ・一度した失敗の解決策はその良し悪しにかかわらず挑戦してみる。
- ・先輩の代から受け継いだものをそのまま後輩につなぐのではなく、少しでも分かりやすくしたり効率良くしたりと改善をはかっている。
- ・疑問についての資料を調べ、自分なりの答えを見出すために取り組んでいる。
- ・2と重複するが、疑問が生じたときに積極的に質問等するよう心掛けている。
- ・ダンス部での自主練習動画を共有して、互いに指摘し合い苦手を徹底的に修正した。
- ・部活で、治すべき点をよく観察し修正に努めている。
- ・英語のコミュニケーション分野が弱いなど感じてこのコースに参加した。

- ・マスターズ甲子園というボランティア活動では、どうすれば多くの選手たちを上手く誘導すればよいか、どうすれば開会式や閉会式をきちんと運営できるかなどの課題を考えて、うまくいかなかったこともたくさんあったけど、成功できたときは達成感があった。
- ・その課題を解決するためには、何をすべきかを真っ先に考えて実行している。
- ・アイエルツのテストが悪くてその原因を分析してその解決に向けて取り組んでいる。
- ・課題研究を行ったグループで、自分たちの研究の問題点や実験の不備を見つけ、修正した。
- ・合唱で発声にくせがあると気付いたので、先輩の声の出し方を見て研究し、くせを克服できた。
- ・現在の部活で見つけた課題はすぐにメモを取り次回までに解決するよう心掛けている。
- ・数学オリンピックに一回目失敗した時、自分は練習量が足りていないと気づき、解く量を増やした。

【水準2】

- ・興味のある分野が分かっているとはいえそこから今後どう繋げていくのかはまだはっきりしていないので、どうすれば良いのかを考えている。
- ・英語の会話力を上げる方法を模索している。
- ・ゼミの活動で挙げられた課題に対してどうすれば良いのか探している。
- ・生活している中で発生する問題の解決策を常に考えるよう意識している。
- ・人の意見に流されやすい面があるので、自分の意見と他者の意見とを明確に区別しながら考えを深められるよう意識しているが、もっとよい方法がないか探している。
- ・トロントの多文化社会を実現させるまちづくりにおいて、具体的にどういうところが工夫されているかを探るために行動計画を立てている。
- ・今回マレーシアの事前学習をした中で、農業に関して解決すべき課題を見つけることができた。その解決する方法も自分なりに考えたが、取り組みまでは行っていない。
- ・他者の成功例を見て今の自分達との違いを探す。
- ・サークルの活動で改善点を見つけたらそれに対する解決策を考える。
- ・自分の予定管理能力の低さに気づき、大学の先輩や社会人の方にスケジュールの上手な組み方を聞いたり、本を読んだりして勉強している。
- ・農業に携わる人の減少をどう考えるか模索している。
- ・クラブ活動で、自分が苦手な分野において自分よりうまい人のプレーと自分とを比較して、どうすれば上達するのかを考えている。
- ・専門の勉強において自分の苦手な論を筋立てて述べる方法を模索している。
- ・音楽文化を広める活動のために、他国の音楽を学んだり調査したり、どう生かせるかを模索している。
- ・誰かに相談するなどして、最善な方法を探す。
- ・年齢や背景の異なる大勢の人の中に入って、円滑にコミュニケーションをとったり、リーダーシップをとったり、積極的に意見していくことが課題である。今回の GCP やサークルでの活動を通して解決していきたい。
- ・解決すべき自分の欠点は分かっているが、改善のために行動することができていない。
- ・食料問題に、興味を持ったので、食料廃棄問題の解決にアプローチしているサークルに入ったり、グローバルチャレンジプログラムに応募したりして、自分にできることは何かを模索している。
- ・過去問や、講義内で示された重要点を参考に自分でまとめている。
- ・Hilt Prize というビジコンに出ているのでその例を用いる。移民などお金を持っていない人がビジネスでできない。なぜならお金がベースになっているから。お金以外で価値評価するため、ポイントで仕事を評価しようとしている。
- ・課題解決に対して重い腰が上がらない時もある。得意不得意にかかわらず、何事にも好奇心を持ってチャレンジする意識をもっと伸ばしたいと思う。
- ・語学が得意でなく日頃から練習するように心がけているがそれをなかなか生活で定着させていない。
- ・人に頼ってしまいがちで、こうしたいと思っても周りにどう思うかと聞いてからしか行動できない。

●事後学修時

【水準3】

- ・アメリカの学生と比べて自分の社会や政治に対する意思表示が不足していることが分かったので今は積極的に文献やニュースなどを見て情報を得られるようにしている。
- ・英語力の向上。
- ・課題の解決方法を仲間とともに考え、個人で行わなければならないことは自分に合った方法で解決しようとしています。
- ・課題のゴールを見つけてそのゴールにたどり着くには何をすれば良いかを逆算する。
- ・英語能力以前に積極性に欠けるという課題を発見し、授業や街中で積極的に質問したりコミュニケーションをはかろうとしたりと努力した。
- ・課題を解決するために、取り組み方を変えてみたり、他の人と話し合ったりする。
- ・その場その場での課題を見つけて、解決法を模索し、時には解決法を提案したり取り組んだりする。
- ・クラブ活動において、問題が発生するとミーティングを開くなどをして、早急に解決するよう心がけている。
- ・今回の渡航で自分の課題が明らかとなり、日本で引き続きしの解決に取り組んでいる。
- ・第3Qから英会話学校に通うなど、台湾大学の学生のように積極的に物事に挑戦している。
- ・企業研修、台湾研修において積極的に発言することができた。
- ・フィールドワークでテーマを探るのは大変だったが、決まるとインタビューしたり図書館で調べたりと解決のために全力で行動したこと。
- ・文化的な違いから見当はずれなテーマ設定や質問項目の設定をしてしまって上手くいかなかったもので、それらを話し合って再検討した。
- ・英語の語彙力を上げるために、空き時間に単語帳を見ている。
- ・自分の課題を解決するための方法を探し、それを一つずつ実践した。
- ・より高度な英語を身につけるために、フィリピンから日本に帰国してからも、フィリピンでできた友人と英語で会話したり、インターネットを利用したりして英語を学ぶ機会を獲得していこうと決意している。
- ・留学で見つけた課題は、自分の英語力のなさである。簡単な言葉をすぐに思い出せなかった時があって、その時はとても悔しかった。だから、それを解決するために、podcastを聞いたり、TOEICを積極的に受けたり、英会話を始めようと考えたりしている。理系でも、やはり英語力は大事だと思うので、これから伸ばしていきたい。
- ・ドイツで感じた課題について、変に間を置くことなく取り組んでいると思うから。
- ・独検、TOEFLを受けるための勉強を始めている。
- ・苦手な分野を克服して、得意な分野を伸ばせるように授業後に勉強するように努めた。
- ・リスニング力がまだまだと気づいたので今必死に上げるように努力している
- ・英語での専門用語がよく理解できなかったため、2回生以降専門分野を学ぶ時は、病名や実験方法を英語で何というかも意識して学んでいきたいと思う。
- ・ショップの管理をしている時に、服の配置や広告の仕方など、改善すべき点を提案したりした。全てが実行できたわけではないが、問題解決に向けて努力した。
- ・課題が見つければそれを克服するために力をつける。
- ・植物の同定作業が上手くいかない時、自分なりに様々なやり方で調べてみて、何とか解決させようとしている。
- ・課題を見つけ自分自身で解決を図るという点は、上記の項目で述べたものと類似している。その課題を見つけれなかったきっかけが、一緒に同行した仲間のおかげであったり、先生のおかげであったり、チェンライやバンコク的环境のおかげであったりと様々な要因があった。いずれにせよ私はたくさんの気づきと実践の場を与えられてとても恵まれていたと自認している。
- ・初日の植物観察で情報が不足していたことを踏まえ、にょい、葉脈の色など細部を観察し、判断材料を増やした。
- ・部活で思うようなフォームで船を漕げないときは、先輩のフォームを見たり自分で考えたりして理想のフォームをイメージする。そして現状を比較して一つずつ意識していく。

【水準2】

- ・英語のリスニング力を上げるためにはどうしたらいいか模索している。
- ・焦ると落ち着いて周りが見えなくなるため、その解決方法を模索している。

- ・失言が多いため慎重に発言するようにしている。
- ・先輩からのアドバイスなどを聞きながら現状、将来について考えている。
- ・自分の課題について相談したりする。
- ・自分が苦手な科目や分野については理解している。(できないことが恥ずかしく発言しにくい、いくつかの業務を頭に入れながら効率よく短時間で作業)
- ・語彙力の少なさを改善しようと考えているが、具体的な勉強方法を確立させられていない。
- ・今回の英語クラスを通して日本語訛りの英語を修正するという新たな課題を見つけたが、これを解決策を模索している。
- ・英語力が著しく乏しいため、学内での授業に加え、参考書を買って勉強する。
- ・基本に立ち返って再分析する
- ・GCP で自分の課題が見えてきたところがあったので、その課題解決を模索するステージに進むことができ、GCP で成長できたように思う。
- ・フィールドリサーチを行い、発表を作り上げるとき、有機野菜関する人々の意識から、マレーシアの有機市場の現状の問題が何か分析することができた。
- ・英語に関してはスピーキング力がまだまだ足りないと感じたが、解決方法を模索している状況で、実践まではまだ取り組めていない。
- ・英語について、自分の語彙の少なさを痛感しました。帰ってきてからも英語でやり取りをする機会がありますが、わからないことは調べたり、単語帳で勉強をしたりするようになりました。
- ・スムーズな英語での会話という課題。
- ・分からなかった単語をメモして後で調べた。
- ・苦手な分野の勉強を独自に行っている。
- ・苦手な発音の練習を、ネットを介して改善したいと思っている。
- ・日本にいても英語に触れておきたいので ESL を利用しようと考えている
- ・苦手な科目の本質を理解するために、問題集をひたすら解いている。
- ・部活でどうすれば声が楽に出るのかを研究している。
- ・部活動内で見つけた課題はすぐに解決策を探している。
- ・ベトナムで政府の援助を受けられず、教育環境を改善できなかったり、災害の被害を受けても何もできなかったりといった人々の存在を知った。また、日本で働くために勉強している若者がとても多いことを知り、日本で彼らが過酷な労働環境に置かれることがあるという問題について重大な課題に感じた。大学で学んでいることや、サークルでの活動の経験を生かして自分に何ができるのかを総合的に考えるようになった。
- ・活動を通して見つけた課題の解決策を考えているが、実践ができていない。
- ・わからないことをどのようなアプローチで解決すればいいか悩んでいる。
- ・「ミャンマーの若者が海外で働かなければ生活が成り立たない」という課題の解決策がわからず、模索している。
- ・企業訪問に行った時、社会や会社について説明を、受けたが背景知識や教養が不足していた。もっと知識があれば、より有意義な訪問になると感じた。
- ・ミャンマーの課題は特に労働環境や労働に対する意識にあると思った。というのも、ミャンマーの人々はまだお金を稼ぐためにだけ働くのであって、効率や組織というところまでは意識がいないようであった。そこで、ミャンマーを発展させるために我々日本人ができることは、その意識改革であると感じた。今はそれにどのように取り組んでいけるか模索中である。
- ・異文化理解や英語学習、コミュニケーションもこれからもっと必要だと感じた。
- ・コミュニケーション力が足りない。世界の国の文化、歴史はもちろん日本のことも全然知らない。ミャンマーで出会った学生が自分の国のことを語っているのを聞いて刺激を受けた。

3-1-2. ルーブリック指標に基づく自己評価の経年変化（平成 29 年度参加学生）

平成 29 年度参加学生に対しては、ルーブリック指標による自己評価を、教務システムの機能を利用して実施した。ルーブリックによる自己評価結果は、表 1～3 のとおりである。

また、それぞれに関するプログラム参加年度（事前学修時・事後学修時）と参加 1 年後の自己評価結果を比較した図が図 1～3 である。

3 つのチカラ（「チームワーク力」「自己修正力」「課題挑戦力」）の自己評価の経年変化について、共通して言えるのは「水準 3」の割合が、平成 30 年度末では事前学修時より増加していることである。ただ、「チームワーク力」については、事後学修時より平均 10.1% の増加が見られるが、「自己修正力」「課題挑戦力」については、事後学修時よりも低い結果となっている。水準 2 以上の割合について言えば、「チームワーク力」と「課題挑戦力」では事前学修時及び事後学修時よりも高い。一方、「自己修正力」の場合、「自己を認識し、他者への理解を通して、自分の考えや行動を見直すことができる」については、事前学修時だけでなく事後学修時よりも増加しているが、「得意分野を伸ばし、苦手分野を克服する」については、事前学修時よりは高いが、事後学修時よりも低い結果となっている。

以上の結果から、一般的な自己認識や他者理解、それを踏まえた自己修正力という点では、向上が見られる。これに対して、プログラム参加から 1 年を経過して、「苦手分野の克服」という点に関して、プログラム参加直後よりも低い水準で評価している。

その要因としてまず考えられるのは、プログラム参加直後は、英語等の語学力に課題を見出している学生のコメントが多く、課題が比較的明確で、克服に向けての意識が非常に高いことが挙げられる。他方で、参加 1 年後の自己評価が低下しているのは、年次進行に伴い、学修内容についてより深い専門性とより高い水準の理解・考察能力が求められていると認識し、自己をより厳しく評価していることの表れであると考えられる。

また、参加学生への個別調査（メール又は面談）によると、「参加後に、もっと視野を広げた方がよい」と思い、得意・不得意にかかわらず、今まで知らなかったことに挑戦することを意識したため水準 3 には至らなかった。」という学生のコメントを得た。

このように、学生は自らの経験を基に、より高い水準のチカラが必要であると認識したり、より様々なチカラが必要であると意識したりすることによって、自己を厳しく評価するよう変化しているのではないかと考えられる。

① チームワーク力

「水準 3」と回答した学生は、平均 29.5%（1-1：34.6%、1-2：24.4%）であった。（H30 目標値：20%）

「学生実験でチーム内の役割分担を積極的に行うように声かけをし、実験がスムーズに進むようにした。」

などの具体的な事例・根拠に基づき水準を判断・選択しており、プログラム参加の翌年度もチームワーク力を高めていることが窺える。

② 自己修正力

「水準 3」と回答した学生は、平均 25.6%（2-1：28.2%、2-2：23.1%）であった。（H30 目標値：20%）

「授業中に質問した人の考え方を知って自分も多面的な見方ができるように努めている。」

などの具体的な事例・根拠に基づき水準を判断・選択しており、プログラム参加の翌年度も自己修正力を高めていることが窺える。

③ 課題挑戦力

「水準3」と回答した学生は、23.1%であった。(H30 目標値：20%)

「自分の将来のキャリアについて、この一年をかけて考えた結果、進路を決めることができた。」などの具体的な事例・根拠に基づき水準を判断・選択しており、プログラム参加の翌年度も課題挑戦力を高めていることが窺える。

表 1 自己評価結果（チームワーク力）

【チームワーク力】

1-1. 学内外の活動へ参加し、自分の役割を担う

		回答数 (人)	H29 事前学修	H29 事後学修	H30 年度末
【水準3】	チームの活動において自分の役割を遂行し、それが成果へと繋がっている。	27	4.4%	19.4%	34.6%
【水準2】	活動に参加する際、自分の役割に基づいて発言や行動をしている。	28	41.1%	50.0%	35.9%
【水準1】	活動に参加する際、自分の役割について意識し、理解しようとしている。	21	53.3%	30.6%	26.9%
【水準0】	水準1に達していない。	2	1.1%	0.0%	2.6%

1-2. メンバーと協力し、チームの目標を達成する

		回答数 (人)	H29 事前学修	H29 事後学修	H30 年度末
【水準3】	メンバーと協力し、チームの目標を達成している。	19	5.6%	19.4%	24.4%
【水準2】	メンバーの意見や立場を尊重し、意思疎通を図りながらチームの活動に取り組んでいる。	34	45.6%	45.8%	43.6%
【水準1】	メンバーの意見や立場を尊重し、チームの目標を理解している。	23	45.6%	34.7%	29.5%
【水準0】	水準1に達していない。	2	3.3%	0.0%	2.6%

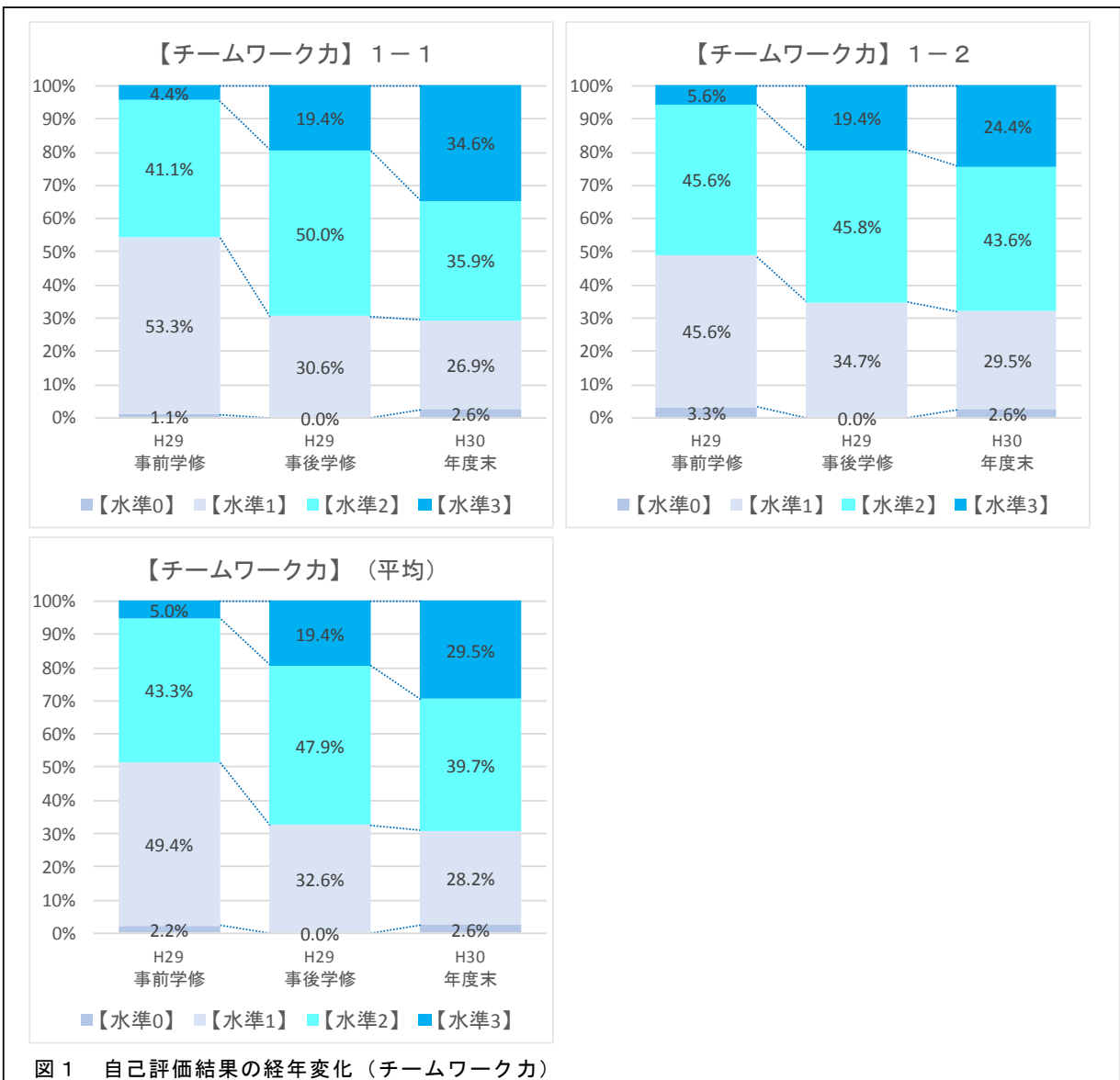


図 1 自己評価結果の経年変化（チームワーク力）

—水準選択における具体的な説明（水準２・水準３）—

【チームワーク力】1-1. 学内外の活動へ参加し、自分の役割を担う

【水準３】

- ・GCP 参加中、リーダーの補佐にみんなで周り、フォロワーシップをそれぞれができる範囲でやっていた。
- ・授業中みんなで話し合い、協力した。
- ・チームを組んでハルトプライズに参加、審査員特別賞を受賞。
- ・演奏系の部活で広報のチーフを担当し、広報に関する活動の企画、取りまとめを行なっています。演奏会の集客などで一定以上の成果を上げています。
- ・部活動での運営にあたる一年であった。交響楽団で演奏会の当日責任者を務め、1700 人のお客様を集めた演奏会当日の運営を円滑に進められた。
- ・サークル活動において、チーム活動を行う際、上回生としての立場を自覚し、チームが目指す方向へ導くことができるようになったと考える。
- ・仲裁について学ぶゼミ活動において、仲裁の未経験者が多かったことからゼミ内での模擬大会を提案、実行した。その結果、各自が仲裁や大会に向けた準備方法を理解できた。
- ・ゼミ研究の発表に向けて、自分の役割を果たし、成功を収めることができた。
- ・自分から何かを発信することが普段の生活においても多くなった。
- ・ゼミ活動にてチーム内での役割を認識し、活躍しました。
- ・リーダーシップ
- ・部長や代表という役職をこなした。
- ・部活動において、後輩の技術指導にあたった。
- ・しっかりと役割を分担して行えた。
- ・学生実験でチーム内の役割分担を積極的に行うように声かけをし、実験がスムーズに進むようにした。

【水準２】

- ・ゼミでの議論で毎回必ず発言するようにしている。
- ・サークルなどでは、みんなが楽しく過ごせるように気をつけた。
- ・アルバイトで自分の足りないところを他の人を参考にしている。
- ・チーム内で自分の役割に気づいて、それを全うする。今年度の集中講義において、この力を発揮できた。
- ・新入生を GCP のプログラムに誘導するイベントの作成。
- ・アルバイト先でのリーダーとしての役割。
- ・部活で話し合いが必要な時には積極的に意見を述べるようにした。
- ・できるだけ新しいコンテンツをグループに導入しようとし、その定着に努めている。
- ・インターンシップ内でのグループワークやディスカッション。
- ・部活動において率先して下級生に指示を出す。
- ・ゼミ活動に活かした。
- ・発言をしないことは人を不安にさせたり、無機質な人という印象を与えたりすることを学んだ。だから、言うべきこと、直してほしいことは積極的にいうようにしている。
たとえば、人はダメ出しを言うことは多いが、褒めることは少ないので良かったときは褒め言葉を送るようにしている。
- ・決められた仕事だけでなく、部活動ならば部がよりよい方向へ行くように会議等でも積極的に発言している。
- ・課外活動の班長として書籍の編集に携わり、企業や大学の教授などの協力を得ながら学生メンバーをまとめ、行動している。

【チームワーク力】1-2. メンバーと協力し、チームの目標を達成する

【水準３】

- ・GCP 参加中での課題で、それぞれが得意なところを教え合うなどお互いを尊重し、助け合った
- ・アルバイトにおいて、メンバーと協力して業務を完遂できた。
- ・自分が広報を担当する部活の演奏会で、集客率アップを実現しています。
- ・サークル活動においてメンバーで協力して、ラオスへのスタディーツアーを成功させた。
- ・チーム内の人の話を批判的に受け止めるのではなく、まず理解するようになった。
- ・部活動において、新歓活動に励み、目標入部人数を達成した。
- ・部活におけるチームの目標達成。
- ・アルバイト(デパ地下)では毎回の売り上げ目標をその日のメンバーと確認し、目標を達成しつつ仕事を早く終わらせるように心がけている。

【水準2】

- ・サークル活動で去年運営を行っていたが、さまざまな人と関わる中でどのようにコミュニケーションを行うべきかを意識していた。
- ・GCP の懇親会をやる上で、話し合いを重ねてより良いものを作ろうとしている。
- ・フィリピンの留学でも頑張ってみんなで劇などの課題をした。
- ・ディスカッションの時しっかり発言した。
- ・アルバイトで一緒に働いているメンバーとお互いにコミュニケーションをとって最高の時間を提供している。
- ・サークルでの係活動。
- ・ゼミ活動において、より多くの人が参加できるように日程の調整などを工夫しながら取り組んでいる。
- ・部活やゼミの話し合いの時には、相手の意見が自分と反対であっても一度しっかり聞くことを心がけた。
- ・考え方の違いや、背景の違いがあることをきちんと把握しながらグループでの活動を進めています。
- ・ゼミ活動に活かした。
- ・自分だけの意見を押し通すのではなく、コミュニケーションを図りながら周りの意見はどうかをきちんと認識した上で行動している。
- ・なにもかも自分で全てやった方が早い。
- ・他の人の意見を尊重し、それを踏まえて自分の考えを述べるよう意識している。
- ・部活動では他の人の意見を聞きつつ、自分の意見も発信するようにしている。

表2 自己評価結果（自己修正力）

【自己修正力】

2-1. 自己を認識し、他者への理解を通して、自分の考えや行動を見直すことができる

		回答数 (人)	H29 事前学修	H29 事後学修	H30 年度末
【水準3】	自分以外の人の考えや行動を参考にして、自分の考えや行動を見直している。	22	23.3%	30.6%	28.2%
【水準2】	自分以外の人の考えや行動を理解し、自分の見直すべきことについて理解している。	30	26.7%	31.9%	38.5%
【水準1】	自分の考えや行動について認識している。	23	47.8%	36.1%	29.5%
【水準0】	水準1に達していない。	3	2.2%	1.4%	3.8%

2-2. 得意分野を伸ばし、苦手分野を克服する

		回答数 (人)	H29 事前学修	H29 事後学修	H30 年度末
【水準3】	自分の得意分野を伸ばすため、苦手分野を克服するための実践を行っている。	18	14.4%	27.8%	23.1%
【水準2】	自分の得意分野を伸ばす方法、苦手分野を克服する方法を模索している。	22	30.0%	34.7%	28.2%
【水準1】	自分の得意分野や苦手分野について理解している。	35	51.1%	33.3%	44.9%
【水準0】	水準1に達していない。	3	4.4%	4.2%	3.8%

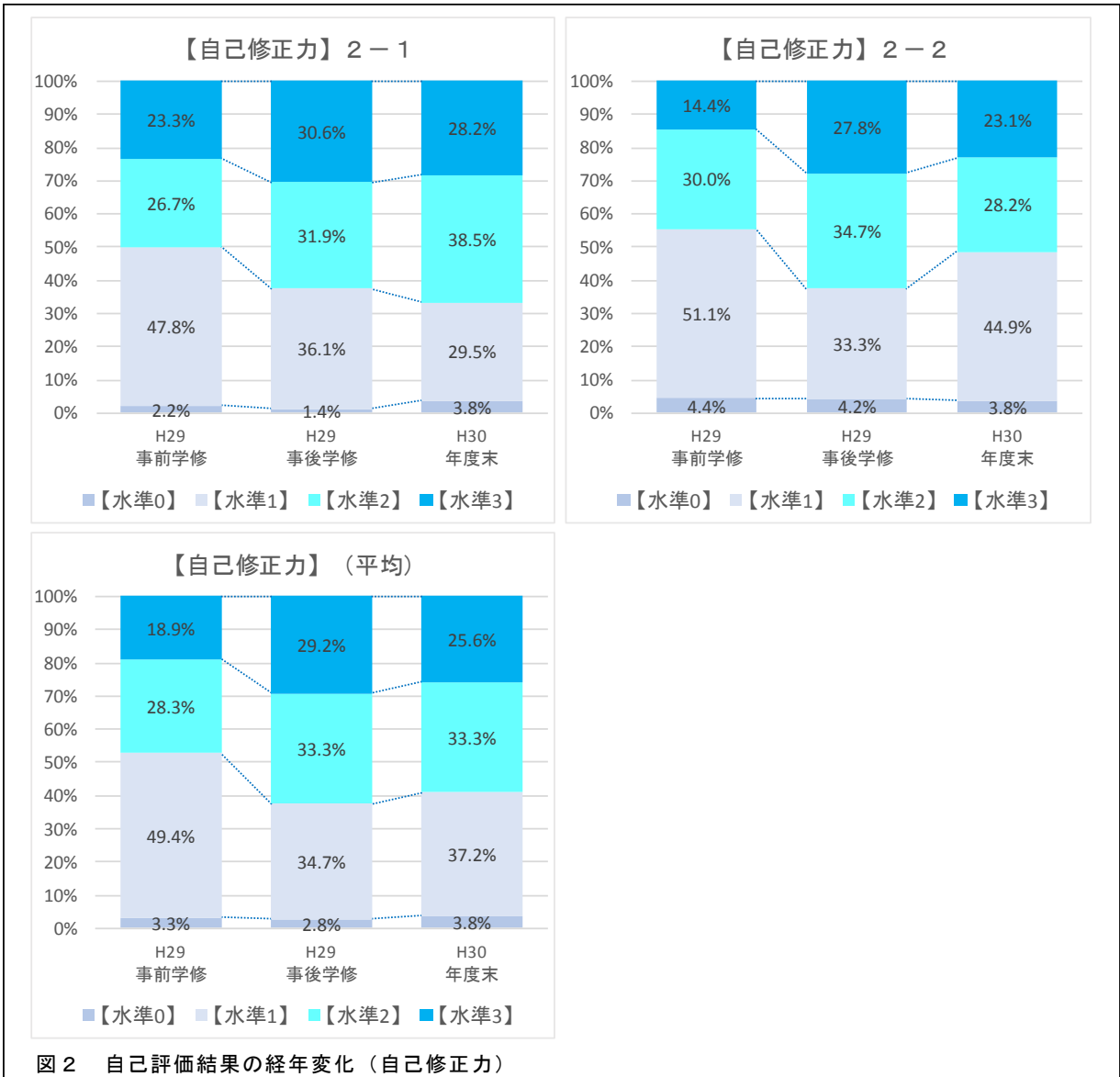


図2 自己評価結果の経年変化（自己修正力）

—水準選択における具体的な説明（水準２・水準３）—

【自己修正力】2-1. 自己を認識し、他者への理解を通して、自分の考えや行動を見直すことができる

【水準３】

- ・他学生の英語の発音などを参考にいいところを盗もうと頑張っています。
- ・授業中に質問した人の考え方を知って自分も多面的な見方ができるように努めている。
- ・友人や知人との人間関係において、他人の言動から自分の行動を見直している。
- ・部活動において他の運営にあたっているメンバーと話をしていく中で、相手の事情を理解し寄り添って一緒に進めていけるように自分の基準でやり方を進めていくことを見直した。
- ・前問と被るが、ひとの意見は反対意見でも聞くようにし、取り入れるべきところは取り入れるようにした。
- ・就職活動における自己分析等を通じて。
- ・そうするように心がけるようになった。
- ・他人の考えをより理解できるようになった。
- ・他人に頼っても無駄。自分でするしかない。
- ・部活動において、同期メンバーの様子を参考にしている。
- ・インターンシップに参加して社員の話を聞き、自分自身を見つめ直すとともに、将来どのような働き方を目指したいか考えた。
- ・将来のために留学や院への進学を考える過程で、目標をしっかりと持った人の意見や行動を参考に自分の将来について考えている。

【水準２】

- ・後悔しそうなことは出来るだけ挑戦しようとしている。
- ・他の人の意見もしっかりと聞いた。
- ・中国の学生と交流する中で、日本の常識を疑うようになった。
- ・アルバイトにおいて。
- ・自分がすべきことに対して計画的に取り組む能力を改善すべきだと感じている。
- ・よくコミュニケーションをとって、指摘してもらうようにしている。
- ・就活に活かした。
- ・人とたくさん関わるうちに、人それぞれ見る視点は違って、それぞれ考えを持っていて、頑張っていることを知った。ただ、人と接するときには自分の考えを押し付けてしまうことが多々あるので直すべきだと感じている。
- ・批判的に思考する。
- ・自分の発言や言動と相手の発言や言動、性格等から自分が見直すべき点を認識している。
- ・アルバイトで、同僚の働き方を見て、自分の働き方の参考にしている。

【自己修正力】2-2. 得意分野を伸ばし、苦手分野を克服する

【水準３】

- ・グループワークの中で自分はどのような役割を担うのが得意かを意識した。また、語学学習では苦手な技能と得意な技能を認識したうえで、技能の向上や苦手克服を行おうとした。
- ・英語をより上達させるために普段からリスニングなどをやっている。また、苦手なスピーキングも練習している。
- ・得意分野は、人前で発表すること。苦手分野は事務作業。
得意分野では、サークルなどで発表の機会を増やし、事務作業はすることを箇条書きにするなど工夫して取り組んでいるか。
- ・就職活動においての苦手分野克服のため、イベントなどに参加し克服を目指している。
- ・英語の能力を向上させるため、英語で法律上の問題について議論するゼミに所属している。

- ・前期は得意な建築デザインに力を入れ、コンペにも参加した。後期は苦手な構造を克服するため履修講義を増やし、基本事項を復習している。
- ・プログラミングの能力を伸ばすため、プログラミングコンテストに参加している。

【水準2】

- ・なるべく英語の勉強をしようとしている。
- ・計画性の無さを克服するため、グーグルカレンダーやリマインダーなどのスケジュール管理ツールを使うようにしています。
- ・他人に仕事を任せるということをした。
- ・英語の動画を自分から見るようになった。
- ・就活に活かせた。
- ・嫌な課題から逃げずにこつこつと取り組む事を忘れないようにしています。
- ・苦手分野を克服しようとするが、得意な分野でカバーする。
- ・苦手な分野の学習でも、得意な分野と同じぐらい努力するようにしている。

表3 自己評価結果（課題挑戦力）

【課題挑戦力】

3-1. 課題を見つけ、解決をはかる

		回答数 (人)	H29 事前学修	H29 事後学修	H30 年度末
【水準3】	見つけた課題の解決に向けて取り組んでいる。	18	20.0%	30.6%	23.1%
【水準2】	見つけた課題を解決する方法を模索している。	27	18.9%	23.6%	34.6%
【水準1】	解決すべき課題を見つけることができる。	29	56.7%	44.4%	37.2%
【水準0】	水準1に達していない。	4	4.4%	1.4%	5.1%

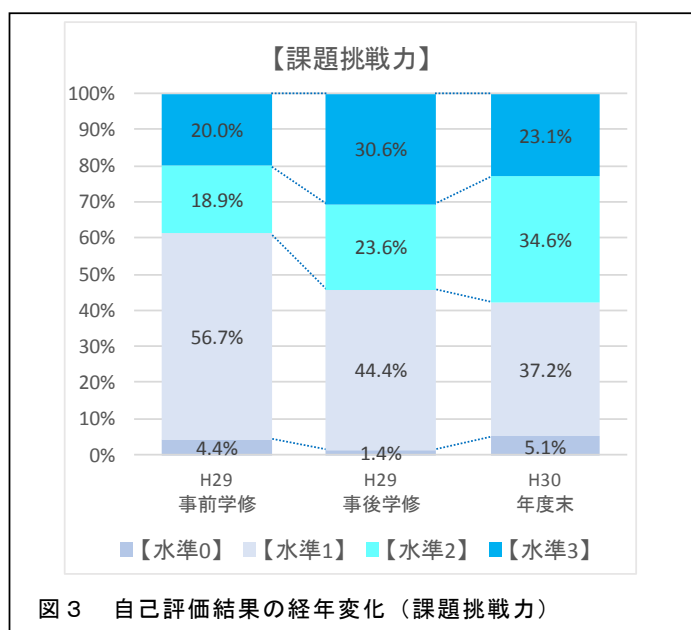


図3 自己評価結果の経年変化（課題挑戦力）

【課題挑戦力】3-1. 課題を見つけ、解決をはかる

【水準３】

- ・整理整頓が苦手なので、決まった時間に片づけることを意識した。
- ・自身の英語の発音などを他の学生から刺激を受けどうやって改善できるかを模索している
- ・自分の将来のキャリアについて、この一年をかけて考えた結果、進路を決めることができた。来年度はそれに向かって努力していきたい。
- ・アルバイトでのキャンペーン。
- ・構造が苦手なので、克服に向けて力を入れている。

【水準２】

- ・英語の勉強を模索している。
- ・文化の違いを受け入れられるようになりたい。
- ・自分が将来どういう道に進みたいかという自己分析に取り組んでいる途中である。
- ・ゼミ生の中で活動に消極的な人への対応を考えている。
- ・活動において、前提となる技術が身についていないような場合が多い。その技術の普及の方法を模索している。
- ・問題点を考え、直すために、場所のようなものをつくった。
- ・アルバイト先における不便なこと。
- ・諦めが早くなくなった。
- ・就活に活かした。
- ・一人で行動しがち、一人で問題を抱え込みがちなので、それを改善できるようにしたいが中々できない。
- ・課題の解決についてインターネットや周りの意見を参考に自分に合う方法を考えている。
- ・アルバイトでは接客の仕方、先輩のやり方を見て、改善するように心がけている。

3-1-3. ルーブリック指標に基づく自己評価の経年変化（平成 28 年度参加学生）

平成 28 年度参加学生に対しても平成 29 年度参加学生と同様に、ルーブリック指標による自己評価を、教務システムの機能を利用して実施した。ルーブリックによる自己評価結果は、表 1～3 のとおりである。

また、それぞれに関するプログラム参加年度（事前学修時・事後学修時）、参加 1 年後及び参加 2 年後の自己評価結果を比較した図が図 1～3 である。プログラム参加後も引き続き調査を行い、学生自身に、言動を振り返り自己を見つめ直す機会を与えることで、力の伸びが目に見える形になっている。

3 つの力に共通して、参加 1 年後（平成 29 年度末）では水準 2 以上の評価が一旦低下するが、参加 2 年後（平成 30 年度末）では再び上昇している。

平成 28 年度に 1 年生でプログラムに参加した学生に対して、参加 1 年後の水準が低下する要因について個別調査（メール又は面談）を行ったところ、以下のようなコメントがあった。入学直後とは異なる大学生活における個々を取り巻く様々な状況の変化に応じ、学修が深化したり、学内外での活動内容・活動範囲が広がったりと、学生の成長が伺える。

- ・ 1 年生でプログラムに参加した時は、海外で学ぶ中で英語やコミュニケーション、生活の仕方などでわかりやすく課題にぶつかる経験が短期間にたくさんあった。しかし、その後は、レポート、部活動、アルバイトなどでやらなければならないことが増えて、課題を見つけよう、解決方法を考えようという意識するに至らなかった。
- ・ 渡航先での自分の弱さや苦手な部分が目に見えてわかり、事後学修の時には、状況を見て自分で改善することができたと認識していたため、自己修正力の評価が高かった。参加 1 年後は、新たなフィールドで新しいチャレンジをしていたので、まだ苦手分野の克服のための実践に至っていないと思った。自分に対する評価基準がどんどん厳しくなっているので、自己評価が下がった。
- ・ プログラムに参加した 1 年生の時に比べて、2 年生では学修内容がより専門的で難しくなるとともに、アルバイト先でも後輩のサポートや指導をするといった役割に変化した。このような経験から、まだまだ解決できていない、取り組めていない課題が多いと感じたため、プログラムに参加した時よりも自己修正力を相対的に低い評価を付けた。
- ・ 妥協しない性格であり、まだまだ成果・行動に現れていないと自覚しているため、自分自身と真剣に向き合って考えた結果、自己修正力・課題挑戦力は、自己評価を低く付けた。

① チームワーク力

「水準 3」と回答した学生は、平均 34.1%（1-1：35.5%、1-2：32.7%）であった。（H30 目標値：20%）
「他学部とチームを組んでレポートを作成した際、自分の強みを生かし他人ができないパートを引き受け、結果として良い成績がもたらえた。」
などの具体的な事例・根拠に基づき水準を判断・選択しており、プログラム参加の 2 年後も引き続きチームワーク力を高めていることが窺える。

② 自己修正力

「水準 3」と回答した学生は、平均 36.4%（2-1：47.3%、2-2：25.5%）であった。（H30 目標値：20%）
「ゼミ内のチームで応募していた「地方創生☆アイデアコンテスト 2018」で大学生以上の部で近畿地区優勝、全国第 3 位となった。その際、チームの中での役割として課題分析・プレゼン発表を担当した。」
などの具体的な事例・根拠に基づき水準を判断・選択しており、プログラム参加の 2 年後も引き続き自己修正力を高めていることが窺える。

③ 課題挑戦力

「水準3」と回答した学生は、31.8%であった。(H30 目標値：20%)

「特に語学面で、どうすればそれを伸ばすことができるか考え、そのためネイティブとのコミュニケーションを増やすなど努力している。」

などの具体的な事例・根拠に基づき水準を判断・選択しており、プログラム参加の2年後も引き続き課題挑戦力を高めていることが窺える。

表 1 自己評価結果（チームワーク力）

【チームワーク力】 ※H28事前・事後学修時のデータは、旧ループリック指標の「チームワーク力」の数値（1-1, 1-2共通）

1-1. 学内外の活動へ参加し、自分の役割を担う

		回答数 (人)	H28 事前学修	H28 事後学修	H29 年度末	H30 年度末
【水準3】	チームの活動において自分の役割を遂行し、それが成果へと繋がっている。	39	3.6%	14.4%	25.9%	35.5%
【水準2】	活動に参加する際、自分の役割に基づいて発言や行動をしている。	38	38.4%	62.9%	28.7%	34.5%
【水準1】	活動に参加する際、自分の役割について意識し、理解しようとしている。	28	53.6%	22.7%	40.7%	25.5%
【水準0】	水準1に達していない。	5	4.5%	0.0%	4.6%	4.5%

1-2. メンバーと協力し、チームの目標を達成する

		回答数 (人)	H28 事前学修	H28 事後学修	H29 年度末	H30 年度末
【水準3】	メンバーと協力し、チームの目標を達成している。	36	3.6%	14.4%	19.4%	32.7%
【水準2】	メンバーの意見や立場を尊重し、意思疎通を図りながらチームの活動に取り組んでいる。	42	38.4%	62.9%	37.0%	38.2%
【水準1】	メンバーの意見や立場を尊重し、チームの目標を理解している。	27	53.6%	22.7%	36.1%	24.5%
【水準0】	水準1に達していない。	5	4.5%	0.0%	7.4%	4.5%

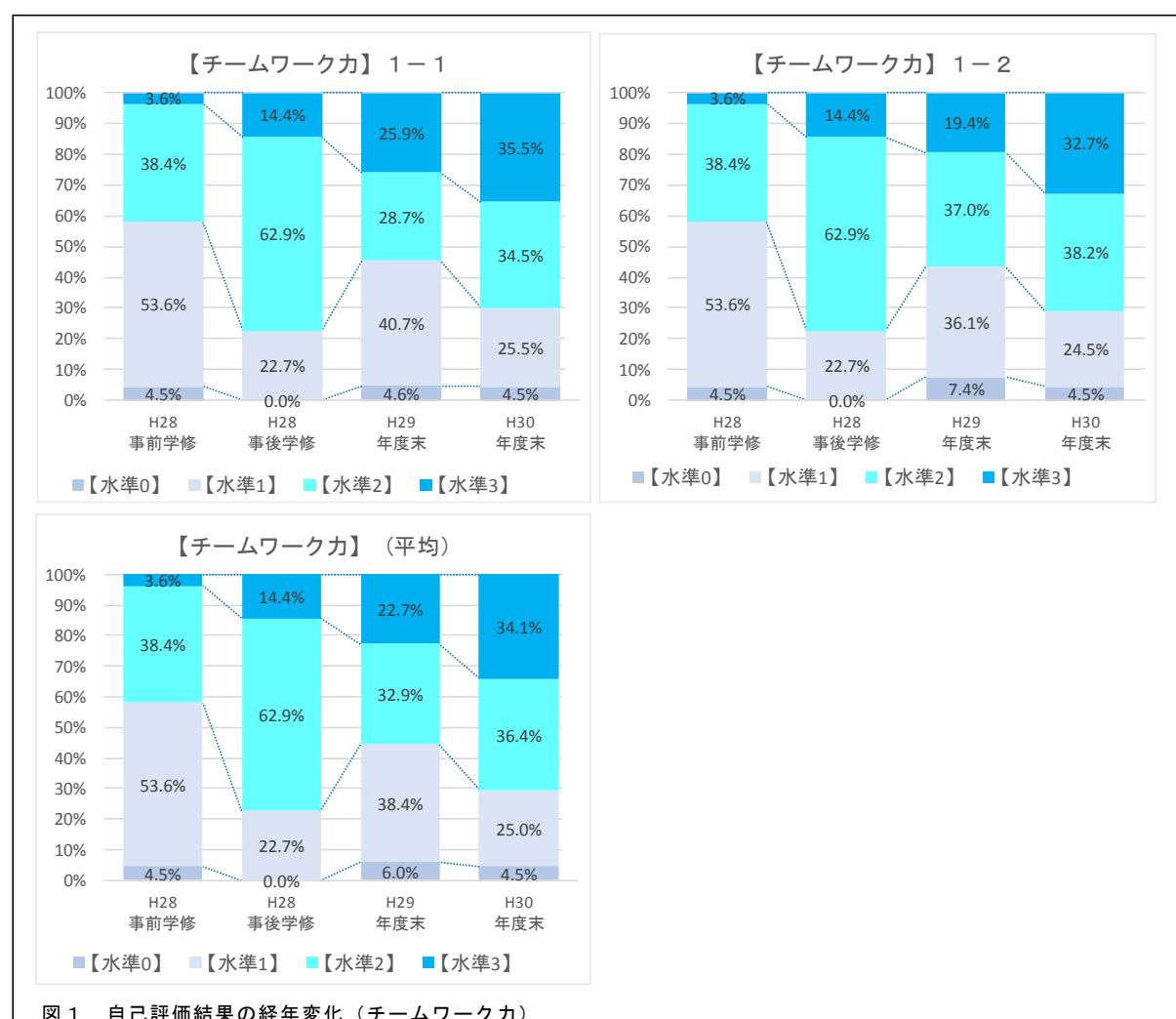


図 1 自己評価結果の経年変化（チームワーク力）

【チームワーク力】1-1. 学内外の活動へ参加し、自分の役割を担う

【水準３】

- ・部活において、マネージャーとして、そして審判員としての役割を果たしました。ファールの多い競技でしたが、リーグ戦でファールを吹かれることも少なく、その事も一部昇格という結果に繋がりました。
- ・部活。
- ・オーケストラ部のチーフマネージャー（代表者）として楽団を牽引し、定期演奏会にて無事時間通り開演させるだけでなく、1700人以上の観客動員を記録。また、この年の神戸市文化活動功労賞を受賞。組織の中心としての役割を全うできた。
- ・神戸GCPやアジアの開発途上国についてPRするために学祭に出店した際、準備段階と当日の両方において自分にしかできないこと、自分がした方が良いことを見つけて円滑な運営に協力できた。
- ・ゼミ活動。
- ・自分の仕事以外にも、何かできることがないかを探している、
- ・他学部とチームを組んでレポートを作成した際、自分の強みを生かし他人ができないパートを引き受け、結果として良い成績がもたらされた。
- ・ゼミ内のチームで応募していた「地方創生☆アイデアコンテスト 2018」で大学生以上の部で近畿地区優勝、全国第3位となった。その際、チームの中での役割として課題分析・プレゼン発表を担当した。
- ・部活の幹部。
- ・能楽部で代表を担当して、新入生の確保と、楽しい活動になるよう心がけている。
- ・部活動でイベント担当としてトップでイベントを成功させた。
- ・各々の得意とする分野を持ち合わせて現地で活動できた。
- ・マネージャーとして、一部員として、結果を出すために自らが取り組むべきことは何かを考え、行動した。
- ・自分にできることを探して、自ら率先して行動する。
- ・ゼミ活動。
- ・混声合唱団での定期演奏会へ向けての経験による。
- ・ゼミで後輩に助言をしながら研究を進めた。

【水準２】

- ・会話が全体で行われるように話題を回す。
- ・交換留学においてグループ課題のある授業で自分の役割を意識して発できた。
- ・六甲祭の模擬店を出した時に、副代表になったので、参加した人全員と積極的にコミュニケーションを取ろうとした。出来る限り準備や当日にも時間を作って参加した。家が近かったので、用具も多く負担した。
- ・ゼミ活動において、必要な情報を自分で考え、まとめ、発言をしている。しかし、必ずしも自分が納得できる内容をまとめられることができるわけではない。
- ・サークルでの部長業や、大会での重役でした。
- ・部活動でリーダーを支える立場として助言をしたり、他の人の仕事の状況を把握し手伝ったり声をかけたりした。ゼミ活動で同期5人がまとめられるよう、意見を取りまとめたり、代表して自分が動いたり、日程調整をするなどのことを率先して行なった。
- ・ゼミ活動でのグループワークにおいて、自身の役割を全うしたと考える。
- ・学生連盟でホッケーの大会の実行委員長として取り組んだ。
- ・能動的に人の話を聞くことを意識するようになりました。
- ・部活動で率先して準備や片付けを行い、後輩たちにも自主的な行動を促した。
- ・実習や演習で積極的に発言し、個人の学びをチームの学びになるように努力した。
- ・インターンシップ等において自分の役割を全うしようと努めました。
- ・チームのリーダーという形で意見をまとめるなどした。

- ・サークル活動において、チームリーダーとして自分の役割を考えた上で行動、発言した。
- ・チームワークを行う際には、自分が発揮できる力を考え、役割を担うように意識しています。サークルでは、広報委員としてミーティングの活性化に努めました。
- ・サークルで自分の役割を果たす。
- ・考えたことは積極的に発言するよう心掛けています。
- ・ゼミ活動で4回生として3回生のサポートができるように発言などをした。

【チームワーク力】1-2. メンバーと協力し、チームの目標を達成する

【水準3】

- ・部活において、チームの全員と協力し合い、一部昇格という大きな目標を達成いたしました。
- ・部活で副キャプテンという役割を持ちながらチームをまとめて目標に向かってみんなで進んでいる。
- ・これまでは何かとチームリーダーとして指揮を執ることが多かったが、最近は自分のノウハウなどを後輩に伝えて任せることができるようになった。フォロワーとしてチームの全体像を見ながら支えることができるようになってきた。
- ・大会を成功させるという目標のもと、協力し、話し合い、成功に導いた。
- ・best paper award に選ばれた。
- ・上記の大会での入賞に向けて2018年年度は力を注いでいたので、メンバーと協業することで、目標を達成できた。特に役割を分けた後も、積極的に各自の成果を共有できていた点が良かった。
- ・部活。
- ・旅サークルで、同期と協力して六甲祭と合宿を成功させた。
- ・部活動で目標を達成させた。
- ・自分たちの活動によって周りにどのような影響を与えたいか話し合った上で活動できた。
- ・任されるところは任せ、そのフォローをした。
- ・サークルの広報活動でSNSを利用し活動を広め、新入生50人が入会してくれた。
- ・ボランティア活動時間の目標を達成した。
- ・ゼミで協力して研究を進められた。
- ・サークルでの話し合い。
- ・混声合唱団での定期演奏会へ向けての経験による。
- ・研究を進め、東京で学外発表し、一定の評価を受けた。

【水準2】

- ・サークルの幹部として、他のメンバーの良さを引出せるようにチームを調整していた。
- ・グループ課題でグラフ作りを作成したがどうすればより効果的なグラフができるかをメンバーとよく相談しグループに貢献することができた。
- ・アルバイト先で、一緒に働く従業員の経験や能力に合わせて、役割分担やフォローをしている。
- ・ゼミ活動において、グループで議論し、その意見をまとめながら、結論を導き出す努力をしている。
- ・オーケストラ部で、チーフとして周りとのコミュニケーションを密に保ち、大きな演奏会の成功を達成できた。しかし、目標としていた1800人の観客動員を達成できなかった。
- ・目標を再確認しながら活動に努めた。
- ・円ドルダービで賞を取れるような分析方法を考えた。
- ・部活でお互いの意見をぶつけ、練習メニューや部活としてのあり方を考えている。
- ・相手の意見を受け容れるように努めることを意識するようになった。
- ・留学中、授業内での選挙戦のディベートをグループで協力して進めた際、候補者やスローガン、重視すべき論点などをメンバーと話し合いながら決めることができた。
- ・自身の意見を発表するだけでなく、メンバーの意見に耳を傾けて活動に取り組んでいる。
- ・お互いの立場を理解し、役割に基づいた意見をしっかりと提示しグループワークに努めた。
- ・完全に目標達成はしていないが意思疎通の努力ができるようになった。
- ・サークル活動において、チームメンバーの様子をよく見て発言を促した。また、意見が対立したときには互いの意見をしっかりと聞き、両者が納得できる結果になるよう話し合った。

- ・サークルでほかのメンバーと協力する。
- ・それぞれのメンバーが持っている意見を尊重し、チームの目標や目的に近づけるよう努力している。メンバーの意見を否定して活動意欲を削がないこと、それぞれの意図をきちんと汲むことを心掛けている。
- ・ディベートをするときに役割分担をして、自分の役目を果たした。

表2 自己評価結果（自己修正力）

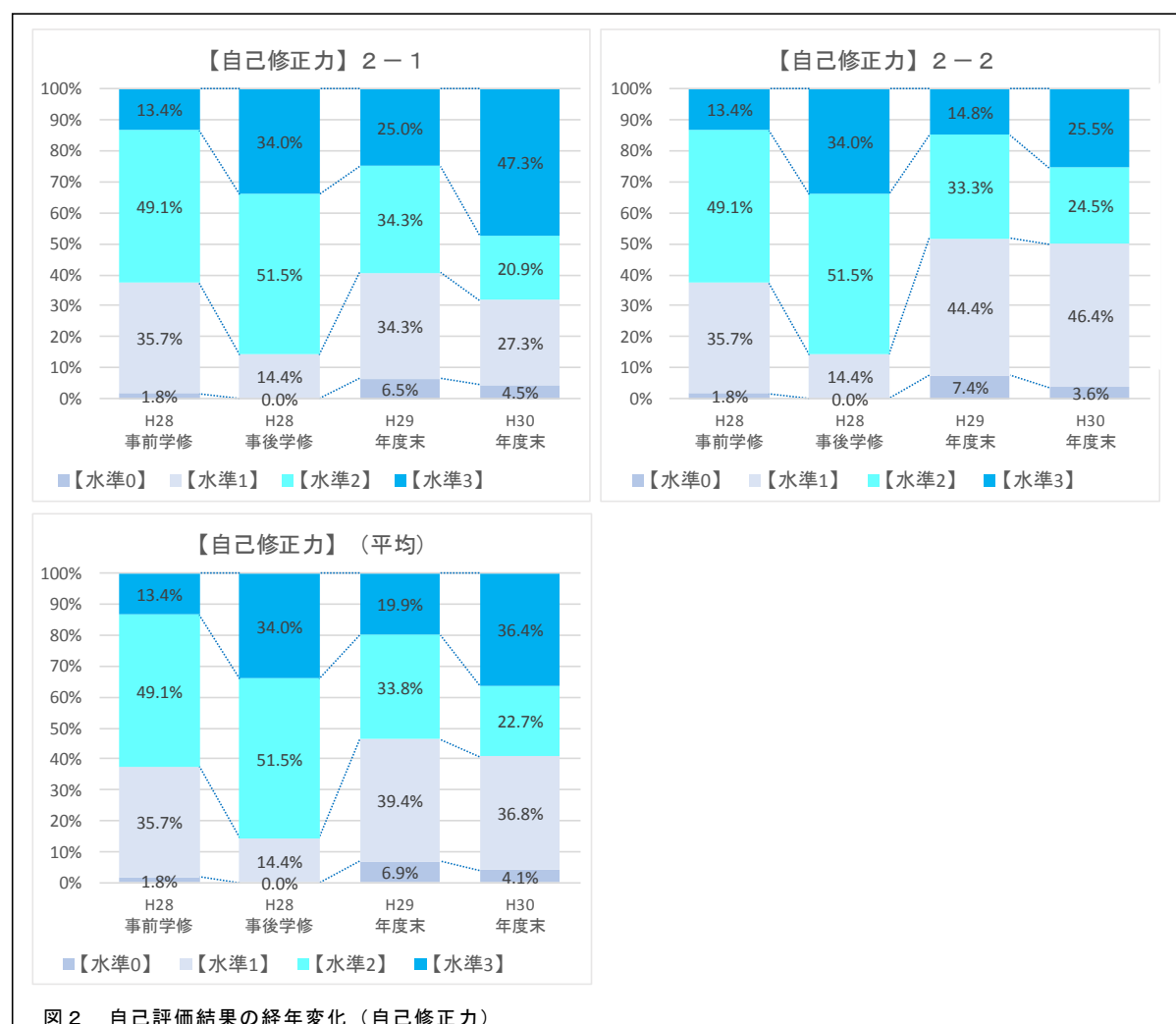
【自己修正力】※H28事前・事後学修時のデータは、旧ルーブリック指標の「自己修正力」の数値（2-1, 2-2共通）

2-1. 自己を認識し、他者への理解を通して、自分の考えや行動を見直すことができる

		回答数 (人)	H28 事前学修	H28 事後学修	H29 年度末	H30 年度末
【水準3】	自分以外の人の考えや行動を参考にして、自分の考えや行動を見直している。	52	13.4%	34.0%	25.0%	47.3%
【水準2】	自分以外の人の考えや行動を理解し、自分の見直すべきことについて理解している。	23	49.1%	51.5%	34.3%	20.9%
【水準1】	自分の考えや行動について認識している。	30	35.7%	14.4%	34.3%	27.3%
【水準0】	水準1に達していない。	5	1.8%	0.0%	6.5%	4.5%

2-2. 得意分野を伸ばし、苦手分野を克服する

		回答数 (人)	H28 事前学修	H28 事後学修	H29 年度末	H30 年度末
【水準3】	自分の得意分野を伸ばすため、苦手分野を克服するための実践を行っている。	28	13.4%	34.0%	14.8%	25.5%
【水準2】	自分の得意分野を伸ばす方法、苦手分野を克服する方法を模索している。	27	49.1%	51.5%	33.3%	24.5%
【水準1】	自分の得意分野や苦手分野について理解している。	51	35.7%	14.4%	44.4%	46.4%
【水準0】	水準1に達していない。	4	1.8%	0.0%	7.4%	3.6%



—水準選択における具体的な説明（水準２・水準３）—

【自己修正力】2-1. 自己を認識し、他者への理解を通して、自分の考えや行動を見直すことができる

【水準３】

- ・相手を見てよくないと思ったことや相手に注意されたことを考えて直す。
- ・他の人の学習の姿勢を見て真似している。
- ・英語が得意なので、更に伸ばすために、授業だけでなく、洋書を読んだり、オンライン英会話を利用したりして勉強している。地図を読んで目的地に行くことが苦手なので、そのことが得意な友達と一緒に旅行をして実践練習を積んだ。
- ・インターンシップに参加する中で、他の参加者との交流を多く持つことで、自分らしさを徐々に理解できるようになった。
- ・他人の良い点悪い点をよく観察するようになった。特にアルバイト先ではチームで仕事を回すので、自分がしておいてほしいことは他人に対してもするようになり、よりクオリティの高い仕事を追求できるようになった。
- ・自分をいつも見つめ直し内省するようにしている。
- ・グループのメンバーの働きに感心し感化され、パフォーマンス向上を目指した。
- ・実習で他者理解をするには他者と関係を築く上で自己理解をしないといけないことに気づき、自身の傾向を知り、考えや行動を改めることができた。
- ・就活。
- ・自分の行動の短所を指摘された際、問題点を認識して直すようにしている。
- ・他の人が自分にない価値観を持っているのを聞いて、自分にも一部それを取り入れようとする。
- ・自分の独りよがりなところを見直した。
- ・毎日学ぶことだらけで、翌日に生かせるところはすぐに習って生かした。
- ・仲間とフィードバックを行うことで、自らの行動を見直している
- ・自分と他人を比較せず、他者を理解して受け入れることの重要性を学んだ。
- ・他人の考えや行動を参考にして行動を見直す、うのみにすることのないように気をつけている。
- ・指摘されたことはどうしてそう捉えられたのかじっくり考えるようにしている。
- ・自分の勉強への取り組み方。
- ・読書などを通じて、様々な考え方を取り入れようとしている。
- ・読書を通じて多様な価値観を学ぼうと意識した。

【水準２】

- ・他人の見習うべき点を、自分の短所と比較しながら、どうあるべきかを考えることができている。
- ・インターンにおいて時折、自分一人で突っ走ってしまうことがあった。
- ・常に多くのアメリカ人がもつ積極性を見習い、自分も実践するよう心掛けている。
- ・周りが見られるようになった。
- ・自分本位で考えるのではなく、他人の意見を常に尊重している。
- ・自分の直すべき点を人に指摘されて理解した。
- ・ディベートをするときにまずは相手の主張などを聞き、理解するという場面があり、そのような場所でしっかり対応できた。

【自己修正力】2-2. 得意分野を伸ばし、苦手分野を克服する

【水準３】

- ・ヨガのコースで出会った人の影響を受けて、これまで人見知りだったけれど、自分から積極的に話せるようになった。

- ・自分の課題は他人に対して興味関心を持ったり、周囲の空気を察して動くことだったりしたので、これを克服するためにこれまで敬遠してきた接客業のアルバイトを始めた。
- ・計画ができないので手帳などを積極的に活用し、計画を立てまくっている。
- ・就活。
- ・苦手な料理をできるように、料理教室に通い始めた。
- ・自習を行う。
- ・読書を通じて多様な価値観を学ぼうと意識した。

【水準2】

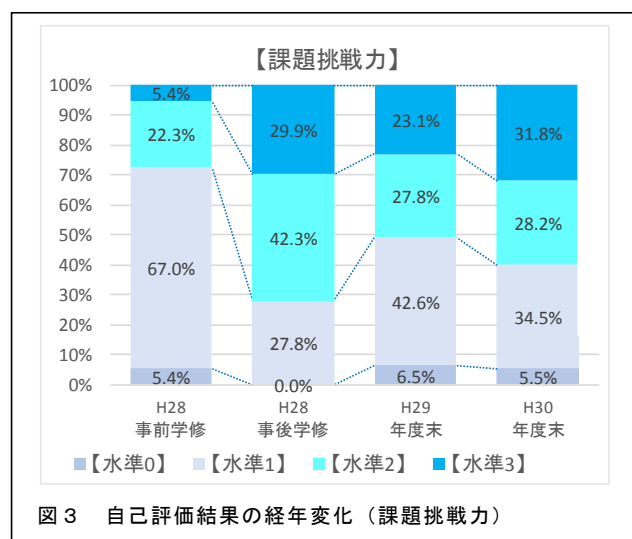
- ・得意分野については理解し、それを伸ばす工夫をしている。しかし、苦手分野については、理解はしているものの、得意分野を優先させるようにしている。
- ・どちらも毎日一定時間取り組んでいますがあまり成長した感じがしていません。
- ・苦手分野の克服に注力したことが今年にはなかったの(得意分野を伸ばしていた)で、今期はそれを意識しようと思う。
- ・経験をリフレクションすることで、自身の得意分野や今後の課題・苦手分野を考え、再び実践に移すことを心がけている。
- ・自分の関心のあるなしなど、自分の分析をしてとまっている。
- ・得意分野に関しては、自主的に学習するなどして伸ばすことができているが、苦手分野については具体的な行動はできていない。
- ・語学スコアを伸ばすため、苦手分野を見つけること、苦手をなくすための対策に取り組んでいる。
- ・教授と相談しながら、自分のやりたい分野についてどう取り組んでいけばいいかを見つけた。

表3 自己評価結果（課題挑戦力）

【課題挑戦力】※H28事前学修・事後学修時のデータは、旧ルーブリック指標の「課題挑戦力」の数値

3-1. 課題を見つけ、解決をはかる

		回答数 (人)	H28 事前学修	H28 事後学修	H29 年度末	H30 年度末
【水準3】	見つけた課題の解決に向けて取り組んでいる。	35	5.4%	29.9%	23.1%	31.8%
【水準2】	見つけた課題を解決する方法を模索している。	31	22.3%	42.3%	27.8%	28.2%
【水準1】	解決すべき課題を見つけることができる。	38	67.0%	27.8%	42.6%	34.5%
【水準0】	水準1に達していない。	6	5.4%	0.0%	6.5%	5.5%



【課題挑戦力】3-1. 課題を見つけ、解決をはかる

【水準３】

- ・研究室において、実験の結果が出れば、その後の課題も見つかるため、その課題を解決するために、さらに実験を組んだり、別の方法で実験を試みたりしています。
- ・語学学習において何が自分の課題なのかを考えそれに合わせた対策をしている。
- ・特に語学面で、どうすればそれを伸ばすことができるか考え、そのためネイティブとのコミュニケーションを増やすなど努力している。
- ・英会話力向上のため、英語での授業を履修したり、英語観光ボランティアガイドの活動を始めたりした。
- ・知識を身につけたりそれを蓄えておいたりするのは得意だが、それを対人の場で臨機応変に活用することが課題だった。今はアルバイトや出身高校でのTA活動を通してその人に合ったフォローや声掛けの仕方ができるように取り組んでいる。
- ・積極的に周りに目を配り、解決する課題がないか、どうすれば良いか考えるようにしている
- ・上にも記したように、課題が見つければ、次の機会に実践に移すようにしている。
- ・部活。
- ・部活で感じる課題を解決するために部活に関することには何事も積極的に関わるようにしている。
- ・部活の問題について話し合い解決策を模索した。
- ・アルバイトで、スタッフ間の共通認識を作れてなかったため、共通ノートを作成した。
- ・混声合唱団で、各パートの課題を解決し定期演奏会の成功へと努力した。

【水準２】

- ・将来仕事として環境保護に携わりたいと考えているが、その方法はまだ探している。
- ・自分の課題はわかっているつもりですがまだ修正仕切れていません。
- ・英語で話す能力が低いため、いくつかの教材に取り組んでいる。
- ・なかなか部活動全員のスキルの差を埋める方法を試している。
- ・卒業論文を書くときに、そのようなことができたと思う。
- ・社会課題に対して関与したい気持ちはあっても学生の立場では限界があった。社会問題に切り込み、課題解決に向けて挑戦していく姿勢は就職後も継続させたい。

3-2. プログラム参加後のアンケート結果

平成30年度に実施した15コースの参加学生を対象に、コース内容の満足度や学修成果等に関するアンケートを実施した。学修支援システムBEEF(BEEF Venture)を利用してアンケートを実施し、プログラムに参加した学生117名（複数回参加者を含む）のうち、102名から回答を得たところである。

◎各設問の集計結果について

・コースについて

コースへの参加理由については、「内容に興味があったから」(77.5%)、「海外に行ってみたかったから」(65.7%)となっており、自由記述からも、本プログラムの趣旨・内容を踏まえて参加していることがわかる。

また、参加したコースの内容については、「満足している」(68.6%)、「おおむね満足している」(30.4%)と、満足度は非常に高い。自由記述からも、様々なコースの学修活動が参加学生にとって学びの動機付けや気づきを得る良い機会となるとともに、英語によるコミュニケーション等を経験したことで次のステップへの意欲がわくなど、充実した内容であったことが読み取れる。

・学修成果について

学修成果については、「達成できた」(33.3%)、「おおむね達成できた」(55.9%)と、9割近い学生が目標どおりの学修成果を得ている。自由記述からも、語学能力の向上に加え、派遣先の日常生活やフィールドワークを通じて、異文化理解を深めていることがわかる。また、自らの学修に対する姿勢を振り返り、今後の学修意欲に結びつけようとしていることも窺える。

・プログラムへの要望について

回答数は多くはなかったが、現地の学生との交流など、自らの興味や意欲を基にした積極的な意見があった。

・さらなる留学等について

本プログラムへの参加を契機として、より長期的な留学等に挑戦したいかの問いについては、「そう思う」(50.0%)、「どちらかといえばそう思う」(36.3%)と、合わせて86.3%の学生が再チャレンジへの意欲を持っている。また、関心を持ったテーマについては、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」をあわせて96.1%の学生がより深く学修したいと回答している。長期留学等の国際的な活動へのチャレンジやより専門的なテーマへの学修意欲の向上等、本プログラムが全体を通じて設定している「学びの動機づけ」という目標が達成されていると言ってよいであろう。

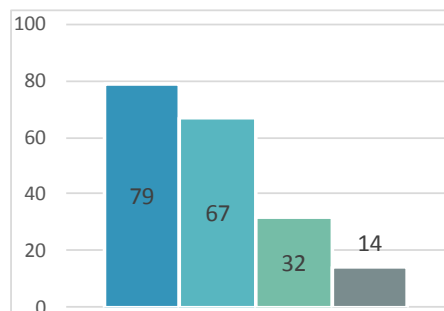
なお、プログラムは開始3年目であるが、アンケートで得た高い満足度や学修意欲を反映して、参加した学生のうち16名は既に本プログラムの別のコースに参加しているなど、海外での更なる活動に積極的にチャレンジしている。

神戸グローバルチャレンジプログラム 参加後アンケート集計結果

回答者数 102 名

(1) コースについて

●どのようなきっかけで今回のコースに参加しましたか。（複数回答可）

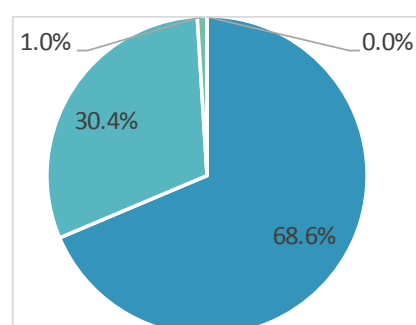


- I. 内容に興味があったから
- II. 海外に行ってみたかったから
- III. 単位がとれるから
- IV. その他

I	79	77.5%
II	67	65.7%
III	32	31.4%
IV	14	13.7%
回答者計	102	

- ・ 長期留学に興味があり海外の大学を見学したかったから。
- ・ アメリカの食文化を知ったり、アメリカの個人主義的な国民性に触れてみたいと思ったから。
- ・ カナダという国に興味があったから。
- ・ 渡航地の安全性、コースの期間、コースの開始日、ホームステイである点など。
- ・ せっかく大学に入ったので、何か大きなことに挑戦してみたかったから。
- ・ 金銭的援助があったから。
- ・ 過去に同様のプログラムに参加した時に自分の中で大きな収穫があったから。
- ・ 英語の能力を上げたかったから。
- ・ 英語能力向上のため。
- ・ 私は今までに海外に行ったことがなく海外へ行って現地の文化に触れてみたいと思ったからです。
- ・ 将来医学研究者になりたいと思っているので、時間がある時に第一線の研究がどのようなものか見ておこうと思ったから。
- ・ 以前ベトナムに家族で住んでいたことがあり、再度訪れてみたいという思いがあったから。
- ・ 海外に行ってみたく、特に日本と全く違うライフスタイルの国に行けば自分の常識を疑うきっかけになると考えたから。
- ・ 貧しい農業国だと聞いたから。日本とできるだけ異なる環境に自分を置きたかった。
- ・ タイは企業の進出先として人気があることも踏まえ、一度訪れて生活感を体験したいと思ったから。
- ・ 経済都市の中心都市であるヤンゴン滞在や現地での日系企業の訪問は急激な経済成長を遂げるミャンマーを見るにはぴったりだと思ったから。
- ・ 学校からの奨学金を受けることができるから。

●参加したコースの内容に満足していますか。



- I. 満足している
- II. おおむね満足している
- III. あまり満足していない
- IV. 満足していない

I	70	68.6%
II	31	30.4%
III	1	1.0%
IV	0	0.0%
計	102	100.0%

＜満足している＞

- ・日本では経験できないようなことがいっぱい経験できた。英語学習や、専門分野についての学習をもっと深く取り組みたいというモチベーションを与えてくれたため。
- ・たくさんの移民の人と接する機会があり、最先端の都市ニューヨークで日本との違いも感じられた。日本とニューヨークそれぞれの良さを実感できた。
- ・タイムズスクエアに行ったり、様々なことを体験したりできたから。
- ・語学力の向上、異文化交流ができたから。
- ・もともとあこがれていた土地であるし、自分の興味のある問題について学べるベストのフィールドであったから。また、授業も楽しく、英語についての知識も増えたから。
- ・私は英語力を上げることに興味がなかったのですが、フィールドワークとしての自由な時間が多く設けられていたこのプログラム内容に非常に満足しているから。
- ・学外学習の時間が長めに設定されていたため、ニューヨークの日常や文化に触れる機会が多く、様々な刺激を得ることができた。
- ・期待していた以上の経験ができたから。
- ・3週間という一見短い時間でも、ニューヨークのコミュニティや人々の価値観、日本人との違いを強く実感でき、帰国してからの色んな学びに対してのモチベーションとなった。
- ・行きたかったニューヨークに行けたので。
- ・カナダの多文化性に触れることで自分の意識が変わったし、語学学校での生活を通じて英語力を向上させることができたから。
- ・海外の文化を存分に堪能することができたことと単純に楽しく満足できたから。
- ・トロントの住民、ホストファミリー、日本以外からの留学生など、多様な人と会話をし、それぞれの視点からのトロントを知ることができたから。
- ・初めての海外で、トロントの人々はとても優しく、とても楽しかった。また行ってみたいと思ったからとても満足している。
- ・コースに参加することで、国籍や年齢によらない数多くの友達ができたから。またその国についても知ることができたから。
- ・トロントでの生活で、多文化共存というものがどのようなものなのかを学ぶことができ、また、自分も体験することができたから。英語を話すことへの抵抗がなくなり外国人とも堂々と話すことができるようになった。
- ・たくさんの学生や現地の人と交流することができた。自分が想像していたより遥かに英語力が伸びた。英語だけでなく文化に関する様々なことを学べた自分の視野が広がった。他国に対する考え方が変わった。
- ・とてもいい経験になったと思います。
- ・今回はGSPのプログラムがメインという形で参加したが、午前は英語を学び、午後は自由にフィールドワークの時間として使うことができ、多くの時間を使いながらトロントの街を見て回ることができ、とても有意義な時間を過ごすことができた。英語のプログラムもスピーキングを中心に行ったため、自分の苦手分野を強化することができ、また、午後に英語を実際に使い機会が得られるためとても良かった。
- ・英語を伸ばすだけでなく、多文化社会についての理解が深まったから。
- ・語学の学習はもちろん、ボランティア活動やフィールドワークの時間も十分にあり、様々な経験ができたから。
- ・トロントという世界でも有数の多文化共生社会で、ダイバーシティのあり様を直接触れて知ることができたから。
- ・現地での非日常的な体験に加え、毎日の自己振り返りなど、自分自身が成長できた気がするから。
- ・自由度が高いプログラムだったから。また、教授との距離も近く、メンバー全員でプログラムを作っているという感覚があった。
- ・新しい経験ができたから。
- ・日本にいては絶対に経験できない体験ができたから。
- ・日本では経験できないような生活や、今までに会ったことがない、ユーモアに溢れる人々とのコミュニケーションを体験できたため。

- ・初めて海外渡航を経験することができ、異なる文化の中で暮らす際の問題や、異なる文化を持った人とのコミュニケーションといったことを実際に体験できたことはとても良かったと思う。また、様々な企業で働く方とお話しさせていただく機会もあり、それを通して大学の授業に対する向き合い方も大きく変わったと感じる。
- ・学問を行うことは、第一に、海外の文化や生活、食事などにふれて学ぶ機会が多くてよかった。
- ・多くの成長するチャンスを与えてくれ、今後の課題を明確にすることができた。
- ・楽しいだけでなく、勉強になったから。
- ・自分の知らない世界のことを知れたし、みんなと協働して何かやるという授業を始めて受けてとても面白いなと感じたから。
- ・語学力が向上し、日系食品会社の海外進出など新たな興味が見つかったから。
- ・去年のフィリピンのコースと比べてクラスが日本人だけでなく、多国籍の語学学校だったので、様々な文化を持つ人々と交流することができました。
- ・3週間と少しという期間があったので、堪能して、日本が恋しく思うくらいになれたから。文化的背景の違いからくる困難に直面して、そこから日本についても発見できたことがあったから。グループ活動を通して協力して最後の発表ができたから。OBの方のお話が聞けて、学業へのモチベーション向上にもなったから。
- ・英語の上達だけでなく、一緒に参加したメンバーや UPLB の学生とも交流ができ、とても良い経験となりました。
- ・発音もしっかり上達して、人間関係も広がったから。
- ・現地の先生はじめ、ファシリテーターの方々がみなフレンドリーに接してくださったので、こちらから英語を使って話そうと思えた。
- ・放課後の現地の学生との大学周りをいろいろと行くのが楽しかったです。
- ・特に facilitator の制度は良かったです。同世代の国籍の違う人と交流できたのはいい経験になりました。
- ・今まで自分では気が付かなかった発音の間違いを指摘してもらったり、知らなかった英語の表現方法を教えてもらったりしたから。また、とても興味を持っていた有機農場や IRRRI にも行けて様々な貴重な体験ができたから。
- ・英語を楽しく学べたから。フィリピンが大好きになったから。
- ・とてもためになった。特に英語学習へのモチベーションが高まった。
- ・英語の授業はもちろん、IRRRI や農場など農学部の子として興味のある場所を訪れることができたから。
- ・英語を学ぶという点以外にも充実していたから。
- ・英語を使って会話をすることの楽しさを学び、とってもフレンドリーなフィリピン人の人柄に触れ、友達ができたから。
- ・英語を実践的に使え、現地の学生とも親しくなれたから。
- ・現地の生徒との交流で、スピーキング、リスニング能力が向上しただけでなく、帰国後の彼らとの SNS のやり取りでリーディング、ライティング能力の向上も期待できそうだから。
- ・フィリピンの文化に触れることができ、多くの友人ができたから。
- ・1ヶ月というのがちょうどいい。学習にも集中できる期間だし、国際色豊かな友達もできるし、その国の生活に馴染んでその国の生活をペースで楽しむことができる段階まで行けるので、充実でした。
- ・毎日の授業で得られることが多かったから。
- ・たくさんの人とコミュニケーションをとる、たくさんの言語を理解する、Apotheke をたくさん見るといって3つの私の目標をすべて達成できた。さらに、帰国してからも、連絡し合っている友達もいて、コミュニケーションの面では、120 パーセント達成できたと思う。
- ・現地でのサポートが手厚く、様々なところへ行くことができた。
- ・語学研修の時間の他に、学外でのコミュニケーション活動を行えて、とても充実していたから。
- ・神戸では経験できない様々なことを、現地でたくさん学べたから。
- ・英語力は上がったうえ主体性なども同時に鍛えられて自らの成長につながったから。また日程なども自分で設定することができとても自由にプログラム設定ができたから。

- ・海外で普段はできない経験がたくさんできたから。
- ・英語のコミュニケーション能力が向上し、また、海外に対する敷居が下がり、専門用語の英語を勉強しなくてはいけないという課題も見つかったから。
- ・様々な活動を通して、様々な方の考え方や価値観に触れることができ、私の将来を考える上でとても重要な経験となったから。
- ・初めての活動でも無事に保険や事前、事後学修ができ、安全で有意義なコースだった。
- ・自分の課題を見つけることが出来たことに加えて、自分の交換留学に向けてさまざまな情報を得ることができたため。
- ・個人では実現が難しいような経験ができたから。
- ・普段できない体験をたくさんして、興味深い話に多大な刺激を受けられた。
- ・自分が思っていた以上に研究テーマであるヨーロッパのアイデンティティについて知ることができたから
- ・2週間という期間で海外に居られることがなかなかない上に、一人では企画することが難しいたくさん のことを経験し、学ぶことができたから。また、一緒に行った人とも交流を深めることができた。
- ・ミャンマーは日本ではあまり発展していないイメージがあるが、実際に行くと活気に溢れていて国のイメー ジが変わったから。
- ・日本語を学ぶ多くの学生と交流したことで、海外には日本が好きで、将来は日本で働きたい人がたくさん いることを実際に知ったことで、多くの刺激を受けた。このような経験は単なる旅行では得られないと思 うので、この経験を大事にしたいと思う。
- ・ヤンゴン、マンダレー、バガンと沢山の都市に行くことができ、観光だけでなく現地の企業の方や、日本 語学校の先生、生徒と話すこともでき毎日が充実していた。貴重な経験ができた。
- ・多くのことを学べたし仏教が根付いている生活を見ることができたから。
- ・様々な仏教遺跡を訪れ、その歴史を感じるだけでなく、現地学生や現地の人々と交流する場面がたくさ んあり、そこからたくさんのことを学べたから。

＜おおむね満足している＞

- ・もう少し治安のいい所に泊まることができれば帰る時間を気にせずに自分の興味のあることを調査できた かもしれないと思ったから。
- ・世界的大都市で三週間密な時間を過ごせたことは本当に大きな経験だった。だが、自分で課した課題とい うのはないがしろにしてしまったところもあり、その面でまだやれることはあったと考える。
- ・設定された観光や、ホストファミリー、クイーンズカレッジなどは本当に良かったと思う。英語の授業に ついて、アメリカの歴史や自由の女神、移民についてなど詳しく教えてもらう授業は良かったが、クラス の中に神戸大学生にしかいなかったから、現地の学生と一緒に授業を受けるなど、もっと現地の学生との 交流がほしかったです。
- ・もっと学生と交流する時間があればよかった。
- ・自由時間も多く、行きたいところに行くことができたから。
- ・語学力の向上に繋がったというよりは、語学学習のモチベーションが上がるきっかけになった。
・スピーキングを中心とした授業内容や、独自でテーマを定めるフィールドワークなどコース内容は良かった が、終了の日程的な面で大変に感じた。
・トロントの多文化社会について多くのことを知ることができたから。
- ・良かったけどもう少し英語を話す機会がほしい。
- ・海外で様々な経験ができたから。
・現地学生や社会人とのコミュニケーションをとる機会が十分あったから。
- ・ギャップタームよりも夏休み中の負担の方が大きかったため、期待していたものと違った。ギャップター ム中に もっと活動しないとギャップターム海外協定派遣コースと呼ぶことはできないと思う。部活をし ている身として、夏休みをバンバン使われるのはあまり嬉しくなかった。
- ・目標を達成できたから。
- ・台湾大学の生徒と交流ができた。しかし、プログラムの性質上、現地の大学の紹介などに多く時間が 割かれてしまっていた。もう少し様々な活動が行えるとよかった。
- ・海外の大学に実際に行くことで、日本とは違う環境で勉強している人と関わる機会があり、生徒の方々の

モチベーションから刺激をたくさん受けることができたため。また、自分の学科ではない企業インターンに行くことができ、幅広くいろいろなことを学ぶことができたため。

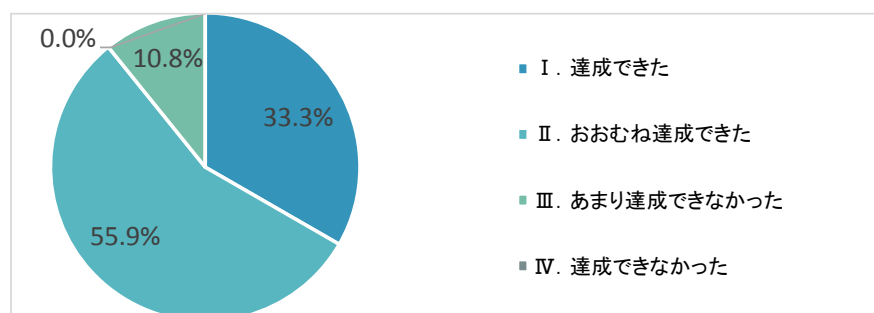
- ・マレーシアやマレーシア人について自分の目で見て、耳で聞いて、いろんな面白い発見ができ、有意義な時間を過ごすことができたから。
- ・英語を勉強する意欲が高まったため。
- ・内容はとてもよいと思いますが、人により能力の向上度に差が生まれやすいと思いました。
- ・プログラムが濃く、充実した異国体験をできたことに強く満足している。英語を学ぶ留学として考える自主性が強かった。
- ・台風で予定通りには行かないこともあったが、様々な良い経験ができたため。
- ・ハンブルクで生のドイツ語を学び、ドイツの生活について知ることができたから。
- ・自分で考えた活動だけでなく、学校側からも何かしらの活動指示などをしてほしかった。
- ・ホテルの都合や台風の影響により予定通りには行かなかった。
- ・あまり予想していたようなボランティア活動をするのができなかったから。
- ・ベトナムでボランティア活動をしたことで、ただ旅行するだけではできなかったことをたくさんできたと感じている。貧困のため水上生活をしている人々や障害のある子供たちやその先生に話を聞くことができてよかった。しかし、ボランティアの内容が事前に聞いていたものと大きく異なっていたので残念に思う部分もあった。
- ・とてもいい経験ができたので参加して良かったです。もう少し自由時間が欲しいと思いました。
- ・とても刺激的で、予想より遙かに面白い経験ができたから。
- ・様々な貴重な体験ができ、子供達と触れ合うなど、村での生活の実践的な活動をするのができたから。
- ・少人数だったのでとても細かくサポートしていただけた。
- ・自由な時間が多く、自分たちでプランを立てることもできておもしろかった。過去には実施していたという大学訪問ないし講義の受講があったならば、現地の学生と話す良い機会になると思った。
- ・自分のことをより考えられる時間になってよかった。ただ GCP で海外に渡航することは将来の選択に生かすための手段であり目的ではないと思うので、今後どのように経験が生きてくるのかわからないため。

<あまり満足していない>

- ・現地の人との交流機会が少ない。

(2) 学修成果について

● 目標どおりの成果が達成できましたか。



I	34	33.3%
II	57	55.9%
III	11	10.8%
IV	0	0.0%
計	102	100.0%

<達成できた>

- ・英語を使って3週間ホストマザーや大学の先生、生徒とコミュニケーションをとることができた。様々な食文化も学ぶことができた。
- ・聞き取る力が大幅に伸びた。
- ・興味のある多民族共生について現状を知ることが出来たし、苦手意識のあったリスニングに関しては、苦手意識が薄まったから。
- ・自由時間を十分に使って、自分の興味のある場所に行ったり考えたりする時間を得られたから。
- ・食文化に直接触れて詳しく学ぶことができたから。

- ・目標として英語力の向上をあげていたが、語学学校やホストマザーとの生活を通じてそれを達成することができた。また、ほかの目標として、多文化性に触れることで日本での多文化共生を考えるというものを挙げていたが、それも達成できたから。
- ・午前中は楽しく授業に取り組み、午後には自分の時間もしっかり取ることができたから。
- ・英語能力はもちろん、英語をツールとして多くの人々とコミュニケーションをとることに対する抵抗感をなくすことができたから。
- ・プログラム中はもちろん、帰国後も様々なことをじっくり考えるようになった。
- ・チャレンジを応援するような雰囲気だった。それぞれ参加者の個性を大切にしてもらえた。
- ・自分からコミュニケーションを積極的にとり、異文化を受容できた。
- ・特に何も考えず、楽しめられればいいと思い申し込んだが、想像以上に得られたものが大きかったため。
- ・目標としていた異文化への理解や英語でのコミュニケーション力の向上、グローバルな企業で活躍している人たちについて知ることは達成できたと思う。しかし英語に関してはまだまだだと感じたのでさらなる向上を目指して努力していきたい。
- ・現地の学生と交流することが目標だったので、十分に達成できたと思う。
- ・帰国後の留学生との交流でリスニング力の向上を実感し、もともと関心があった農業、食品について海外でしか気づけない新たな知識を得られたから。
- ・英語の能力は向上したため。
- ・英語が上達したから。
- ・以前よりも英語を話すときに緊張しなくなったから。
- ・心底楽しくて、もう日本には帰りたく無いとさえ思える留学となったから。
- ・英語を使って積極的に会話に参加できた。
- ・英語を話す機会が多く、自らが思っていたよりも積極的に話すことができたから。
- ・自分の英語能力の程度に気づくことができ、改善もできたから。
- ・一人で買い物や散策に出て困らない程度の語学力を習得できたと思うから。
- ・ドイツの文化や歴史を、ハンブルクやベルリンといった都市で感じることもできたため。
- ・語学や、異文化が、自分の力になったと感じているから。
- ・ドイツ語が向上したから。
- ・海外でインターンシップをすることで、想像以上の経験ができたから。
- ・一生懸命取り組めたと思います。
- ・自分の世界と違う世界を見てみたくて参加したのだが、実際行ってみてたくさんのことを感じることができたから。
- ・目標である植物観察を達成することができ、その成果もまとめ上げることができたから。
- ・僧院、パゴダを訪れる機会が多く、また実際に僧の方と話す時間もあった。托鉢を見学した際も現地の人と話すことができ、宗教に対してのイメージがかわった。
- ・ミャンマー 人のことを理解できたり視野を広げることができたから。
- ・仏教、または宗教というものの理解を深めるとともに、それを拠り所として生きる人々のあり方を体感することができたから。

＜おおむね達成できた＞

- ・ほぼほぼ達成できたのですが、もう少し現地の大学の授業に参加してみたかった。
- ・自分がやりたいと思っていたことは大体できたけれど、インタビューをするという目標は達成できなかったから。語学力がもっと必要だと感じた。
- ・積極的に、芸術鑑賞や、学生とのコミュニケーションがとれたから。
- ・インタビューという一番の課題を達成できたことは良かった。
- ・アメリカの食文化について、初めて学んだことがたくさんあったから。有名なスーパーに行ったり、学食を観察したり、渡航前に設定していた、しようとしていたこともできたから。

- ・ 3週間という比較的長時間の滞在だったため、自己学習、グループ学習共に達成するのに十分な時間があつたから。
- ・ 今回は漠然と自分の価値観を広げることを目標としていたので、度重なるカルチャーショックを受けたことで、考え方も少しは柔軟になったと思っている。
- ・ 美術館博物館の時間を甘く見ており、回りきることができなかった。
- ・ 英語で会話することにあまり恐れを抱くことも無くなり楽しめたから。
- ・ フィールドワークについては考えていた通りに行えたが、英語能力、とくにスピーキングの力はあまり伸ばせなかった。
- ・ 自分が決めたテーマのフィールドワークを進めることができ、授業では英語で意見を伝える練習ができたから。
- ・ 様々な人とコミュニケーションをとったり自分でリサーチしたりできたから。
- ・ あまり、地元の人々としゃべられなかった。
- ・ まだ試験など受けていないため。
- ・ 英語を話す機会に恵まれていたため。毎日必ずどこかを訪れることを心がけていたので、たくさんの場所に行くことができ、充実したフィールドワークになったと感じた。
- ・ 現地で調査する予定だったフィールドワークのテーマに関してはあまり進まなかった。決して少なくはない人数にインタビューを試みたが、回答内容に多様性がなく、どれも似たような内容だった。しかし、現地に関するそれ以外のたくさんのことを学ぶことができたので結果としては良かった。
- ・ 語学力など、まだまだ達成できてない部分もありますが、その他の目標に関しては概ね達成できたと思います。
- ・ スピーキング能力の強化を目的としており、確かに一か月間は短く、顕著に能力の向上を感じることはできなかったが、積極的に口から英語を出す機会が得られ、頑張っただけで自分の感情や言いたいことを自分の知っている単語や文法でいかに伝えるかということに関する努力をし、日常生活において、何が表現できないのか、どんな言葉をよく使うか知ることができ、とてもいい勉強になったように思うため。
- ・ 伸ばしたいと思っていた、英語でのスピーキングができるようになったから。
- ・ 一番の目標であった語学の上達は、スピーキングやリスニング能力が以前より上がったと実感している。ただ、まだ自分の目標のレベルまでは達していないと思うため、「おおむね達成できた」を選んだ。
- ・ 毎日のミーティングを通して、自分の考えを整理したり、他人に伝える練習ができた。
- ・ 積極的にコミュニケーションが取れたから。
- ・ 外国人とのコミュニケーション、海外を見学する自己の目的、また大学側が習得してほしいと思っているであろう能力や技能、知識をおおむね達成できた。
- ・ 海外の大学の雰囲気や授業の形、物事に対する考え方の違い等を知ることができた。
- ・ 英語力の向上とまではいかなかったが、危機感を実際に感じる事ができ、本気で英会話を学ぶことを決めることができた。また、台湾大学の学生の学ぶ姿勢に刺激を受け、自分も食わず嫌いにせず様々なことに打ち込み、成長していこうと思った。
- ・ 仲間と協力し、目標を達成できたから。
- ・ 自分の英語力について把握できた。自分の思考の弱さや将来の展望のなさに気づくことができたから。
- ・ 海外の方々から刺激をうけ、自分のモチベーションとすることができたため。
- ・ フィールドワークでは自分の知らない分野のことも多く知り、メンバーと協働することを学んで目標達成できたのではないかと思います。もっと英語力が伸びると思ったが日本に帰ると結局そのままになった。
- ・ 色々な人に話しかけて友達を多く作り、英語でのコミュニケーションを多く取ろうという目標を持って行ったのですが、やはり緊張してしまうこともありました。しかし、概ね達成できたと思います。
- ・ 5人での協力、フィールドリサーチでの実践がよい経験になったが、伸ばしたかったスピーキング力、リスニング力向上に適切だったかは自信がないから。
- ・ 英語が今までより特別上達したという実感はありませんが、自分の英語でコミュニケーションが取れたという経験と自信を得られました。
- ・ 英語のリスニング力がある程度上がったため。
- ・ 英語を1日中聞くことはなかなかないのですごく新鮮でした。

- ・異文化を知り、自分の視野を広げるという目標は達成することができました。しかし、語学力の向上の方は、私自身の姿勢の問題から、不完全であったと認識しています。
- ・今まで英語を日常で使うことはありませんでしたが、今回のコースでは facilitator とは英語でしか意思疎通が図れなかったのが英語を使ったコミュニケーションをとる訓練ができました。
- ・英語が苦手な私にとって留学前に立てた目標を達成するには3週間では少し短く、もう少し同じ環境で学び続けたいとも思ったが、英語を学ぶことに対するモチベーションは格段に上がって、今後も自分で英語力を向上させることができる自信を持てたから。
- ・目的の一つであった発音の向上が不十分だったから。
- ・現地の先生や大学生が熱心に英語の発音や表現方法を教えてくださったから。
- ・フィリピンのことについても英語を話すことに関しても、以前よりは知ることができ、使うこともできたが、もう少しいろいろなことを話したり体験したりしたかったため。
- ・ドイツ人とドイツ語で話してフィールドワークの内容について質問することができたから。
- ・基本的には良かったが、大学での講義をもっと受けていればよかったと思う。
- ・とりたい講義はとれた。実験も取れるとよかったなと思う。
- ・人間性の部分では積極的に発言するなどいい影響をたくさん受けられて成長できた。英語力もかなり上達したと思っているがまだリスニング力はもっと上げるべきだと感じた。
- ・とても楽しかったが、もう少し英語を話せるようになりたいと思ったから。
- ・見聞を広めるというのが目標の概要であったが、ネイティブの연구원や日本人研究者の先生達とお話することができて、様々な考えに触れることができたから。
- ・現地の人とたくさん会話をしたことでベトナム人の日常生活や中秋節の祭りがベトナム人にとってどのような存在なのかを知ることができた。日本人ボランティアとベトナム人のみでの活動になってしまったため、ベトナム以外の人との関わりや文化の理解といった点は達成できなかった。
- ・一年生のときに海外に行って大学生活にいかそうと思ってコースに参加した。自分の長所、短所を見直すきっかけになった。初めての海外がとても新鮮でよい経験になった。
- ・積極的に子ども達との活動をすることが出来たと思うが、コミュニケーションは、英語がうまく伝わらず、堂々と発言することができなく、課題となった。
- ・自分のテーマについて、塾考することができた。
- ・見学などを通して大方は達成できたと思う。
- ・安全にいろんな場所を体験するところできた。
- ・自分なりのリサーチクエストに対する答えをまとめられたが、まだまだヨーロッパについて知らないことがあると思うから。
- ・植物観察は、花や実をつける時期ではなかったため予想以上に同定作業が困難で、進まなかった。実際にミャンマーに入国したため、タイとの国力の差を実感した。タイで働く日本人の方々や、神戸大学の留学生であつたタイ人の方からお話を聞くことができた。これもまた、タイ文化の理解につながった。
- ・渡航前の目標は達成出来たが、現地に着いてから新しくできたことは時間が足りずやり残したから。
- ・日本と違う文化圏に入り生活したことは、今まで当たり前だと思っていたことが覆されるのでとてもいい経験だった。仏教文化に触れられたのも大きい。自分のことが考えられたから。また経済の発展に関しても、ミャンマーの発展はとてもすごかった。ただこちらに関しては日本にどう生かせるかまだ見いだせていないため。
- ・日本の大乘仏教とは歴史や習慣が違うテラワダ仏教を人々の生活や寺院への訪問を通して、少しでも理解することができた。これからも日本の仏教との相違点をしっかり把握した上で、より深く理解していきたいと思う。

<あまり達成できなかった>

- ・あまり、人と交流できなかったから。
- ・あまり積極的に英語を話す機会を得られなかったから。
- ・21歳以下だったので行動が制限されたから。
- ・一ヶ月で語学を目標の水準まで向上させるには無理があつたため。
- ・新たな課題発見により目標設定自体が不十分であつたと感じたから。

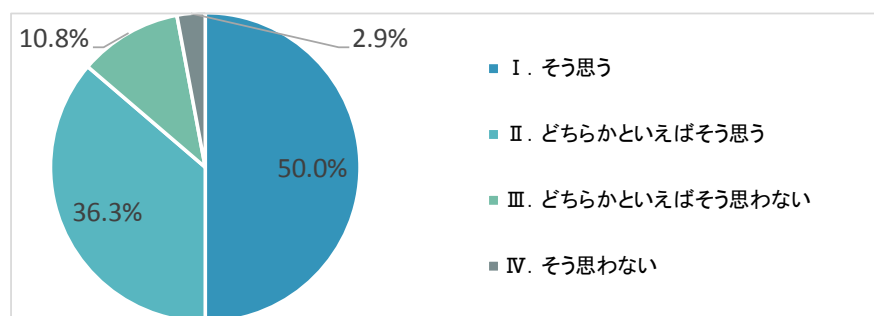
- ・ ELC に日本人学生が多く、英語を学びにわざわざマレーシアに来た意味がないと思ったから。
- ・ まだまだ自分から積極的に英語を使うことができたと思う。
- ・ フィリピンでの友人を作り、現地の学生と多く話すことはできたし、楽しかったけれど、もっと深い関係にはなれなかった。リスニング能力が向上したがスピーキング能力においてはまだ簡単なことしか話せず、日本に いるときのように言いたいことを言葉にできないもどかしさが強く残った。
- ・ ドイツ=環境の概念に寄りすぎていた。また、初海外というのもあって、生活に馴染むので前半はいっぱいいっぱいだった。
- ・ 英語力を向上させたかったが、自分の英語に自信が持てず積極的に他国の人に話しかけることができなかったから。
- ・ 自分で設定したテーマについてはあまり学習できなかったから。

(3) プログラムへの要望について

- ・ 新しいというよりはこれからも続けて欲しいという点について述べさせていただきます。移民博物館の EllisIsland だけは今後もプログラムに入れることをお勧めしたいです。このコースならではのものです。
- ・ 現地の学生と一緒に学ぶ授業を含むプログラム。
- ・ ホームステイ先から大学や、タイムズスクエアが遠かったのだが、同じホームステイ先の子と授業がずれていたため、一緒に行動するのが難しく、帰り道が心細かったことから、授業はホームステイのペアで同じにするべきだと思った。
- ・ 現地の学生と交流できる機会。
- ・ もう少し長期の留学。
- ・ 私のように教員免許を取る予定の人は海外で学びたいという意思があっても履修の問題で長く渡航することができません。その他様々な理由で、交換留学などでしっかりと向こうで学習したくてもできない人もいます。そういった人のために、短期間でも十分に学べる学校の選択肢を増やしてほしいです。
- ・ 語学研修のほかにも現地の学生と Language Exchange をしたり、年の近い学生と一対一で仲良くなったり関われる要素があってもおもしろいかなと思います。そうすることで実際に英語を使うことができ、また、語学研修先では日本人が多かったりするというのもあるため、そのような機会があれば英語力向上につながるかとも思います。(現地で Language Exchange の情報を自ら得ることができたのですが日にちがなく、できなかったの。)
- ・ バングラデシュにおける生活環境。
- ・ 神戸での外国人留学生との交流機会 (工学部はとくに時間割や勉強がタイトなので、空いている時にでも)
- ・ マレーシアコースで、現地の大学生と交流する機会があると面白いと思うので、大学生のテスト期間に被らないように時期を前倒して、文化交流や意見交換などでできれば良いと思う。
- ・ 生物学を海外で学ぶコース。
- ・ 今回のプログラムに加えて、ホームステイなどで四六時中英語を話さなければいけない環境があればいいと思う。
- ・ TOEIC や TOEFL の受験を最後に据えた実用英語の集中的でハードスケジュールに英語の試験漬けになプログラム。受験後のフィードバックを終えるまで厳しく、全過程終了後に異国体験を楽しむ。
- ・ 農学部のようにギャップターム制がなくてもいけるような中期の留学。
- ・ 実際に研究所など専門的な場所で見たり勉強したりしたい。
- ・ 現地で、課題を見つけて、それに取り組むところまで含めたより長期のボランティアプログラム。
- ・ 2、3 か国回る研修に行ってみたいです。
- ・ 同プログラムにもっと学生と交流する時間を増やして欲しい。

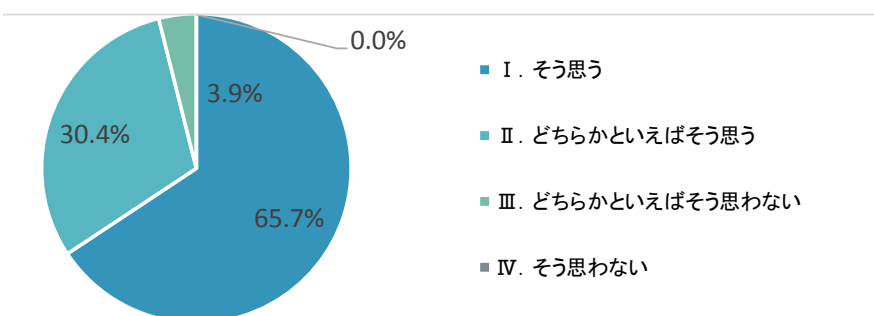
(4) さらなる留学等について

●神戸GCPの参加を契機として、より長期的な留学等に挑戦したいと思いますか。



I	51	50.0%
II	37	36.3%
III	11	10.8%
IV	3	2.9%
計	102	100.0%

●関心を持ったテーマについて、より深く学修したいと思いますか。



I	67	65.7%
II	31	30.4%
III	4	3.9%
IV	0	0.0%
計	102	100.0%

3-3. 大学教育再生加速プログラム(AP)平成30年度フォローアップ報告書

「平成29年度実施状況報告書」を提出し、その評価結果について、平成30年12月28日に「大学教育再生加速プログラム(AP)平成30年度フォローアップ報告書」を受領した。今後は、改善を要する点として記載されている内容を確認するとともに、フォローアップ調査及び事業終了後の事後調査で問われることとなる、AP事業の必須指標及び独自の事業目標に対する達成度(資料1)についても分析・対応を進めていく必要がある。

※平成31年度はフォローアップ調査あり

(資料1) 必須指標及び独自の事業目標に対する達成度(平成29年度実施状況報告書より抜粋)

2. 達成目標と事業内容(3ページ以内)※【取組内容・成果】については1ページ以内

【定量的な数値目標の達成状況】

テーマにおける必須指標		27年	28年度		29年度		30年	31年
		実績	目標	実績	目標	実績	目標	目標
長期学外学修プログラムに参加する学生の割合	全学生	—	1.61%	0.98%	1.77%	0.85%	2.17%	2.53%
	1,2年生	—	3.12%	2.17%	3.97%	1.78%	4.82%	5.67%
長期学外学修プログラムを経た学生の成績評価		—	0.20	0.04	0.27	0.27	0.34	0.41
退学率		1.12%	1.03%	1.21%	1.03%	1.17%	1.00%	0.98%
学生の授業外学修時間	全学生	—	5.8時間	7.3時間	6.0時間	7.6時間	6.2時間	6.5時間
	プログラム参加学生		7.6時間	6.5時間	8.0時間	8.8時間	10.1時間	12.0時間
進路決定の割合		92.11%	92.37%	94.14%	92.51%	94.80%	93.37%	94.09%
学生が企画する活動数		37件	72件	52件	100件	108件	124件	150件

本学の独自指標		27年	28年度		29年度		30年	31年
		実績	目標	実績	目標	実績	目標	目標
長期学外学修プログラムに参加した学生がプログラム終了後に身に付けた能力「チームワーク力」「自己修正力」「課題挑戦力」	水準2に達した学生	—	37.5%	78.3%	50.0%	56.6%	62.5%	75.0%
	水準3に達した学生	—	0.0%	26.1%	10.0%	23.7%	20.0%	30.0%
プログラムに参加後、在学中に留学を含む海外での学修活動に参加した学生の割合		—	5.0%	0.0%	20.0%	20.2%	35.0%	50.0%

【取組内容・成果】

＜進捗状況（■：必須指標 ●：独自指標）＞

■長期学外学修プログラムに参加する学生の割合

単位を授与する長期学外学修プログラムについて、平成 29 年度の参加者も目標値を下回る結果となった。引き続き本プログラムの広報活動を行い、更なるコースの拡充を目指し、参加者の増加に繋がるよう努力する。

■長期学外学修プログラムを経た学生の成績評価

本プログラムの参加者と不参加者の GPA を比較した結果、目標値を達成できた。参加者の成績評価の推移は良好であり、プログラム参加が学修意欲の向上に繋がったと言える。

■退学率

近年、本学の退学率は 1 % 台前半で推移しており、平成 29 年度は微減した。成績不振による退学者を出さないために、平成 28 年度から、全学部において、GPA を成績不振の基準の 1 つとして活用し、成績不振学生への修学指導に取り組んでいる。

■学生の授業外学修時間

平成 28 年度から、全学部生の学修時間を調査する「学修の記録」を導入し、高い回答率を得ており、学部生の学修時間のおおよその実態を把握できている。平成 29 年度は全学部生・プログラム参加学生とも目標値を上回った。今後もアクティブラーニングの導入等、教室内外での学生の主体的な学びの充実を図る取組を予定している。

■進路決定の割合

好景気という社会的状況の中、平成 29 年度も引き続き目標値を上回る結果となった。今後も就職率を維持・向上させるため、学内外の就職支援組織等と連携し、更なる充実を図っていく。

■学生が企画する活動数

平成 29 年度は目標値を達成できた。ボランティア等の活動数が着実に増えてきており、プログラム参加者による一定の波及効果が感じられる結果となった。今後も様々な分野の交流の場としてラーニングコモンズの活用を進めるなど、学生が積極的に企画を推進できる環境の充実等に全学的に取り組んでいく。

●プログラムに参加した学生がプログラム終了後に身に付けた能力「チームワーク力」「自己修正力」「課題挑戦力」

ルーブリック指標を用いて経年変化を測定した結果、水準 2 に達した学生は 56.6%、水準 3 に達した学生は 23.7% となり、いずれも目標値を上回った。平成 28 年度はプログラム初年度にあたり、参加直後の評価だったため高い値であったが、経年変化においても、目標を超える値が得られており、プログラム参加経験が各能力の向上に繋がったものと思われる。今後も各能力水準の維持・向上に努めていく。

●プログラムに参加後、在学中に留学を含む海外での学修活動に参加した学生の割合

平成 28 年度参加者のうち、平成 29 年度までに本プログラムの別コースへ再チャレンジした者が 7 名、その他短期プログラム・長期留学等に参加した学生もあり、目標値を達成できた。平成 30 年度以降も再チャレンジする学生が複数見られ、またプログラム参加後アンケートの「神戸 GCP の参加を契機として、より長期的な留学等に挑戦したいと思いますか。」という問いに対して、9 割近い参加者が「そう思う（どちらかといえばそう思う）」と回答しており、今後も目標値の達成が期待できる。

3-4. プログラム全体の自己評価総括

(1) 自己評価総括

【自己評価】4：計画を十分実施できた

プログラム全体の実施状況（2-1）、平成30年度実施コースの各取組状況（2-2）、ループリック指標に基づく参加学生の自己評価（3-1）及びプログラム参加後のアンケート結果（3-2）により本プログラムの実施状況を点検した結果、多くの学生は本プログラムへの参加を通じて「課題発見・解決能力」の必要性に気づき、「学びの動機づけ」を得て「主体的な学修姿勢」を身につけており、神戸GCPの目標達成に向けた活動は計画どおり進行している。

(2) 課題への対応状況

昨年度の自己点検・評価では、今後の課題として「① シンポジウム開催による社会への情報発信」「② テーマⅣ幹事校の新潟大学が中心となり進めている書籍出版への協力（執筆）」「③ 学内の教員・学生へのプログラムの周知」の3点を挙げた。①については、平成30年11月3日に公開シンポジウムを開催し、学内外から約100名の参加があった。学生の発表を中心としたプログラムを構成し、参加者から非常に好評であった。②については、本学のプログラムについて執筆し、『長期学外学修のデザインと実践：学生をアクティブにする』（東信堂）として令和元年5月10日に出版に至った。③については、春秋に従前より実施していた全体報告会・パネル展示を強化するとともに、入学前に開催される新入生オリエンテーションで新入生・保護者向けにプログラム説明を行うことで、プログラムの周知に努力した。また、高校生向けのチラシを新規に作成し、オープンキャンパスや高校訪問時に配付できるようにした。

(3) 今後の課題

①参加者数の増加

プログラム参加者数については年々増加しているが、依然として目標値には達していない。「大学教育再生加速プログラム（AP）平成30年度フォローアップ報告書」でも、達成目標に関わる課題として、「長期学外学修プログラムに参加する学生の割合については、平成28年度実績よりも後退しており、かつ目標値を下回っていることから、対応が必要である」と指摘されている。参加者が増加するように、魅力的なプログラムの充実、経済的支援の充実、広報活動に尽力したいと考えている。

②プログラムの継続・充実

平成31年度が事業最終年度となるが、参加学生の感想等から、低年次での国際的なフィールドでの体験は、非常に有益と確信している。そこで、学内の様々な海外プログラムとの有機的な連携について、大学全体として引き続き検討を進めていきたいと考えている。

以上、次年度以降はこれらの課題に対応しつつ、現在の取組のさらなる充実を図り、本プログラムの発展・目標達成へと繋げていく計画である。